「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫　21-7

ムーミンパパ海へいく

トーベ＝ヤンソン

小野寺百合子 訳

1985年7月10日　第1刷発行
1999年6月23日　第22刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号112-8001

電話　出版部　(03)5395－3536
　　　販売部　(03)5395－3625
　　　製作部　(03)5395－3615

N.D.C. 993　318 p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

© YURIKO ONODERA　1985

Printed in Japan

本書の無断複写(コピー)は著作権法上
での例外を除き, 禁じられています。

ISBN4-06-147051-5　(児二)

(落丁本・乱丁本は、講談社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。)

■この本についてのお問い合わせは, 講談社児童局
「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ＝ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以後「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いている。

＊訳者紹介

小野寺百合子（おのでらゆりこ）

1906年，東京に生まれる。東京女高師付属高女専攻科卒業。夫とともにながく北欧諸国に滞在。「ムーミンパパ海へいく」，リンドグレーン作「エーミールと60ぴきのざりがに」など北欧児童文学の翻訳多数。1998年４月没。

の創造が可能であることを示唆していると思われるのです。

ムーミン童話は、文明にがんじがらめになっている現代人に向けられた人間解放のためのメッセージのような気がします。われわれは、見る、聴く、かぐ、味わう、感じる、考える、直観する、感じとる、意欲する、活動する、愛するという、人間としての感覚をどれほど深く身につけているでしょうか。

（一九八五・五・二一）

の衝突などの天変地変にみまわれ、異族の侵入を受け、モラン、氷姫、飛行オニ、ニブリング、アリジゴクなどの魔ものと遭遇し、たえず、生命の危険にさらされています。したがって、ムーミン谷は、肉体的・精神的危機をかかえているという点で人間世界と似ているといえましょう。

ムーミン童話では、これらの危機は、ムーミンたちとムーミンの友だちによって解決されていきます。ムーミンの友だちというのは、熱中して生きていけるものを持っている点でムーミンたちと似ていますが、ムーミンたちほど他者に対する関心が強くありません。ムーミンたちとムーミンの友だちは、これらの危機を、解決するんだという意志によって解決したのではありません。自分勝手に動きまわるだけです。つまり、自他のいのちをいつくしむ感覚を深くした自由人と、自分のいのちを燃焼する喜びを感じている半自由人が、独特な個性を発揮して「わが道」を生きまくるだけです。

ムーミン谷という世界は、多様で強烈な個性からなる世界の創造が可能であることを示唆しているように思われます。

ムーミン谷という世界は、また、生きるものの精神的・肉体的危機を克服し、その発生を防ぎ続ける力を内包するような世界の創造が可能であることをも示唆しているようにも思えます。つまり、ムーミン谷という世界は、生きものを自由にし解放し続けていく世界

台所の下の住人や海の底の土中にすむ虫や、こけや、木や花にさえ限りない関心を寄せているムーミンたちの、この感覚は、ほとんど頂点に達しているように思われます。

しかし、ムーミンたちは、同時に自分たちのいのちをもたいせつにしています。みんな、熱中できるものを持って生きているからです。ムーミンが冒険に、ママがバラや家族の者をいきいきとさせていくことに、パパがヨットや自伝の執筆にと、それぞれが傾けている情熱はなみのものではありません。失敗し困難に直面しても、考え工夫して克服していく様子は、いきいきとしています。ムーミンたちは、自分のいのちを輝くばかりに燃焼しているといえましょう。

自他のいのちをいつくしむ感覚に満ちて生きているムーミンたちは、ハコヤナギやハイ虫やこけが自分らしく生きているように、三人三様の個性の花を咲かせているように思えてなりません。このとき、ムーミンたちは、もっとも深い感動をもたらす〈自由〉を手にしているのではないでしょうか。

ムーミン谷には、容姿、欲求、性格、生活習慣、感覚を異にする、多くの種族の無数の生物がすみ、欲望が渦巻き、悩みも多く、いきいきと生きていけなくなる生きものが続出しています。また、ムーミン谷の住人は、大洪水、火山爆発、地震、竜巻、彗星と地球と

ると、隠れてひそかに防戦の準備をします。しかし、敵意を感じたり、攻撃をしかけたりはしません。ムーミンは両親とは違っていて、気持ちの底に、友だちになりたいという願望があるらしく、逃げたり隠れたりしないで、さりげない様子で、やりかけていたことをし続けています。そうして、何回か出会っているうちに、心を通わせることに成功することがあります。凍結魔モランがその例です。

第三に、ムーミンたちが他の生きものの生命をおびやかすときの態度ですが、これも独特です。自分たちが生きていくために、煙突の中にかけられた鳥の巣を取り除いたり、多くのアリを殺さなければならない事態に直面すると、彼らは苦悩します。しかし、結局は、殺生の道を選びます。ですから、苦悩することは、ナンセンスである、理屈に合わない、偽善である、などと非難されても弁解の余地はないでしょう。しかし、日常生活で当然のことのように行われるこの種の殺生を、当然のこととわりきれずに、痛みとして受けとめる者は、いのちの重さということを、知識としてではなく、感覚として受けとめているといえるのではないでしょうか。

この感覚なくして、どうして、突然の見知らぬ訪問者が自由にしていられるようにという気持ちが生まれてくるでしょうか。また、こわい生きものにさえ関心を寄せないではいられなくしているのも、同じ感覚でしょう。

ムーミン屋敷へやってきます。

冬眠中にたまたま一人起きていたムーミンは、家を開放し、食べ物を次から次にふるまう。やがて、家族が冬眠あけに食べる分がなくなりそうになり、これ以上出すか出さないか自問する。夜、一人になって、ムーミンは、「みんなのいのちが危ないぞ。あとひとビンなくなっても、家族がこれほど危なくなることはないだろう。」と考える。

ムーミンは明らかに、最後のぎりぎりまで、家族のものと虫たちのことを同等に考えようとしているといってよいでしょう。
また、ママは、あるとき庭のすみにある穴ぐらへ向かってネズミらしい生きものが走っていくのと、みかけないスーツケースが玄関前にほうり出されているのが目にとまると、すぐに、ベッドの用意をパパに頼みます。

つぎに、家の外で生きものに出会うときの態度ですが、これも独特です。危害を受けそうにない生きものに出会うと、ムーミンたちは、だれとでもあいさつします。そのまま話しこむこともしばしばあります。また、一風変わった人間や、こわそうで危害を受けそうな生きものに出会っても、避けたり無視したりせずに、あいさつは送っています。また、危険だとあらかじめわかっている生きものに出会うと、パパとママは、やはり、避けたり毛嫌いしたりせずに、あたらずさわらずにしておきます。それでも、襲われる危険を感じ

真夜中にもの悲しそうな声がきこえ、ムーミンパパが外へ出てみると、玄関口に、大雨で家を失ったジャコウネズミがずぶぬれになってうずくまっていた。自称哲学者のジャコウネズミは泊めてほしいともいわない。ベッドを用意するから中へお入りくださいといわれても、ベッドなどほしくないという。しかし、「りんご酒を一ぱい、いかがですか。」と誘われて、「せっかくじゃから。」と、応じる。家の中へ入ったあとも、偏屈なジャコウネズミは、すこしも遠慮することなく、自分らしくふるまっている。ムーミンママもムーミンも起きてきて、みんなで乾杯する。その夜ジャコウネズミは泊まり、その後もずっと、ムーミン屋敷に住みついてしまう。

ここでは、困っているから助けてほしいという依頼もなければ、困っているときはお互いさまといって助ける意識もありません。にもかかわらず、たしかに、ひとつのいのちが救われています。これは、もはや「助けてやる、助けてもらう」という関係ではなく、いかなる負い目をも相手に感じさせない、完全な一対一の関係であるとみてよいでしょう。これによって、ジャコウネズミは、あるがままの自分を発揮していられるようになりました。パパのさりげないひと言がこの状況を生み出しました。パパは、感覚的に、相手の自由を束縛できないようです。

また、あるとき、飢饉をのがれて、変てこな小さい虫のハラペコ大群が未知の世界から

解説…ムーミン感覚

高橋静男
（フィンランド文学者）

ムーミン童話のすばらしさがムーミンたちのユニークな優しさにあり、その優しさの源泉が〈自他のいのちをいつくしむ＝生命愛〉にあることについて、これまで、ずっと、本シリーズの解説に書いてきました。今回は、作品を通してそれらを明らかにし、この優しさの質について考えてみたいと思います。

作品を通してといっても、スペースの関係がありますので、生きものに接するムーミンたちの態度をみつめていくことにします。

まず、見知らぬ生きものが突然ムーミン屋敷へやってきたときの態度ですが、かなり独特です。相手を疑ったり、目的をたずねたりせず、頭から泊まっていってもらうつもりでいます。だからといって、とくに歓迎するわけでもなく、お客さん扱いすることもありません。そのかわり、相手のプライドを傷つけないようにし、個性を尊重し、主と客の関係が生まれないようにし、生きものどうしの関係が生まれるように応対しています。

をたてて波がうちよせ、むちゃくちゃにあわをたてたてあばれます。それでいて、またふしぎとしずかなんです。

ムーミンパパのしんぱいはすべてかききえてしまって、耳のはしからしっぽの先まで、生気があふれてきました。

パパがふりかえって、自分の島を見わたしたとき、海にむかって一すじの白い光がさしているのを見ました。その光は、長い規則正しい波となって、遠い水平線の方へ動いていっては、また海岸の方へもどってくるのでした。

明かりがついていたのです！

ムーミンパパとムーミントロールが灯台岩へ出てきますと、細い三日月が東南の空高く出ていました。新月にはいったところで、これからだんだんと暗い秋がはじまるのでした。ふたりはヒースの方へと歩いていきました。ムーミントロールはいいました。
「ねえパパ、ぼく、砂浜でちょっとないしょの用事があるんだよ。知りあいに会わなければならないんだ。」
「いいとも。じゃ、あすまたね。」
と、ムーミンパパはいいました。
「じゃ、さよなら。」
と、ムーミントロールはいいました。
ムーミンパパは、浜べの方へおりていきました。でも、ウイスキーのことも、みさきのことも、とくに考えてはいなかったのです。みさきなんかはいくらでもありますから、一つや二つがどうなったって、たいしたことではないんです。
パパは水ぎわまでやってきて、くだける波を見つめて立っていました。そこにパパの海がありました。あとからあとから、ザアーッと音



こう、灯台もりはいいました。
「すこしたったら外に出て、天気のようすをみてこようかと思うんだが、ボートはだいじょうぶだろうか。」
ムーミンパパは、パイプをつめながらいいました。
「しんぱいしなさんな。いまは新月なんだよ。潮はこれ以上高くはならんさ。」
と、灯台もりはいいました。
三番めのろうそくも燃えつきて、たきぎの火の明かりだけが床をてらしました。
「あなたのシーツをあらっておきましたよ。まだ、まるできれいでしたけれど。あなたのベッドはもとからの場所にありますよ。」
と、ムーミンママはいいました。
「それはどうもありがとう。今夜は灯台のてっぺんで、ねるつもりなんだ。」
灯台もりはテーブルから立ちあがりながら、いいました。
みんなはおやすみなさいをいいあいました。
「みさきの方まで散歩しようか。」
こう、ムーミンパパがいうと、ムーミントロールはうなずきました。

ちびのミイの小さく光る目は、ひとりずつ順々にみんなを見ていきましたが、ものすごくたのしそうでした。なにかとっぴなことをいいだしそうな感じでしたが、けっきょくなにもいわずじまいでした。

二本のろうそくは燃えつきて、ケーキの上にとけて流れました。外は暗くなり、風はまだ島の上をふきまくっていました。しかし、塔の中は平和でした。ムーミン一家がこんなおだやかなパーティーをしたことは、ついぞなかったほどでした。

モランのことが、ムーミントロールの心をかすめましたが、もうあのおばさんのことは、自分がしんぱいしなくてもいいのだと思いました。

あとでふたりは、いつもとおなじように会うことになっていましたが、かならずしもその必要はなかったのです。とにかくムーミントロールは、モランが失望しても、もうしんぱいないのを、知ってましたから。

ムーミンパパが、とうとう口をきりました。

「おい、きみのところのみさきに、わしのウイスキーが一箱あるんだがね。風はじきにやむと思うかね。」

「さあね、南西風のつよいやつがふきだしたらさいご、おさまるまでに何週間かかるか、わかったもんじゃないよ。おまえの箱はそのままちゃんとあるさ。」

ぢゃわんのところへもどってきていいました。
「もうすこしコーヒーはないかね。」
　ムーミンママはストーブのところへとんでいきました。
　みんなそろってまたテーブルにつきましたが、話題はなかなかうまくみつかりませんでした。
　灯台もりは家族たちがすこしはずかしそうに見まもる中で、ケーキを一きれ食べました。
「わたし、ここにちょっとばかり絵をかいたんですよ。」
　ムーミンママはおずおずといいました。
「そうだね。」
と、灯台もりはいいました。
「陸地のけしきか。かわりばえがしていいと思うね。それにうまくかけてるよ。ほかのかべにはなにをかくつもりだね。」
「地図をかこうと思っているんです。この島の地図ですわ——島の岩や浅瀬、それからたぶん、海の深さもいれます。主人は海の深さをはかるのがとくいなのですよ。」
と、ムーミンママはいいました。
　灯台もりは大きくうなずきました。ムーミンパパはとても満足でしたが、まだなにかいうまではいきませんでした。

からな。」
「わたし、まどの外にぶらさげたらと思っていたんですよ。まだそこまでいかなかったのですけど……。」
と、ムーミンママはべんかいがましくいいました。
漁師はたんすの前につっ立って、鏡に見いりました。ムーミンパパの帽子を見つめて、それをかぶっている自分の見なれない顔を、あなのあくほど見つめました。それから目をパズルに移すと、その一まいをとって、すぐさまはめこみました。それからはすばやく、つぎからつぎへと、パズルをはめこんでいきました。そのあいだに家族のものたちは、立ちあがって男のうしろにきて、かれのやることを見ていました。
パズルの絵はできあがりました。それは灯台と鳥でした。鳥は灯台の明かりをめがけてまっすぐ飛んでいました。漁師はふりかえってムーミンパパを見ました。
「やあ、思いだしたよ。おれたちは、帽子をまちがえてたね。」
こういって、漁師は、かぶっていた帽子をぬいで、ムーミンパパにさしだしました。ふたりは一言もかわさずに、帽子をとりかえました。
灯台もりがもどってきたのです！
灯台もりはコールテンの上着にボタンをかけ、ズボンをずりあげました。それからコーヒー

「ほんとかい。」
こういうと、漁師はたんすのいちばん下のひきだしの方をちらと見ました。
それから立ちあがると、ゆっくりとたんすのところへいきました。家族のものたちは、興味ぶかく見ていました。おどろいたことに、漁師はプレゼントをもらっても、お礼をいいませんでした。
だんだん暗くなってきました。しずみかけた夕日のわずかな光だけが、りんごの木のこずえをてらし、三本のろうそくは燃えつづけていました。
漁師はたんすの上にのせてあった鳥の巣をみつけると、きびしくいいました。
「これはえんとつの中のたなにおかなきゃならないものだ。長年あそこにあったんだ



漁師のいいかたが、いかにもぴったりしていたからです。
　パーティーはまもなくくつろいだ気分になり、家族たちは漁師にかまわず、あらしや島のこと、海をなだめてねかしつけた話などをしはじめました。
　しばらくしてから、漁師はコーヒーをすこし飲みましたが、顔をしかめると、こんどは角ざとうを八こも入れて、一気にのみほしました。
　それから漁師は、ムーミントロールのプレゼントをあけました。それはムーミントロールが以前うみうまにやろうとしたのに、海岸におきっぱなしにされていたもので――ガラスのかけら、小石、銅のおもり四つなどでした。
　漁師はおもりを長いあいだ見ていましたが、
「ふん――。」
といいました。それからさいごのつつみをあけて、「西海岸の思い出」とかいてある貝がらをとりだしました。そうして、また、
「ふん――。」
といいました。
「これが最高のものなのよ。海が砂浜においてったんですわ。」
と、ムーミンママはいいました。



「おたんじょう日、おめでとう。どうぞ、おかけください。」
と、ムーミンパパはいいました。しかし漁師はつっ立ったまま、ドアの方へあとずさりをはじめました。
　きゅうにちびのミイが、かん高い声でどなりました。
「すわって、おぎょうぎよくするの！」
　漁師はあまりおどろいたので、テーブルのところへひきかえすと、すとんとすわりました。とたんにムーミンママがコーヒーをつぎ、ほかのひとりが帽子のはいったつつみをほどいて、帽子を漁師のもじゃもじゃ頭の上にのせました。漁師はおとなしくすわったまま、下から帽子を見あげようとしましたが、コーヒーは飲もうとはしませんでした。
「海草を食べてごらんなさいよ。」
　こういってちびのミイは、赤い葉につつんだ自分のプレゼントをさしだしました。
「自分で食べてみたらいいだよ。」
　こう、漁師がていねいにいったので、家族たちはわらいだしました。

西風は塔の外まわりでうなり声をあげ、まどの一つがカタカタと音をたてました。ムーミンママは漁師の手がふるえているのを感じたので、いいました。
「なにもこわいことはありませんよ。すごい音のわりには、たいしたことはないの。もうすぐですわ。」
それからママは、居間の戸をあけていいました。
「もう、目をあけてもいいわよ。」
漁師は目をあけました。まだ夕がたではないのに、ろうそくがともされていました。たんじょう祝いのテーブルは、まっ白いテーブルかけと、すみにおかれた小さい緑の小えだで、きれいにかざってありました。家族のぜんぶが、一列にならんで漁師を待っていました。
漁師は、ケーキをじろじろと見ました。
「ろうそくが三本しかのこっていないんですよ。」
と、ムーミンママは申しわけなさそうにいいました。
「失礼ですけど、おいくつにおなりですの。」
「おぼえていないなあ。」
と、漁師はつぶやきました。その目は不安そうに、あちらのまどからこちらのまどへうつり、それからまたあげ戸へと動きました。

と、漁師は顔をゆがめていいました。
「まあ、おききなさい。」
と、ムーミンママはおだやかにいいました。
「灯台を見る必要はぜんぜんないのですよ。ただ目をぎゅっとつぶって、あたしに手をかせばいいんです。ミイ子ちゃん、おねがいだから、先にいってコーヒーをあたためておいて。」
漁師は目をしっかりととじて、手をさしだしました。ムーミンママはその手をとると、気をつけながらヒースのあいだをとおりぬけて、灯台岩の方へ漁師を案内しました。
「さあ、ここは大きく足をふみだして。」
と、ママがいいました。
「なに、わしにはわかっているよ。」
と、漁師はこたえました。
とびらがギイーと音をたてたとき、漁師は立ちどまり、それから先へはすすもうとしませんでした。
「ケーキがあるんですよ。へやもかざってあるし、プレゼントだってあるんですよ。」
こう、ムーミンママはいいました。
そうしてやっと漁師にしきいをまたがせると、ふたりはまわり階段をのぼりはじめました。南

「だめさ。そんなことをしたら、きっとあの人、にげてっちゃうわよ。」
と、ちびのミイはいいました。
ムーミンママは立ちあがって、きっぱりした足どりで、戸口の方にむかいながらいいました。
「道はただ一つ。わたしが自分でいって、ミイ子ちゃん、礼儀正しいむかしふうのやりかたで、きのどくなあの人を招待してくることだわ。あんたがあの人を、しげみの中からひきだしてちょうだい。」

ふたりがついたとき、漁師はさんしきすみれの花を髪にさして、しげみのはずれにすわっていました。漁師はすぐに立ちあがると、ふたりを見つめて、なにかいうのを待っていました。
「おたんじょう日、おめでとうございます。」
ムーミンママは、ひざをまげておじぎしながらいいました。
漁師はたいそう重々しくおじぎをして、いいました。
「おれのたんじょう日をおぼえていてくれた人は、あんたがはじめてだよ。光栄だね。」
「あなたのために、うちでささやかなパーティーをひらこうと思いまして。」
と、ムーミンママはつづけました。
「灯台でかね。あそこにはいかないよ。」

きょうは十月の三日
わたしのたんじょう日
それなのにだれも祝ってくれるものはない
風は南西からふいてくる
　天気はまたもや雨もよう

「おや、十月三日なら、きょうだぞ。」
と、ムーミンパパはおどろいて思いました。
「灯台もりもきょうがたんじょう日なのか……。へんだなあ。」
パパはつつみ紙をみつけて、鉄ばしごをおりました。
ほかのものたちは、どうやって漁師を灯台に入れるか話しあっていました。
「あの人はきっとこないわ。灯台をこわがって、いつでも灯台のそばをよけてまわり道をしているもの。」
と、ちびのミイはいいました。
「なにかであいつの気をひくことはできないかな。なにかきれいなものがないかしら。歌をうたってやったらどうだろう。」
と、ムーミントロールが提案しました。

ですからね。」
こう、ちびのミイはあざわらうようにいって、さっさといってしまいました。
そこへムーミンパパが、たきぎをたくさんかかえてふうふういいながら、階段をのぼってきていいました。
「ママときたら、おのの使いかたを知らないのさ。のこぎりをひくのはうまいけれどね。さあ、たきぎの山をもうすこし高くして、みんながいっしょに話ができる広い場所をこしらえなくちゃ。」
パパは、たきぎをストーブのそばに投げだしてから、むすこにききました。
「わしの古いシルクハットを、漁師にやってもいいかな。わしはたぶん、もうあれをかぶることはないと思うんだ。」
「うん、やっちゃいなよ。パパには灯台もりがのこしていったのがあるもの。」
と、ムーミントロールはいいました。
ムーミンパパはうなずいて、おくりものをつつむ紙をさがしに、はしごをのぼっていきました。そしてガスボンベの上にあった箱を持ちあげようとしたとき、きゅうに手をとめました。かべにかいてあった詩の一節が、目についたからでした。これはパパのまだ見たことのないものだったのです。パパは、灯台もりのたよりない細長い字を読んでいきました。

ケーキはできあがり、ろうそくといっしょに、テーブルの上にのっていました。みんなはななかまどやむろのきのえだを、てんじょうにつるしました。ちびのミイは、赤いのばらの実のついた、えだのたばをつくっておきました。

「どうしてそんなにだまっているの。」

ちびのミイがききました。

「うん、考えごとしているんだよ。」

こういってムーミントロールは、ケーキのまわりに白い小石の輪をつくっていました。

「あのおばさんをあたためるのには、どういうふうにしたの。あたい、夜おそく外へおりていってみたんだけど、砂はぜんぜんこおってなかったわよ。」

と、ちびのミイはききました。

「ぼくが知るもんか。」

こういって、ムーミントロールは顔を赤くしました。

「おまえ、人にいっちゃだめだぞ。」

「まあ、あたいがおしゃべりだとでも思ってるの？　あたい、ほかの人の秘密をいいふらすことなんかに、興味はないわ。だいたい、秘密というものはおそかれはやかれ、自分でしゃべっちゃうものよ。いっとくけれど、この島にはどっさり秘密があるけど、あたいはぜんぶ知っているん

をつけていてくれればよかったのに。」

ムーミンパパとムーミントロールは、まどへ走っていきました。箱はまだみさきにありましたが、みさきが海の方へかなり移動していました。

「わしは朝飯ぬきでいいぞ。」

ムーミンパパは帽子をかぶりながら、いそがしそうにいいました。

「ちょっと下までいって、水がどこまでとどいたか、見てこなくちゃ。」

「あなた、ついでに漁師をさがしてきてちょうだい。ちょうどいい時間に、招待できるように。」

と、ムーミンママはいいました。

「あたいが招待にいくわ。」

と、ちびのミイが、パパのあとからついていきながらさけびました。

「もしかすると、あの人、今夜先約があるかもしれないものね。」

しかし、漁師はもういませんでした。たぶん、しげみの中にでもかくれたのでしょう。ひとりぼっちでしげみの中にすわって、

(きょうは、おれのたんじょう日なのに。)

なんて、考えていたにちがいありません。

それからママは、ちょっと考えてからつけくわえました。
「木たちはもとどおりのところへ帰っていくか、ついでにあたらしい場所をえらぶか、どっちでしょうね。木たちがどっちにするかきめたら、根のまわりに海草をつけにいってやりましょうよ。」
「ママって、ほんとに俗人ねえ。」
ちびのミイは文句をいって、がっかりしたようにまどの外を見ていました。
「なにもかも、もとのとおりになっていくわ。あたいは島がしずむか、それともぷかぷかとうかんでどこかへいくか、または空へ飛ぶかするものと信じていたのに。このあたりではしんこくなことはなにもおこらないのね……。」
ちびのミイは、ムーミントロールをとがめるように見ました。かれはわらって見かえしていいました。
「うん、しげみぜんたいをもとの場所へもどすなんて、だれにでもできるわざではないぞ。」
「そのとおり。だれもができるわけではないさ。ましてそのあとで、それをじまんしないとなると、なおすばらしいね。」
と、ムーミンパパはうれしそうにいいました。ちびのミイはいいました。
「だれかさんたちはたいへんなごきげんね。そのだれかさんたちは、いっそウイスキーの箱に気

「明かりのないことにも、気がついていなかったよ。」

漁師のたんじょう日の朝は、空はよくすんでいましたが、南西風はすこしもよわまってはいませんでした。

「目をおさまし！　なにもかも、もとどおりにおさまっているよ。」

ムーミンパパがいいました。ムーミンママは毛布の下から鼻をつきだしていいました。

「知ってますよ。」

「いや、おまえにゃ、わかっちゃいない。」

こう、ムーミンパパはじまんそうにどなりました。

「島はすっかりおちついて、もうちっともおびえてはいないよ。しげみはもとの場所へもどっていったし、木々もできるだけ早くもどるだろう。さあ、このことをどう説明するかね。」

「まあ、なんてすばらしい。」

と、ムーミンママは立ちあがっていいました。

「木がどっさり道のじゃまをしていたら、ちゃんとしたたんじょう祝いをすることはむずかしかったでしょうね。その木たちがいっぱいどろを運んできたらどうなるか、まあ考えてごらんなさいよ。」

ムーミントロールはびっくりして、一歩前へでました。モランが自分に会えてよろこんでいるのは、うたがいのないことでした。カンテラのことなんか、気にしていません。ムーミントロールが会いにきてくれたことを、よろこんでいるのでした。

ムーミントロールはモランのおどりがおわるまで、じっと立っていました。それからモランが、足をひきずりひきずり海岸から遠ざかっていくのを、見まもっていました。モランがいってしまうと、ムーミントロールは海岸の砂地へおりていって、砂にさわってみました。

砂はふだんとまったくおなじで、ちっともかたくこおってはいませんし、またにげもしませんでした。耳をすましてみましたが、きこえるのは波のくだける音だけで、島はねむりについたようでした。

ムーミントロールはうちへ帰りました。ほかのものたちはもうねていて、まっかな燃えさしが、わずかばかりストーブの中にのこっていました。かれは自分のベッドにもぐりこんで、ねむろうとしてまるまりました。

そのとき、ちびのミイがききました。

「あれはなんていった。」

「あれはよろこんでいたよ。」

ムーミントロールは、ささやきかえしました。

「それなのにあなたは、いつまでもあれを、まだ小さな子どもと思っていらっしゃるようね。」
「そうとも、もちろんあの子はまだ子どもさ。」
と、ムーミンパパは、いくぶんびっくりしていいました。
ムーミンママはわらって、火をつっつきました。それはほんとうに、ろうそくよりもずっとすてきな明かりでした。

モランは砂浜にすわって待っていました。ムーミントロールはカンテラを持たずにモランの方へいき、ボートのそばに立ちどまると、相手を見ました。モランのためにしてやれることはもうなにもないのです。

島の心臓はしんぱいのために、地の下で鼓動しつづけ、一晩じゅういろいろな変化がおこりました。ムーミントロールは、石や木が、島の上で海から遠い方へとゆっくり動いている音をきくことができましたが、それをとめるためにできることも、なにもありませんでした。

だしぬけに、モランがうたいはじめました。おばさんがよろこびの歌をうたいながら、あっちこっちにからだをゆり動かすと、そのたびにスカートがひらひらしました。それからモランは砂の上で足をふみ鳴らして、ムーミントロールがきてくれたうれしさを、いっしょうけんめいに見せようとするのでした。

「いったい、なんの話をしているのさ。」
と、ちびのミイがききました。
ムーミントロールは両方の前足をのばしました。からだじゅうがむずむずして、モランのことしか考えられなかったのです。
「ぼく、ちょっと外へいってくるよ。」
ムーミントロールがこういうと、ほかのものはかれの方を見ました。かれはいらいらしていいました。
「ぼく、外の空気をすってくるよ。ぶつぶついいながらこんなとこにすわっているのは、いやだからね。すこし運動してこなくちゃ。」
「まあおきき。」
と、パパがいいかけましたが、ママがひきとりました。
「いいわ、いってらっしゃい。」
「いったい、どうしたというんだろうな。」
むすこがいってしまってから、ムーミンパパはたずねました。
「春のめざめよ。あの子自身でも、気がついてはいないけど。」
と、ムーミンママがいいました。

「外ではなにがおこっているかしら。」
と、ムーミンママがききました。
「わしは知ってるけど、島はいまねるところさ。島がいま床にはいって、われわれとおなじころには、ぐっすりねむりにおちることは、まちがいないね。」
ムーミンママはすこしわらってから、考えぶかそうにいいました。
「あなた、知ってらっしゃる？ わたしたちがこうしてこの島に住みついてから、わたしはずっと、どこかへピクニックにでもいっているような気でいるのよ。まるで毎日が日曜日みたいで、しょっちゅうすべてがかわるのね。これではたしていいのかどうか、わたし、気になりだしたわ。」
ほかのものたちは、ママがもっと話をつづけるのを待ちました。
「もちろん、わたしたち、いつでもピクニックをしてるわけにはいかないわ。ピクニックはいつかはおえなければならないでしょ。あるときふいに、また月曜日みたいに感じるのじゃないかと、わたしはそれがこわいの。そうしたらわたし、いまの生活が現実だとは思わなくなりそうで……。」
こういってママはだまりこむと、そっとムーミンパパの方を見ました。
「なに、もちろんこれが現実さ。いつでも日曜日だったら、すばらしいじゃないか。そういう気持ちこそ、われわれが見失っていたものなんだ。」
と、ムーミンパパはびっくりしていいました。

まったような気がしたのです。

「ドラムかんがぜんぶからになったっていうのは、ぜったいほんとう？」

ムーミンママはカンテラをつよくゆすぶりながら、こういってききました。

ちょうど夕飯がおわったところで、まどの外はだんだん暗くなってきていました。

「かんぜんにからっぽだよ。」

と、ムーミントロールは情けなさそうにいいました。

「油がもれていたのにちがいない。きっとドラムかんがさびてきたんだ。あれだけの灯油を、使いきったはずがないものな。」

と、ムーミンパパはいいました。ムーミンママは、ため息をついていいました。

「さあ、わたしたち、ストーブの火の明かりでなんとかしなくちゃ。ろうそくは三本しかのこっていないのよ。しかも、それは漁師のバースデーケーキに使わなくちゃならないし――。」

ママはたきぎをもうすこし投げこんでから、ストーブのふたをあけはなしておきました。火はパチパチと陽気な音をたてました。家族たちは箱をひきだして、ストーブのまわりに半円形にすわりました。ときどき風が、えんとつの中でうなりをあげました。それはなにかの音楽のようにもきこえましたが、いかにもさびしい音でした。

網といっしょにまわり階段の下にありました。ムーミントロールはじゃぐちの下にブリキ缶をあてがって、せんをぬきました。それからドラム缶を持ちあげてさかさまにしましたが、缶はカラカラとうつろなひびきをたてただけでした。ムーミントロールは、つぎにはドラム缶をゆすぶりました。

それからドラム缶を土におろすと、長いこと、じっと土を見つめて立ちすくんでいました。灯油はもうなかったのです。おわってしまったのです。

カンテラは毎晩灯台の中でともされ、モランのためにもともされました。おまけにそのうえ、ちびのミイが、ありの上にいくリットルかをこぼしました。なくなるのもあたりまえでした。

でも、ムーミントロールはどうしたらいいのでしょう。モランはなんというでしょう。モランがどんなに失望するか、それを考える元気はありませんでした。そんなわけで、かれは鼻を前足の中につっこんで、階段にすわりこんでしまいました。

ムーミントロールは、まるでむかしからの友だちをうらぎってし



り、たんすをかたづけたりしました。灯台もりのひきだしも、きれいにしました。

ムーミントロールはつくえにむかって、絵をかきました。自分の小さな家をどういうふうにするか、はっきりときまっていました。えんぴつはあまりのこっていませんでしたが、必要とあれば、パパの海があたらしいのを、海岸にうちあげてくれるだろうと、どういうわけか感じていました。

夕がた近くには、みんなすこしばかりつかれてきて、もうあんまりしゃべりませんでしたが、家の中はじつに平和でした。島のまわりでは、海が規則的にとどろき、空はあらいたてのようにまっ白でした。ちびのミイなんかは、ストーブのそばでねむってしまいましたっけ。

ムーミンママはみんなをちらっとひとわたり見てから、壁画の方へ歩いていきました。ママは前足をりんごの木の幹におしつけました。でも、なにもおこりませんでした。それはただのかべでした。ただのしっくいのかべでした。

ムーミンママは、心の中で思いました。

(――わたしはただたしかめてみたかっただけなのよ。やっぱりそうだったのだわ。もちろんわたしは、もうこの庭には、はいりこめないんだわ。もうホームシックはきえちゃったんだから。)

夕がた、ムーミントロールはカンテラに油を入れにいきました。灯油のドラムかんはやぶれた

「わたしはそんなばかじゃないわよ。それが木らしくなるのには十年はかかるでしょうよ。わたし、ただちょっと元気づけてやっただけ。」

ムーミンママはわらっていいました。

それからママは、かれたばらの木を見て思いました。

(こんなところにばらを植えかえるなんて、わたし、なんてばかだったんでしょ。ばらなんかいくらでもあるわ、この島はばらだらけだもの。外においてながめるほうが、庭におくよりきれいかもしれないわ。)

ムーミンパパは板を二、三まい、灯台の自分のへやへひきずりあげて、それから道具箱をとりだしました。

「木はかわけばちぢむことをわしだって知っているが、それを待っていられないんだ。台所のたなにちょっとばかりわれめができたら、おまえ、こまるかい。」

こう、パパはいいました。

「ちっともかまいませんわ。さあ、おはじめなさいな。気がかわらないうちにどんどんやってよ。」

と、ムーミンママはいいました。

その日は、ママはなにも絵はかきませんでした。そのかわりに花をささえる小さい棒を作った

も、ただで手に入れたえものなんです。

やわらかい、タールの色をして、ぴかぴか光っている板きれは、重たそうで、はしっこに所有者のマークのあるのが読めました。征服者のほこらしい満足感で、それをながめていると、すぐにも九センチくぎをそれに打ちこむ金づちの音が、思いだされてくるのでした。

「風は、いまではきっと風力9をこしているぞ。」

と、ムーミンパパはさけびました。それから深い呼吸をして海を見ていましたが、

「うまいぞ。もうわしたちのあいだには、わだかまりはなくなったぞ。」

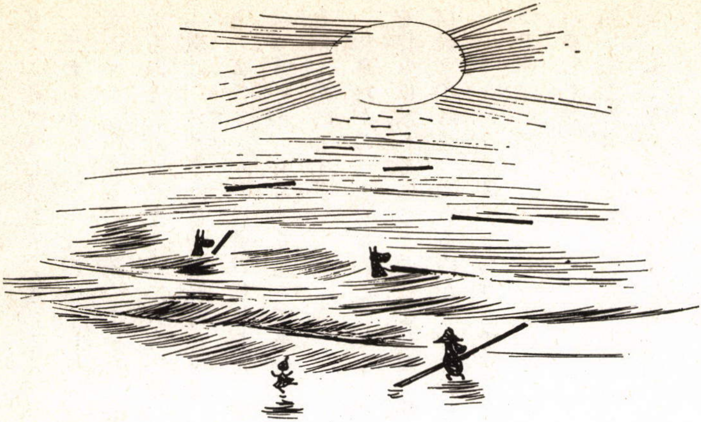
といったのです。

板きれがのこらず水のとどかない高みにつみ重ねられたとき、家族のものたちは、魚のスープを作りに家へ帰ることにしました。風下の海岸ではあらしがまるで生きもののようにたけり、ちびのミイは立っているのがやっとでした。

ムーミンママは、とちゅうで立ちどまって自分の庭を見ましたが、庭はおびえた小さなはいまつで、いっぱいになっていました。ママはそこにひざまずいて、はいまつの下に鼻をつっこんでみました。

「りんごの木がはえてきたの？」

と、ムーミントロールはたずねました。



ようです。
　みんなは、島のゆううつとか海の孤独などはかなぐりすてたように、波のとどろきにまけない声で、たがいにどなりあいながら水の中にはいったり出たりして、板きれを運んでは、つみ重ねていきました。みんな、自分が力いっぱい生きているところを、見せたかったのでしょうね。荒れている島の上の空はまだ晴れわたっていて、一点の雲もありませんでした。
　厚さ六センチの板きれを海岸へうまく運びあげるのは、おもしろい仕事でした。それはあつかいにくいし、水で重くなっていましたから、じきに手のあいだからぬけていってしまいます。それがまたつぎの波で運ばれてきて、ドスンとつよくぶつかってくると、まったく危険です。
　こうして板きれが、海岸の水がとどかないところまで持ってこられると、はじめて宝物になります。しか

厚さのある大きな板が、波がしらにのって浜べに流れよってきたではありませんか。
ムーミンパパは、興奮してそれを見つめました。

そんな板がもう一まいありました。それからもう一まい。つまり、一荷分そっくりでした。だれかが船を軽くするために、積み荷の板をぜんぶ海へすてたのでしょう。パパはがけをよじのぼって、走りだしました。走りながらわらいました。

きっと海は、ごめんなさいをいっているのです。海はみんなに島にいてもらいたいのでしょう。そしてみんなが、このうえとも島の建設をつづけ、みんなでそこに住みついておちついてくれるてつだいをしたかったのです。変化のない広い水平線にとり囲まれ、とじこめられながらも、みんながたのしくくらしてくれることを、海はのぞんでいたのです。

「出ておいで。出ておいで!」

パパはまわり階段の下からどなりました。

「板きれだ。積み荷が流れてきたんだ。出てきて引きあげろやい!」

家族のぜんぶが、ころがるように出てきました。板きれは高波にのって風下の方へまわって、いまにも幸福なべつの海岸へいってしまいそうでした。みんなはいそがなければならないので、水の冷たさもものともしないで、海へとびこみました。ムーミン一家の血管の中には、海賊の血が流れていたのかもしれませんね。不正なえものをとろうとする精神が、子孫にも宿っていた



ムーミンパパは前にのりだして、けむっている海をきびしい目つきでにらんでいいました。
「おまえさんにはまだわかっちゃいないらしいね。この島のめんどうをみるのは、おまえさんの仕事なんだぜ。いまのようなへんなまねをしないで、むしろ島をまもってやり、なぐさめてやらなけりゃいけないんだよ。わかったね。」
ムーミンパパはあらしの中に耳をかたむけましたが、海はなにもこたえませんでした。
「おまえさんはわれわれをも、おどかそうとしたね。」
と、パパはまたいいました。
「おまえさんはあらゆる方法でわれわれを苦しめた。でも、うまくいかなかったね。われわれはなんとかかんとかきりぬけてきた。わしはおまえさんのうらをかいてやったんだ。それがおまえさんには気にくわないんだろ。どうだね。それでもわれわれは建設をつづけるよ。
ところで、公平にみて、おまえさんがウイスキーの箱をとどけてくれたのは、ごしんせつだったね。わしはおまえさんがなぜそうしたか知ってるよ。おまえさんは、まけかたを知っているからだよね。そうだろ。しかし、だからといって、島にそのしかえしをしようというのは、ひきょうだぜ。わしがこんなことをいうのも、つまりは——おまえさんがすきだからさ。」
ムーミンパパは頭がつかれたので、おしゃべりをやめ、岩によりかかって待ちました。
でも、海はなんともいいませんでした。ところが、そのとき一まいのぴかぴか光る六センチも

風力も8どころではなかったのです。
波のしぶきは灰色のけむりとなって、海の表面を前にうしろにふきまくり、水はまるでおこったしわだらけの顔のように、うねっていました。
そこでパパは、頭のきりかえをしました。きょうはたいへんらくにいきました。パパは祖先がしたようにのんびりと頭の中で、海との対話をしたのです。
「おまえさんはいいおとなのくせに、このような見せびらかしをするのはおかしいよ。そんなことをしないほうがいいじゃないか。こんなちっぽけな貧弱な島をおどかすのが、おまえさんにはそんなにだいじなことなのかね。島はなんとかしてのがれたいといっしょうけんめいなんだよ。おまえさんは、こんな沖に島があるということで満足すべきだね。ほかにくらべるものだってないじゃないか。おまえさんの波がぶつかるのにちょうどいい島の岩がなかったら、いったいなにがおもしろいのかい。
まあよく考えてごらん。ここにはわずかばかりの木のしげみがあるが、ぜんぶおまえさんのために曲がってはえているじゃないか。それからほんの一にぎりのわずかの土まで、おまえさんは全力をつくしてさらっていこうとしている。またいくつかある岩は、おまえさんがあまりすべすべにみがいたもので、でこぼこがまるでなくなっちまったじゃないか。
おまえさんとしたことが、このうえまだ、みんなをおどかすつもりなんだね。」

と、ちびのミイはいいました。
「まあ、おまえはわるい子ね。」
と、ムーミンママはいいました。
「だって、そのとおりだもの。」
と、ちびのミイはわめきました。

　ムーミンパパは西側のまどのところに立って、島を見わたしていました。家族たちがとてもだいじな問題を二つ話しあっているのが、パパにもきこえました。どうやって漁師を灯台の中に入れるかということと、それから、どうやって、波にあらわれているみさきを通ってウイスキーの箱を取ってくるか、という問題でした。しかし、パパには地面のおくからきこえてくる、島の不安そうな心臓の鼓動のことだけしか考えられませんでした。

　パパはそのことについて、海と話をしてみたいと思いました。

　ムーミンパパは出かけていって、灯台もりのさびしい岩だなにこしをかけました。そのかっこうはまるで帆前船のへさきについたかざりくびみたいに見えました。

　これこそパパが待ちわびていたほんとうのあらしでしたけれど、それはパパが想像していたようなそんなものではありませんでした。波の上には白くて美しい真珠のあわなんかなかったし、

物たちは、いったいだれがまもってやるのだろう。）

ムーミンパパは走りだしました。

家に帰ってきて、帽子をくぎにかけていると、

「いったい、どうなさったの。まさかボートが……。」

ムーミンママがたずねました。

「ボートはわしが引っぱりあげたよ。」

と、ムーミンパパはいいました。家族のものたちがなおもパパを見つめていると、パパはつけくわえました。

「あすは、漁師のたんじょう日だとさ。」

「えっ、なんですって。」

ムーミンママはさけびました。

「それであなたは、そんなへんな顔をしていらっしゃるの。いいわ、そんならあの人のために、ぜひともパーティーをひらいてあげなきゃ。そうですとも、漁師にだってたんじょう日はあるわよ。」

「あの人へのプレゼントなら、かんたんよ。海草の小さなつつみ！こけの一かたまり！　でなきゃ液体塗料はどう。」



パがからだじゅうで感じとることができたのは、とてもかすかなゴツンゴツンという音でした。すぐそばで、しかもそこいらじゅうでしているのです。その音は、深い地の底からきこえてくるようでした。

ムーミンパパは、ヒースの中に横になって、耳を地面におしつけました。すると、島の心臓がうなっているのがきこえたのです。

それは波のくだける音より深く、地の中の深いところで鳴っている、やわらかで、にぶい、規則正しい心臓の鼓動だったのです。

(島は生きている！　わしの島は、木や海とおなじに生きているんだ。すべてのものが生きているんだ。)

と、ムーミンパパは思いました。パパはゆっくりと起きあがりました。

一本のはいまつが、波うつ緑のじゅうたんみたいに、ヒースの中を通りぬけてそろそろとはっていきました。ムーミンパパは、はいまつのために道をあけてやりましたが、そのままそこにくぎづけになってしまいました。パパは島が動いていくのをまざまざと見たのです。島は海の暗い底にうずくまって、どうしようもないほどおびえている生きものだったのです。

(――恐怖というものはおそろしいものだな、あいつはとつぜんやってきて、手のとどくかぎりのものをとらえたり、まわりのものをきずつけたりする。ちょうど、そこにいあわせた小さな動

漁師はすかさずいいました。

ムーミンパパはあんまりおどろいて、思わずわらいだしてしまいました。

「なるほど、きみはそれをちゃんとおぼえているんだね。ああ、そうかい、きみにもたんじょう日があるというんだね。あきれたよ。ところで、きみはいったい、いくつになるの。」

と、パパはききました。しかし漁師は背をむけて、海べをゆっくりと歩いていってしまいました。

ムーミンパパは灯台へもどってきましたが、自分の島のことがとても案じられました。しげみにおいてきぼりにされた地面は、深いあなだらけでしたし、ヒースの中にできた長いみぞは、木木が燈台岩の方へ動いていったときについたものでした。木々はおそろしさに、たがいにしがみつきあって、そこらに立っていました。

（どうしたら、島をおちつかせることができるだろう。）

と、ムーミンパパは疑問に思いました。海と島とは、けんかしてはいけないんだ。おたがいになかよしにならなければね……。

ムーミンパパはじっと立っていました。灯台岩もどこかしらへんでした。よく見ると、岩はまるでしわがよっていくはだのように、ほんのすこしずつですが、ちぢんでいるところでした。ヒースの中で、灰色の石が二つ三つ、ごろんとひっくりかえりました。島が目をさましたのです。

ムーミンパパは耳をかたむけました。あんまり緊張して、寒けが背すじを通りすぎました。パ

と、ムーミンパパはいいました。
漁師はまがった足でボートのふちをまたぎ、砂の上にころがりでました。その目はいつものように、やさしくしんせつで、こういっていました。
（わしはなにもわるいことはしちゃいない……。）
「うん、でもなにも役にたつこともしちゃいないね。」
と、ムーミンパパはいって、おこったいきおいで、ひとりでボートを引きあげてしまいました。
パパはふうふういいながら、砂の上にすわりました。砂地がのこされていたのは、ここだけなのでした。いかりくるった海は、砂にもやきもちをやいているようで、毎晩すこしずつ砂を持っていってしまうのです。パパはふきげんに漁師を見ていましたが、こうききました。
「コーヒーはみつかったかい。」
しかし、漁師はにっこりしただけでした。
「きみはどこかへんだぜ。」
と、ムーミンパパはつぶやきました。
「きみはぜんぜん人間じゃないな。人間というよりは、植物とか、かげみたいなもので、そもそも生まれてきたものではないみたいだね。」
「おれは生まれてきたんだよ。あすはおれのたんじょう日なんだ。」

海岸の風下側では、小さな野ねずみや森ねずみが水ぎわをいったりきたりしていましたが、その足元から、砂がずるずるとくずれ落ちていました。石がドスーンとひっくりかえると、はまなでしこの花の白い根がむきだしになりました。

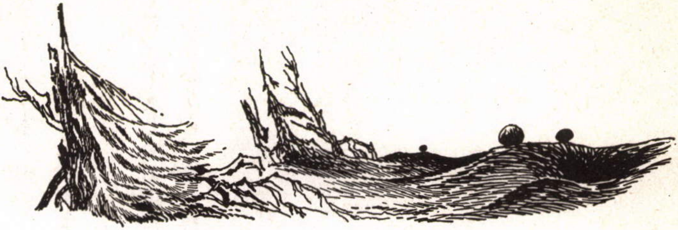
夜明けになって、島はねむりにつきました。木々はもう灯台岩のところまできていました。石のごろごろしていたあたりにはいくつも深いあながあき、ヒースの中にはまるい灰色の石がいっぱいちらばっていました。石はつぎの夜がくるのを待って、もっともっと灯台の近くまでころがっていくつもりなんです。はげしい秋のあらしはまだふきつづいていました。

七時に、ムーミンパパは、ボートのようすを見にでかけました。水かさはまた増していて、南西風はいよいよはげしく海をふきあげています。パパは漁師が冒険号の船底に、まるくなってころがっているのを発見しました。

漁師は一にぎりほどの小石を、おもちゃにしていました。前髪の下から目をぱちぱちしただけで、あいさつはしませんでした。冒険号は高波の打つにまかせ、つなぎもせずにおかれたままになっていました。

「このボートが海に流されてしまいそうなのが、きみにはわからないのかね。ボートは石にたたきつけられているんだぜ。このざまをみてみろ! もうすこしでめちゃくちゃになるところだ。さあこい、出てきてボートを引きあげるのをてつだえ!」

第8章



灯台もり

島は一晩じゅう動いていました。漁師のみさきは、目に見えないほどわずかずつ、海の方へつきだしていきました。

背すじをはしる寒けのような身ぶるいが、あとからあとから島ぜんたいをゆすぶり、黒池はますます岩に深くくいこんでいきました。水がすいこまれたりはきだされたりするのか、あたらしい波がなめらかな緑のたきのようになって、いくら岩をこえて海から流れこんできても、池はけっしていっぱいにはならないふうでした。その巨大な鏡のような黒い目は、ぐるりを海草のふさかざりで囲まれながら、下へ下へとしずんでいきました。

「気をつけていくんですよ。木の根っこがそこらじゅうにあるからね。それにカンテラのガラスのかえだって、もう一つもないんですよ。じゃあ、ついでにパパのノートもさがしてきてくれない？」

ムーミントロールはドアをしめる前に、ちびのミイを見ました。でも、あの子は無関心に歯のあいだでくちぶえをふきながら、絵あわせパズルにむちゅうでしたっけ。



ときたまだれかが漁師の話をもちだして、あの人はいったい魔法びんをみつけて、コーヒーを飲んだかしら、などといいました。

ムーミントロールはそわそわしてきました。そろそろモランに会いにいく時間だったからです。かれはモランに、今晩ダンスをさせるやくそくをしていたのです。それなのにかれは、いすにまるくなったまま、だまりこんでいました。

ちびのミイがムーミントロールを見る目は、ビーズ玉みたいにきらきら光りました。それから、かのじょはだしぬけにいいました。

「あんたは海岸にロープをおきっぱなしにしたわね。」

「ロープだって？」

と、ムーミントロールはいいました。

「だけど、あれはぼく……。」

ちびのミイはテーブルの下で、ムーミントロールをつよくけとばしました。かれは立ちあがってはずかしそうにいいました。

「うん、わすれてきちゃったんだ。いってとってこなくちゃ。満潮になったら、流されちまうもの。」

ムーミンママはいいました。

「もちろん、あいつたちは、はいろうとするわよ。あんたは階段の下で石がとびらをたたいているのが、きこえない？　あっちからもこっちからも石がころがってきて、階段の下は大さわぎよ。木たちはぐるっと灯台をとりまいて、だんだん近くへおしよせてくるんだわ。そのうち根っこでかべをはいのぼり、まどというまどから木がのぞきこみ、うちの中は暗くなるんだわ……。」

「うそだい。やめろ！」

と、ムーミントロールは、前足で鼻をおさえてどなりました。

「ミイちゃん。そんなことを考えるもんじゃないの。」

と、ムーミンママがいいました。

「まあ、おちつけおちつけ。しんぱいすることはないじゃないか。二、三本の貧弱な木が海をこわがったからといって、そんなに興奮する必要はないだろ。まったくのところ、ひどいめにあったのはわれわれではなくて、木のほうなんだ。こういうことは、わしにまかしとくのさ。」

こう、ムーミンパパはいいました。

あたりはだんだん暗くなってきましたが、だれもねようとするものはありません。みんなはパズルの中に、もう三ば、鳥をみつけました。ムーミンパパは台所の食器だなを設計することに、すっかりむちゅうでした。

あらしが外で荒れくるっていることが、へやの中の感じを、かえって安全なものにしました。

「ぼくはかわりに小さな家を建てることを考えているんだ。いますぐじゃないけど、いずれはね。できあがったら、どうぞみなさん、おいでください。」

と、ムーミントロールは発表しました。

ムーミンママは、うなずいて、カンテラのほのおを調節してから、パパにききました。

「外のようすはどうなんですか。あなた、見てくださらない？」

パパは北側のまどのところへいって、まどをあけました。ちょっとしてからパパはいいました。

「森が動いているかどうかはわからんが、風はまたつよくふいてるよ。たぶん、風力は8だろうな。」

それからパパはまどをしめて、テーブルのところへもどってきました。

「木たちは今夜は、おそくなってから動きはじめるわよ。うなったりうめいたりしながら、岩山をだんだん上の方まで手さぐりであがってくるんだわ。——こんなふうに。」

こういってちびのミイは、目をきらきらかがやかしました。

「まさか、木がここへはいってくるとか、はいろうとするとか、そんなことはおまえだって思いやしないだろ。」

と、ムーミントロールがいいました。すると、ちびのミイは、声をひそめていいました。

「わしはいつだって海がすきだったよ。」
ムーミンパパは、むっとしたようにいいました。
「わしたちはみんな海がすきだよ。だからこそ、ここにきたんじゃないかね。」
パパはこういって、ムーミンママを見ました。ママはいいました。
「そうね、あたしもそうだと思うわ——。ほら、ママはこんなむずかしい場所にぴったりあうのをみつけたわよ。」
みんなは感心したように、パズルをのぞきこみました。
「これは大きな灰色の鳥になりそうだわ。」
と、ちびのミイは大きな声でいいました。
「しっぽがもう一わ分のこってるわ——白いのが。まるでだれかさんのしっぽに火がついたみたいに、あわてて羽をぱたぱたやってるわ。」
みんなはもうパズルがなにになっていくか、想像がつきました。鳥が四わいることが、すぐにわかりました。あたりがだんだん暗くなってきたので、ムーミンママはカンテラをつけました。
「今晩、おまえたちは外でねるの？」
こういってママがきくと、ちびのミイはこたえました。
「まさか。あたしたちのかくれがは、やぶでふさがっちゃったもの。」

ムーミンパパはてれくさそうに、わらいながらいいました。
「たぶん、わしの調査の結果が思わしくなかったからかもしれんさ。よくわからないが――。」
「パパはきっと、自分がばかだと感じたのよ。それだけのことさ。」
と、ちびのミイが口をはさみました。
「もしキャラメルが二つくっついていたら、一つにかぞえてもいいんでしょ。それじゃパパは、海についてもうなやむのをやめたの？」
「とんでもない。」
と、ムーミンパパは大声でどなりました。
「おまえがばかみたいにふるまうのがなぜだかわからないといって、わしがおまえについてなやむのをやめるとでも思うか。」
みんなは、大わらいしました。ムーミンパパは、前にのりだしていいました。
「そら、海はときにはきげんがよく、ときにはきげんがわるいが、それがどうしてなのか、だれにもわからないだろ。わしたちには、水の表面だけしか見えないからね。ところがもし、わしたちが海がすきなら、そんなことはどうでもよくなるんだ。あばたもえくぼってわけさ……。」
「じゃ、パパは、いまは海がすきなんだね。」
と、ムーミントロールはおずおずとききました。

と、ママはむすこにいいました。
「ところで、箱は安全なところまで引きあげてあるんでしょうね。」
「しんぱいするない。海からのおくりものだよ。海だってまさか、おくりものをとりかえしゃしまいさ。」
と、ムーミンパパはいいました。
家族はその夜、いつもよりすこしはやく夕飯をたべました。そのあとみんなは、絵あわせパズルをとりだすと、ムーミンママはマントルピースからキャラメルの缶を持ってきました。
「きょうはとくべつな日よ。だからみんな五つずつとりなさい。」
それからママは、いいました。
「あの漁師は、キャラメルがすきかしら。どう思う？」
すると、ムーミンパパがいいました。
「ねえ、おまえ。わしはおまえが岩の上におろしてくれるキャラメルのことで、いつもにがにがしく思っていたんだぜ。」
びっくりしてムーミンママはたずねました。
「どうして？　あなたはキャラメルが、とてもおすきなはずじゃなかった？」
「いや。」

「ぼくたち、箱にはいったウイスキーをみつけたよ。」
と、ムーミントロールはママに話しました。
「すごいわね。じゃあ、ピクニックにいかなきゃ。」
と、ムーミンママはいいました。ムーミンパパはわらっていいました。
「おまえのピクニックは、もうたくさんだよ。」
漁師はコールテンの上着に、くたびれた古ズボンをはいて、またあらわれました。
「まあ、このズボンはぴったりね——まるであんたのためにこしらえたみたいね。」
ムーミンママは大きな声で、こういいました。
「さあ、みなさん、うちへはいっておいしいコーヒーを飲みましょう。」
ムーミンパパは、ママが「灯台」といわないで、「うち」といったのに気がつきました。ママがそういったのは、はじめてでした。
「いいえ、だめです。あそこはいやです。」
漁師はこういって、さもこわそうにズボンを見ていましたが、だしぬけにものすごいはやさで島をつっきってにげだしました。みんなは漁師がしげみの中にすがたをけすまで、そのうしろすがたを見送りました。
「魔法びんにコーヒーを入れて、持っていってあげたら?」

漁師は上等のウイスキーで力をつけたところで、ふたりに助けられて島にわたってきました。ムーミンママは灯台もりの古い洋服を手にさげて、待っていました。その古着はたんすのいちばん下のひきだしでみつかったのでした。

「おれはこんなズボンはいやだね。みっともないズボンじゃないか。」

漁師は、歯をガチガチいわせながらこういいました。

「あそこの岩のうしろへいって、はきかえていらっしゃい。」

と、ムーミンママはきっぱりといいました。

「あんたがみっともないと思おうが、思うまいがおんなじことよ。それはあたたかだし、それにそのズボンは、とてもりっぱな灯台もりのものだったのですわ。ズボンにも灯台もりにも、文句をいうところはありません。そりゃあの人は、たいへん陰気なタイプの人のようだったけれども。」

ママは漁師のうでに衣類をかけて、岩のうしろへいかせました。



ムーミントロールはうなずきました。パパがなんといったのかききとれなかったのですが、どちらにしても、パパのいいたいことはわかったのです。

そのとき、なにかが波にのって流れてきました。箱でした。みさきの片側ぞいに、すごいはやさで風下へ流れ、それから重そうに水の中にうかんでいたのです。ふしぎなことにふたりはただの一言もかわさなかったのに、おたがいの気持ちがわかったのです。ムーミントロールが水にとびこみ、よせてはかえす波にのって、その箱の方へからだをもっていきますと、パパは岸で両足をふんばりました。

ようやく箱に手がとどきました。箱は重く、なわの取っ手がついていました。するとムーミントロールのこしのまわりのひもがぴんと張って、海岸へたぐりよせられました。かれにとっては生まれてはじめての、このうえなくおもしろく、また危険なゲームでした。しかも、それをパパとふたりでいっしょにしたのでした。

ふたりは箱を岩の上へひきずりあげました。どこもいたんではいません。上等の外国製のウイスキーの大箱だとわかったのは、箱の外に、赤と青のかざり文字でかいてあった字からでした。

ムーミンパパは半分おどろき、半分感心してパパの海の方へ目をむけました。波はいまでは、なお深い緑色となり、夕日が波がしらをそめていました。

「おいしいコーヒーを飲みたくないかね。」
と、ムーミンパパは風のうなりにまけない声でどなりました。
「さあね。ずいぶん長いことコーヒーは飲んでいないから……。」
漁師の声はこわれた缶のようにひびきました。きゅうにムーミンパパは、漁師がとってもきのどくになりました。漁師は小さくて、家までつれかえる道もおぼつかないように思えました。
ムーミンパパは立ちあがって、むすこの方を見ると、かたをすぼめて、こんなふうにいいたげな顔つきをしました。
（まあ、こんなぐあいさ。わしたちにはたいしたことはできないね。）
ムーミントロールはうなずきました。
三人はみさきのはずれをさして歩きだしました。風は三人の耳を、頭の両側にぴったりとくっつけました。しおからい霧が、みんなの顔をひりひりさせました。もう先へはすすめなくなると、パパとムーミントロールは立ちどまって、すばらしいあわの柱を見ました。そのあわの柱はみんなの目の前で、波がくるたびに、まるでなにかの儀式でもやっているみたいに、ゆっくりと立ちあがり、それから落ちて海にかえっていくのでした。
「こいつはとにかく、たたかいがいのある敵だな。」
ムーミンパパは、波のくだける音の中から、こんなことをさけびました。

たちゃ、がまんすることができるからな。だけどあの漁師――しわだらけの海草みたいなあのよぼよぼじいさんをいじめるのは、いきすぎだぜ。――きさまにあんなにほれてるのにさ。それはまったくひどいことだ……。）

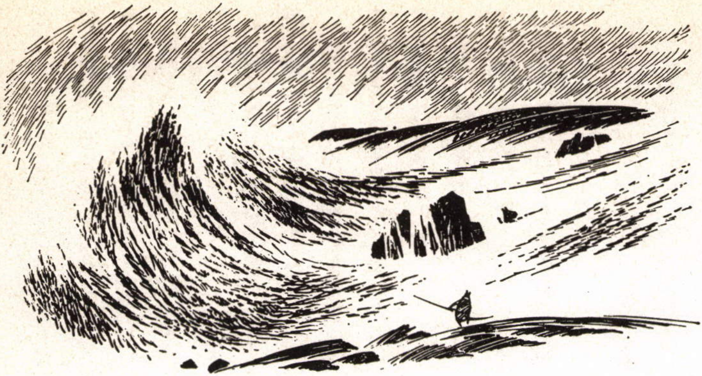
山のような大波が、パパの上でくだけて、パパのいかりをあらいながしました。パパはもうすこしで、みさきへつくところでした。ロープがこしのまわりをしめつけました。パパは岩の横にしがみつき、四つ足でしっかりと身をささえました。つぎの波がパパを緑色のやみでつつんだと思うと、ロープがゆるみました。

ムーミンパパは水から鼻を出すやいなや、大いそぎでみさきへよじのぼりました。足はぶるぶるふるえていました。それからパパは、風下に流されてぷかぷかういているむすこのロープをたぐりよせはじめました。

ふたりは寒さでふるえながら、ならんで岩にこしかけました。反対側ではちびのミイが、まるでくるったみたいに、ふたりをはげまそうとしてとびはねていました。――まるでまりみたいに。ふたりは顔を見あわせてわらいだしました。うまく海をだましてやったからです。

「どうしているかね。」

ムーミンパパはこういって、漁師のボートの下に鼻をつっこみました。漁師は明るい青い目をパパにむけました。ずぶぬれでしたけれど、ガラスのかけらはささっていませんでした。



　ムーミンパパは一つの大きな波がくだけるのを待って、すこしはなれたところにある岩をめがけて、つるつるすべる石の上をわたっていきました。つぎの波がくだけたときは、パパはもうその岩を通りすぎていました。パパとムーミントロールとのあいだのロープは、岩におしつけられてぴんと張りました。そのとき、波でふたりの足がすくわれ、とうとうふたりはくだける波にまきこまれて、一回転してしまいました。でも、ロープはさいわいと切れませんでした。

　波がひいたとき、ふたりはつるつるする石の上を通って、つぎの大きな岩へと、おなじ作戦をくりかえしました。

（おまえ、あじなことをおぼえたな。）

と、ムーミンパパは思いました。もちろん、海のことをいったのです。

（だが、ものには限度というものがあるぞ。……きさまがどんなにわしたちにいじわるしたって、へいきだぜ。わし

こういって、ムーミンパパが岩をおりていくと、ちびのミイはパパのまわりをおどりまわり、なにかどなりましたが、風にかきけされてしまいました。ムーミントロールはヒースの中にたたずんで、漁師のみさきをながめていました。

「おまえもおいで。自分をまもることをおぼえるには、ちょうどよいときだぞ。」

と、ムーミンパパはいいました。

三人は島をつっきって、いまはもう水の下に没してしまったみさきまで、走っていきました。ちびのミイは興奮して、とびはねていました。風でとけた髪が、まるで月にかかるかさのように頭のまわりでなびきました。

ムーミンパパが荒れくるう海をながめると、波は島におっかぶさるようにくだけて、水けむりを投げあげ、つぎにはものすごい音をたてすいこむように、ひいていきました。けれどもみさきのところでは海はかみなりのようなとどろきをたてながら、あとからあとから波を送りこんでいました。三人は、そこを通らなければならないのです。ムーミンパパはこしにロープをまきつけ、そのはしをむすこにわたしていいました。

「さあ、しっかりそれにしがみついていて、はなすんじゃないよ。しっかりと結びこぶをつくり、ロープをにぎって、わしのあとについてくるんだ。みんなで海をからかってやろう。風力は7、風力7！」

にたちがわるいんだな。)

「じゃあ、あの人は、ずぶぬれにちがいないわ。おまけに、まどが割れたとき、あの人にガラスのかけらがいっぱいささったんじゃないかしら……あたしたちがせわをしてあげなくちゃね。あの人はもうどこにも住む家がないのだから。」

と、ムーミンママがいいました。

「わしがいって見てくるよ。わしはわしの島を、すみからすみまでまもるつもりなんだから!」

こう、ムーミンパパはいいました。

「だけど、みさきのぜんぶが水づかりになったのですよ。危険だわ。あなたが波にさらわれたら……。」

と、ムーミンママはさけびました。

ムーミンパパはとびあがって、階段の下にさげてあるおもり綱をつかみました。元気をだしたら、空気のように身が軽いのをパパは感じました。

「おそれることはないさ。海はすきほうだいをやらかすんだ。だけどそんなことはわしの知ったことではない。かまうもんか。わしはこの島に住むものは、だれでもまもってやるつもりだ。わしにはよくわかったんだから。」

に見えました。

（漁師はよろこんでいるだろうな。）

と、ムーミントロールは思いました。

ちょうどそのしゅんかんに、それがおこったのです。波が漁師の小さなセメントの家をひっくりかえしたと思うと、つぎの波がきてかべをさらっていくのが見えたのです。

漁師はやっと戸をあけて外へとびだすと、いなずまのようなはやさで、しぶきをあびながら、岩の上にうらがえしにしてあった、自分のボートの下へはいこみました。

小さな家は、いまはかげも形もなくなって、岩にささっている鉄のかすがいだけが、ぬけのこりの歯みたいに立っていました。そこで、ムーミントロールは思いました。

（やれやれ。パパのいったとおりだ。海はほんとう



もりました。
いまでは空がまっ黒になるほど、たくさんの鳥が空を舞っていました。しかも、まるで気がちがったように鳴きさけんでいるのです。ムーミントロールはこんなにたくさんの鳥を見たことがありません。中には小鳥もいましたが、みんなヒステリックに飛びまわって、しかも海のむこうからも、あとからあとからやってきました。
ムーミントロールは、その鳥たちを見て、鳥たちもモランのあのすごい冷たさからにげてきたのだと知りました。といって、してやれることはなにもありません。しかし、それがどうだというのですか。
かれはパパから、いままでにないあたらしい態度で話しかけられたのです。ムーミントロールのむねは、ほこらしさでもうはちきれそうでした。
家族のほかのものたちは、灯台の外に立って、おそろしい鳴き声をあげて、空いちめんに飛んでいる鳥をながめていました。するときゅうに鳥たちは、海のむこうに飛び去りました。いっしゅんのうちに、いなくなってしまったのです――まっすぐ海をこえて、波の音のほかにはなにものこさずに。
海は島の上におっかぶさるように、とどろきました。しぶきが高くうちあげられるので、まるで雪がふっているようでした。島の西のみさきのところでは、波は大きく口をあけた竜そっくり

のを、パパとむすこは感じました。
　ムーミンパパはしずかにいいました。
「だけど、それじゃ海は生きものにちがいないな。海は考えることができる。したいほうだいのことをする……。あいつを理解することは不可能だ……。もし森が海をおそれるのなら、それは海が生きているということになる。そうじゃないか。」
　ムーミントロールはうなずきました。あんまり興奮したので、のどがからからになりました。
　ムーミンパパはちょっとのあいだ、口をつぐみましたが、それから立ちあがると、いいました。
「じゃあ、黒池で息をしているのは海なんだ。おもり綱を引っぱっているのは海なんだ。なにもかも、はっきりした。海はわしの防波堤を持っていってしまったし、わしの網を海草でいっぱいにした。ボートもひっくりかえそうとした……。」
　パパは地面を見つめて立ちつくしました。しかめた鼻づらは、しわだらけでした。それからきゅうにからだをのばすと、はればれとした顔になっていいました。
「じゃあ、わしは理解する必要がないぞ！　海ってやつは、すこしたちがわるいよ。」
　ムーミントロールは、パパがただ自分にいってきかせているだけだと感じたので、なんともいいませんでした。かれはパパがヒースにノートをのこしたまま、灯台の方へ歩いていくのを見ま



んめいに考えてみました。
「おまえはほんとうにそう思うのかい。海にはぜんぜんリズムもなければ理由もないんだって。」
と、ムーミンパパはききました。
「たしかにないと思うな。」
と、むすこはこたえました――自分のこたえが正しいことを心からねがいながら。
　何ばかのかもめがみさきから飛びたって、鳴きながら島の上をぐるぐるまわりはじめました。ちょうどだれかが息をしているみたいに、いそ波がふたりの足の下の地面の中でくだけている

パパは灯台もりの帽子をぬいでもみくちゃにすると、それをきゅっとしぼってから、またしわをのばしました。

「ねえ、おまえ、わしが考えてるのは、海がどんな秘密の法則にしたがっているかを発見することなのだよ。海をすきになるには、ぜひともそうしなければならんのだ。海がすきになれないかぎり、わしはこの島ではけっしてたのしくなれまいよ。」

「人間についてだって、おなじですよ。まず、すきにならなくちゃ――。」

と、ムーミントロールは立ちあがりながら、熱心にいいました。

「海は、ねんがらねんじゅう動きをかえている。」

と、ムーミンパパはつづけました。

「海はすきかってをしているとしか思われん。ゆうべは島ぜんたいをおびやかした。なぜだ。どうしたのか。海にはリズムもなければ理由もないんだ。もしなにかがあるとしても、それはわしの理解をこえるものだね。」

パパはむすこの方に、たずねるような目をむけました。

「もしそういうものがあれば、パパにはわかるはずですよ。」

ムーミントロールはこういって、こんな重大なことを、パパが自分に相談してくれたことで、うちょうてんになりました。そして、海とはいったいどういうものかと、自分でもいっしょうけ

西風がますますつよくなり、秋の空が明るくすみわたりました。島の西のはしにくだける白波は、まだ見たこともないほど高く、また白くなりました。かれはヒースのしげみの方へいって、そこに横になりました。

気持ちはたいそうおだやかで、たのしくさえありました。パパとママが、やっとなにがおこったかに気がついたので、しんからほっとしたのです。

とりのこされた一ぴきのみつばちが、しずかにヒースの花から花へ、うなりながら飛んでいました。ヒースにはなにもこわいものがないみたいで、いつもの場所にそのままはえていました。

（ここにぼくの小さな小屋を建てたらどうだろう。地面にくっつくほど低く建てて、戸口の前にはたいらな石をおいてさ……。）

と、ムーミントロールは考えました。

太陽が暗い大きな雲のうしろにかくれたとき、ムーミントロールは目をさましました。ムーミンパパがとてもしんぱいそうな顔をして、そばに立っていました。

「どうかしたの。」

ムーミントロールがきくと、パパはこたえました。

「どうもこうもないよ。この木たちのやることは、なにもかもだめにしてしまうんだ。わしは海のやつがさっぱりわからなくなった。まるっきり順序も規則もありゃしないんだからなあ。」

ムーミンママが、こういってききました。
しかしムーミンパパは、もうノートに深く鼻をつっこんで、灯台岩へむかっていました。パパは灌木につまずき、それからもみの木のあいだに見えなくなりました。
「ママ、こんなことはしんぱいするほどのことではないと思うな。木たちがちっとばかり動いただけさ。やつらはまた根をおろして、いつもとおんなじに育っていくよ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「ほんとにそう思う?」
ムーミンママは、おしころした声でいいました。
「木はママのお庭のまわりに、小さい木かげ道をつくるかもしれないさ。庭はきっとよくなります。そうじゃないかしら。うす緑の葉をつけたしらかばの木がたくさんはえて……。」
かれはママをなぐさめようとして、こんなふうにいいました。
しかしムーミンママは首をふって、灯台の方へ歩きだしながらいいました。
「そういってくれるのはうれしいわ。だけど、わたしにはそれがしぜんな動きだとはどうしても思えないの。もとのうちでは、一度だってそんなことはなかったもの。」
ママはすこしのあいだ、自分の庭にはいって気をおちつけることにしました。
ムーミントロールは、はんのきにつないでおいた冒険号のロープを、ほどいてやりました。南

「いったい、なにをいおうとしていらっしゃるのよ、あなた。」
と、ムーミンママはしんぱいそうにたずねました。
　ムーミンパパは、まっかになりました。
気まずい沈黙がすこしつづいたあとで、ムーミントロールがつぶやきました。
「みんな、こわがっているんだよ。」
「そう思うかね。」
と、ムーミンパパは、ほっとしていいました。
「うん、どうもおまえのいうのがあたってるようだ。」
パパはえぐりとられた地面を見まわしました。木という木はぜんぶ海の方から移動してしまっています。ムーミンパパはきゅうにさけびました。
「とうとうわかったぞ！　みんなは海をおそれているのだ。海がみんなをおどかしたのだ。ゆうべ外に出たとき、わしはなにかがおこっていると感じたが……。」
　こういってパパは、ノートをあけてページをさがしました。
「これが、けさかきとめたことだ。……ちょっと待てよ。これについては、うんと念をいれて考えなければならんぞ……。」
「時間がかかりますか。」

からってヒースにしがみつこうと、ひっしであがいていました。
「これはいったいどういうことなの。どうしてこんなことをするんでしょう。」
と、ムーミンママが、ムーミンパパを見ながらささやきました。
ムーミンパパはパイプをかみかみ、ひっしになってなにかしら説明をみつけようとしました。
「わしにはわからん。」
といわされるのは、つらいことでしたもの。パパはわからないことだらけなのには、もううんざりしていたのです。
とうとうパパはいいました。
「こういったことが、夜中にはおこるんだよ。いろいろなものが夜のあいだにかわるのさ。そうだろう。」
ムーミンママはまじまじとパパを見つめました。ムーミンパパはいらいらしながらつづけました。
「こういうこともありうるさ。その……わしのいいたいのは、暗やみの中では、ある秘密の変化がおこるってことだな……もしそこにわれわれまでが出かけていって……そう……あの……ごたごたにまきこまれると、それに拍車をかけることになって……その混乱は、朝われわれが起きたときにまで、のこってしまうということだな。」

じめました。わらうといい気分になるものですよね。
（ママみたいにがんこな人はいやしない。こんなことで、いったいりんごの木が育つんだろうか。）
と、ムーミントロールはあやしみました。そりゃ、ママは、りんごの木を育てるだけの力をもっているのですけれど。

いろいろ考えてみましたけれど、けっきょくあき地より小さな小屋を持つほうがずっと楽しそうだと、かれは思いました。自分の手で建てた小さい小屋です。それだったら、まどにきれいな小石をならべることだってできます。

ムーミンママとムーミンパパは、森がたしかに灯台に近づいてきていることを、午後になってから、やっと気がつきました。

はんのきはほかの木よりいっそういそいでいるようで、もう島の半分道まではいあがってきていました。冒険号をつないであるはんのきだけはもとのままでしたが、その木も綱にしばりつけられたまま身をのばして、いまにもしめころされそうになっていました。ポプラはすっかり葉をなくして、おそろしさにサラサラと音をたてることもできなくなっていました。そのかわり、おびえて何本かずつかたまって、ヒースの中ににげこんでいましたっけ。木はみんな虫みたいにはいつくばって、石のまわりに根を結びつけようとしたり、南西風にさ

ムーミンママは、花だんのまん中に小さな囲いをつくっていましたが、その中にはなにかとてもいいものがはいっていそうでした。きっとママは、なにかあたらしい実験をはじめたのでしょう。それはいったい、なんでしょうか。

そこへ、ちびのミイが走ってきていいました。

「ちょいと、あれなんだか知ってる？　三回であててごらん。」

「わからないな。教えてくれ。」

と、ムーミントロールはいいました。

「あれはりんごよ。ママは海岸に流れついたりんごを植えたのよ。種からりんごの木がはえるだろうといってるわ。」

と、ちびのミイは教えました。

「りんごだって？　木になるまでには何年も何年もかかるんだぜ。」

と、ムーミントロールはおどろいてくりかえしました。

「指きりするわね。」

ちびのミイはこういうと、風のようにとんでいきました。

ムーミントロールはそこにのこって、囲いの中をよくしらべました。囲いはたいへんじょうずにできていて、もとの家のベランダの手すりにちょっとにていました。かれはくすくすわらいは

をかべの庭じゅうにかきました。こうすればだれかがママを見たとしても、そのときじっとしてさえいれば、どれが本物のムーミンママだか、だれにもわかりませんものね。

「そんなの、とっても自己中心主義よ。」

と、ちびのミイはいいました。

「ママは自分ばっかりでなく、あたしたちもかくことはできないの？」

「だってあんたたちは、島の遠くの方にばかりいるじゃないの。」

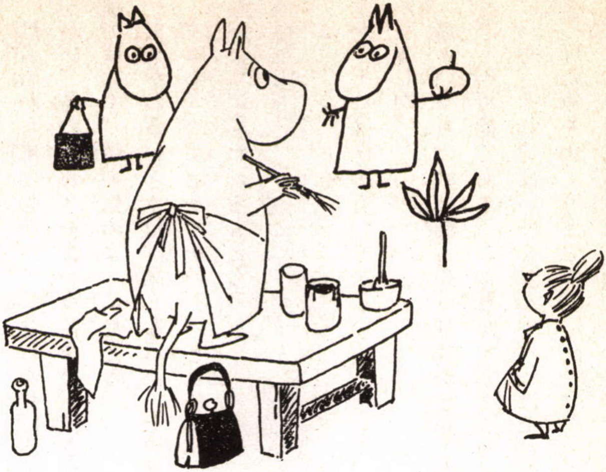
こういってからママは、ムーミントロールに、あのあき地でパーティーをひらくことについてきいてみましたが、むすこはむにゃむにゃ口の中でいっただけで、いってしまいました。

（うみうまのせいだわ。やれやれ、そういう年ごろなのねえ。）

こう、ムーミンママは思って、もう一つムーミンママをかきました。こんどのはライラックの木の下にすわって楽しんでいるママでした。

ムーミントロールはゆっくりと階段をおりて、灯台岩へ出ました。あき地はもうきえてなくなっているし、うみうまももういないのです。

かれは岩の下にあるムーミンママの庭をながめて立っていました。ばらの木はぜんぶかれていましたが、それはばらがこんなやわらかな場所に移されて、よりかかる砂も岩もなかったからでした。



それで、いそいでその考えをうちけし、海の不可思議さをつきとめて、解決してやろうと決心しました。そうすれば、パパは海がすきになれ、自尊心をたもつこともできるでしょうからね。

ムーミンパパがこんなことを思いあぐねてすわりこんでいるあいだに、ムーミンママは自分の庭にますますうちこんでいました。ママはかきくわえをしなければならないものが、いっぱいあることを知りました。だんだんにママは気が大きくなってきて、階段に足音がきこえても、木の幹のうしろにかくれるようなことはしなくなりました。

かべにかいた木にかくれるのですから、ママのからだはコーヒーポットよりも大きくてはだめなのです。ママはそんなちっちゃな自分の絵

からいこと。水にもぐれば水の重さを感じること。海草は風上ではなく、風下にうちあげられる。灯台岩から風にむかって板きれを投げると、板きれは岸にはあがらず、岸からすこしはなれてうかび、島のまわりをまわる。また、板きれを水平線にむかってかざすと、空と水のさかいは直線ではなく、円の弧のように見える。

天気がわるいと水位は高くなるが、その反対のこともある。

波は七つめがばかでかいが、ときには九つめのこともあり、またときには、まるっきり規則がないように思われることもある。

波がしらのてっぺんにうかんでいる白いあわ。それはどこからきて、どこへいくのか。なぜか。

ムーミンパパはこんなようなことだの、まだそのほかたくさんの問いにこたえようとしたのですが、それはとてもむずかしいことでした。つかれてしまったパパは、非科学的になって、こうかきました。

「島というものには橋もなければかきねもない。だから、追い出されることも、とじこめられることも不可能である。この意味するところは……。」

いや、それではいけません。パパはそれを×でけして、まだすこししかかいてない「事実」と名づけた章をめくりました。

海はちっとも規則にしたがわないのだという、もやもやとした考えが、またもどってきました。

ひったくろうとしました。パパがため息をついてページをめくると、お気にいりの五ページがでました。そのページには、つぎのような考察がしるしてあるのでした。

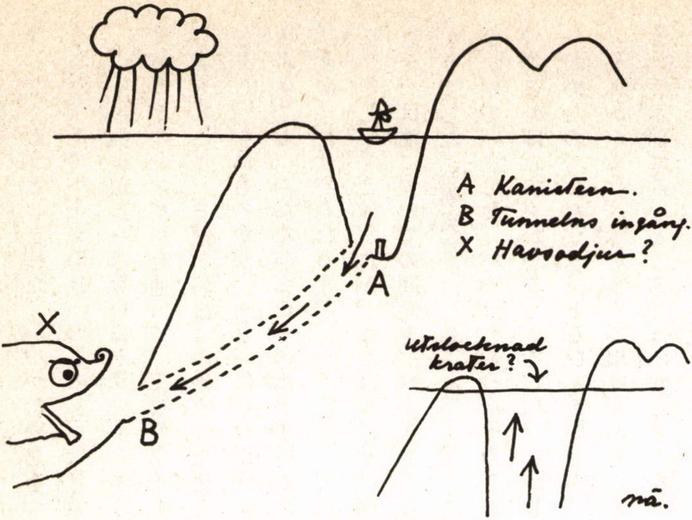
――黒池は信じられないほど深いトンネル（地図に示されている）で海とつながっていること。そしてそのトンネルを通って、宝物やウイスキーの箱やがいこつが、不幸にも池の底にしずんでしまったこと。さびた缶はAの地点にたまたまひっかかったもの。

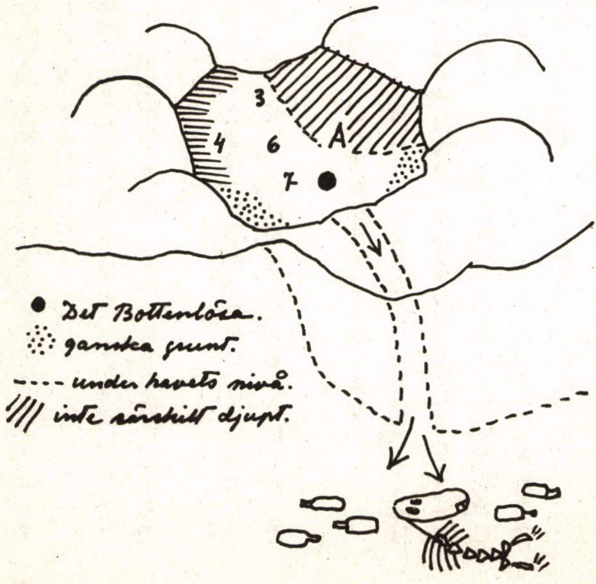
もし、なにものかが、あるいはだれかが（これをXとよぼう）Bの場所にいてトンネルに水をふきこみ、ふたたびまたその水をすいあげたら、とうぜん、水は息をしているように上がったり下がったりするだろう。

しかしXとはだれか、またはなにか。海の怪物か。これは証明することができない――。

パパは池についての問題を、のこらず「仮説」という章にうつしましたが、それは長くなるばかりでした。「事実」という章では、ムーミンパパは、水は深くなればなるほど冷たくなることをかいていました。パパはもちろんそのことを、かきはじめる前に知っていたのです。足を水につっこめば、すぐわかることでした。しかしこんどは、じょうずにくふうしたびんで、それをたしかめたのでした。水をとるびんを引きあげるときに、水圧でコルクがひっこむのです。

それからまた、水が重くて塩けがあることもかきました。水が深くなればなるほど重くなり、そして水面に近いところでは水がからくなる。そのしょうこ――海水の水たまりはたいへんに塩


A Kanistern.
B Tunnelns ingång.
X Havsodjur?
X
A
B
Utslocknad krater?
nå.


3
4
6
A
7
Det Bottenlösa.
ganska grunt.
under havets nivå.
inte särskilt djupt.

しかしムーミントロールは、おもしろいどころではありませんでした。しげみは灯台の方へむかって移動をはじめていました。島をつっきって灯台の階段の方へと動いていたのです。毎晩すこしずつ近づいていって、ついには、先頭のはいまつなんかは、とびらをおして中にはいろうとするまでになっていたのです。

「とびらはあけてやらないぞ。」

と、ムーミントロールはいって、だしぬけにちびのミイの目を見つめました。その目はとてもたのしそうで、いたずらっぽく、あんたの秘密なんか、みんな知ってるわよ、とでもいいたそうでした。

それで、むしろムーミントロールは、気がらくになりました。

朝食のすぐあとで、ムーミンパパは外へ出かけて、灯台もりの岩だなの上にこしかけました。まもなくパパは、深い考えにしずんでいきました。

パパのノートは「海についての考察」で、もうほとんどいっぱいになっていました。こんどのあたらしい見出しは、「夜に海が変化するようす」でした。

ムーミンパパはそこに線をひきました。そして、そこにすわったまま、長いことなにもかいてない白紙のページを見つめていました。つよい風がふいてきて、パパの足のあいだからノートを

こみました。ヒースはありがたいことに、いつもとまったくおなじでした。いつものように花をさかせ、わたしはここにいることにきめているのよ、といってるみたいでした。

ちびのミイは、考えぶかそうにつづけました。

「モランは大きくて、冷たくて、そこらをうろつきまわって、どこにでもすわるでしょ。あの人がすわるとどういうことになるか、あんた、知ってる？」

むろんムーミントロールは知っていました。なにも育たなくなるのです。モランのすわったところには、永久になにも育たないのです。

「なぜおまえは、そんなふうにぼくを見つめるんだい。」

ムーミントロールがこういってたずねると、ちびのミイはむじゃきにいいきりました。

「あたいがあんたを見つめたって？　なぜあたいが見つめなきゃならないの。たぶんあたいは、あんたのうしろにいるものを見ていたんでしょ……。」

ムーミントロールはとびあがって、こわごわうしろをふりかえりました。

「あっはは。あたい、からかっただけさ。」

と、ちびのミイはよろこんでさけびました。

「島ぜんたいが、気でもちがったみたいににげだすなんて、おもしろいじゃない？　あたいはとてもおもしろいと思うわ。」

えるあと足で立ちあがると、ほっとした感じで、ちびのミイに会いました。
ムーミントロールが、ちびのミイをかわいらしいと思ったのは、あとにも先にもこのときだけでしょう。

小さな灌木の中には、たいした苦労もせずに根を土から引きぬいて、すこしはなれたヒースの中にとびこんでいるのもありましたが、まるでくしでとかさない髪の毛みたいに、もじゃもじゃにこんがらかっていました。こけはすっかり地面の中にもぐりこんで、深い緑の谷みたいに見えました。

「木はみんなどこへいこうとしているんだい。どうしてあんなに根を引きぬいているんだい。わけがわからないな。」

ムーミントロールはどなりました。

「こわくて、こちこちになっているのよ。」

ちびのミイはムーミントロールを、ま正面から見すえながらいいました。

「あんまりこわいもんで、小さなまつ葉は一本一本さかさまにつっ立っているわ。あんたよりはみんなのほうが、よっぽどこわがってるのよ。そういうことはありえないとあたいが知っているんでなかったら、モランがこの近くへきていると思うしかないわね。あんた、どう思う。」

ムーミントロールはおなかの中までも気がめいっていく気持ちになって、ヒースの中にすわり

とがわかりました。しげみぜんたいの木が根を引きぬいて、ムーミントロールを石かなんかみたいに、ふみこえていったのでした。

マッチの箱はいつものところにちゃんとあったし、そのとなりには、くろぶどうのジュースのびんもありました。しかし、あき地はなくなっていました。——ただもう、からっぽになっていたのです。

出入口のトンネルは、ぜんぶふさがってしまっていました。どこまではっていってみても、にげていく木々でいっぱいでした。

ムーミントロールは、ねぶくろをひきずりながらはっていきました。ねぶくろはプレゼントにもらった上等のものでした。

そのうちにカンテラが目にはいりました。それは自分がつるしておいた木にぶらさがっていましたが、その木そのものが動いていたのです。

ムーミントロールはしっぽの上にべったりすわって、ありったけ高い声でちびのミイをよびました。ちびのミイはすぐにこたえました。それはひとつながりの長い救助信号でしたが、その声はとてもすんだ小さなトランペットか、高い音をだす発声ブイみたいにひびきました。ムーミントロールはその声のする方へ、はっていきました。

目の前がやっと明るくひらけてくると、風がいきなりかれの顔にふきつけました。かれはふる

という、やさしい気持ちになっただけでした。
「あしたの晩はおどらせてやってもいい。だが、いまはいやだ。今夜は、ぼく家にいたいんだもの。」

ムーミントロールは心の中で、こんなことをつぶやきました。

そこでムーミントロールは、モランに背をむけて、遠まわりをして自分のあき地へもどったのです。

夜のあけがた、ムーミントロールはぞっとして目をさましました。ねぶくろの中に、とじこめられて、息がつまりそうでした。なにかにおさえつけられて、手足を外へ出すことができなかったのです。まるで世界がひっくりかえったみたいでした。そして自分は深い土の中にいるようで、へんな茶色の光と、ふしぎなにおいにかこまれていました。

それでもやっとのことで、ムーミントロールはねぶくろのチャックをあけることができました。土とまつ葉の雲がまわりでうずまいていました。世界じゅうがかわってしまったようで、なにがなんだかわけがわかりませんでした。そこらいちめん、茶色の根が地図のようにはいまわり、ねぶくろの上をななめにこえているのもありました。

木々はもう動いてはいませんでしたが、みんなが夜のあいだに、頭の上をとびこえていったこ



ムーミントロールは、岩が黒池の方へ落ちこんでいる場所へやってきました。がけの下で水のはねる音がしています。かれはとまらずに歩きつづけましたが、自分がふうせんのように軽い心もちがしました。おまけに、ちっともねむくもありませんでした。

そのとき、ムーミントロールは見たのです。モランが島の中まであがってきていたのです。

モランは灯台岩の下に鼻をこすりつけながら歩きまわっていました。前後にからだをゆすって、ヒースのにおいをかいだり、いかにも近眼みたいに、まわりのものを、顔をくっつけて見つめたりして、それから池へむかってふらふら歩いていきました。

ムーミントロールは思いました。

（モランは、ぼくをさがしているんだな。だけどあいつには、すこしおちついてもらいたいものだ。ぼくはカンテラをつけないよ。あんまり灯油をくうからな。）

ムーミントロールはしばらくじっと立ったまま、島の上をさびしそうにさまようモランをながめました。でも、そっとしておいてやろう

「うみうまと友だちになるなんて、できない相談だと思うわ。だけど、だからといって失望することはないのよ。きれいな鳥とか美しいけしきを見るのとおなじに、うみうまを見ることができたらそれで幸福だと思えばいいんじゃない。」
「きっとママのいうとおりだね。」
と、ムーミントロールはいいました。
ふたりは、しげみを通りぬける風に耳をすませました。かれはモランのことはすっかりわすれていました。
「なにもママにあげるものがなくて、ごめんね。」
と、ムーミントロールがいうと、ママはいいました。
「あしたという日があるじゃないの。ここならふたりでちょっとしたパーティーがひらけるわ。ほかの人たちだって、きたければきてもいいじゃない。まあ、おまえの住んでいるところが見られてよかったこと。さあ、わたしは灯台へもどらなくちゃ。」
ムーミンママを家へ送ったあとで、ムーミントロールはカンテラをけしました。ひとりになりたかったのです。
風ははげしくなってきました。暗やみと海のとどろきと、ママのいったことばなどが、ムーミントロールにおちつきをあたえました。

こんなことをいいだしました。
「あのね、わたしときどき、この島がわたしたちをのせたまま、流れているような気がするのよ。わたしたちがどこかへ漂流していくような……。」
そのときだしぬけに、ムーミントロールがいったのです。
「ママ、ぼく、うみうまたちに会ったんだよ。でもあいつらは、ぼくにはぜんぜん興味がないみたいだった。ぼくはただあいつらといっしょに浜べを走ったり、いっしょにわらったりしたかっただけなの。あいつらはとてもきれいだったよ……。」
ムーミンママはうなずくと、しんみりといいました。



ムーミントロールはいいました。

「うん、夜になるとすこし不安になるんだよ。だけど、ママはそんなことを気にかけなくていいの。ぼくたちみんながねてしまうと、島が目をさますだけのことだもの。」

「わかったわ。そうなんでしょうね……。」

と、ムーミンママはいいました。

ムーミントロールは正面口から自分のあき地へ案内しましたが、ママがあとからついてきているのをたしかめるためにときどきうしろをふりかえりました。ママは木のえだにさえぎられましたが、どうやらあき地にたどりつきました。

「ふうん、ここがおまえの住んでいるところなのね。とても住みごこちがよさそうじゃないの。」

と、ムーミンママはさけびました。

「いま屋根の葉は、ほとんどなくなってしまったけど、屋根が緑のときにママに見せたかったなあ。こうしてカンテラをつけていると、ほらあなみたいに見えるでしょ。」

こうムーミントロールは説明しました。

「ほんと、ほらあなそっくりね。マットと、それからこしかけ用の小さな箱を持ってくるといいわね……。」

といって、それからママは、空を見あげて、星が雲のあいだをすぎていくのを見ていましたが、

をしているか。観察したこと——島は暗やみの中ではまったくちがっている。すなわち、(イ)なにかへんな音がする。(ロ)まぎれもない一種の動きがある。」

　ムーミンパパはちょっとためらってえんぴつをあげ、それからまたつづけました。

「つよい感情の動揺が、周囲のものへ移されることがあるだろうか。たとえば、われわれがママをみつけられなかったとき、わしはほんとうにあわてさせられた。これを調べること。」

　パパは自分のかいたことを読みかえして、なにかの結論にたっしようとしましたが、それはできませんでした。パパはあきらめて、のろのろとベッドに近づくと、頭の上へ毛布をひっかぶる前にいいました。

「ねる前にちゃんとランプをけしたかどうかたしかめろよ。油のにおいがするのはいやだからね。」

「もちろんですとも、あなた。」

　ムーミンママはいいました。

　ムーミンパパがねてしまうと、ムーミントロールはカンテラを手に、ムーミンママを案内して島をつっきっていきました。ママはヒースの中で立ちどまると、耳をすましてききました。

「夜はいつもこうなの？」

しまったように思いました。ほんものの海はあのように青くはないし、月はちょっとばかり誇張されています。かれはテーブルのそばにすわって、できるだけやさしくささやきました。
「ママ、ぼくはしげみの中のあき地に住んでいるんだよ。」
「あら、そう。そこはいいところ？」
「うん、とても。ママもいつかきてみたいんじゃない？」
「そりゃいってみたいわ。いつ、つれてってくれる。」
ムーミントロールはいそいであたりを見まわしましたが、ムーミンパパはノートにむちゅうでした。そこでかれはささやきました。
「いますぐに、今夜。」
「そうね、だけど、あした、みんなでいっしょにいったほうがたのしいんじゃない？」
と、ムーミンママはいいました。
「それじゃ、話がちがうよ。」
と、ムーミントロールはいいました。
ムーミンママはうなずいて、ぬいものをつづけました。
ムーミンパパは、ノートにつぎのようにかき入れました。
「夜だからというだけで、事実に変化が生ずることがありうるか。調べること——夜、海はなに



と、ムーミンママはむじゃきにいいました。
「しかし、おまえ、わしたちをこんなにまでおどろかすのは、よくないね。わしたちが夕がた家に帰ってくると、おまえはいつもここにいる――こういうきまりになっているんだ。それをよくおぼえていなさい。」
こう、パパはいいました。ムーミンママはため息をつきました。
「それがたまらないのよ。たまには変化も必要ですわ。わたしたちは、おたがいに、あまりにも、あたりまえのことをあたりまえと思いすぎるのじゃない？　そうでしょ、あなた。」
ムーミンパパはいぶかしげにママの方を見ましたが、ママはわらってぬいものをつづけるだけでした。それでパパはカレンダーのところへいって、きょうが金曜日であるという×印をつけると、その下にかきつけました。
「風――風力５。」
ムーミントロールは、うみうまの絵がなんとなくかわって

いました。海は灯台岩のむこうですごい音をたてていました。

「ところで、いったいおまえはこのところ、どこに住んでいるんだね。」

と、ムーミンパパはいいました。

「まあ、あっちやこっちやだよ。」

ムーミントロールは目をそらして、もごもごつぶやきました。

「わしはやらなければならないことが、あんまりあったもので……。」

と、ムーミンパパはことばをぼかしました。

ムーミントロールの耳には、石がひとりでにひっくりかえる音がきこえました。石どうしがすれあうふしぎなかわいた音でした。

「ぼく、しげみの中をのぞいてくるよ。」

かれがちょうどそういったときに、灯台のまどにろうそくの光がぽっちりと二つあらわれました。ムーミンママが家に帰ってきたのでした。

みんながへやにはいってきたとき、ママはテーブルのそばにすわってタオルをつくっていました。

「いったいぜんたい、おまえはどこへいっていたんだ。」

と、ムーミンパパがさけびました。

「わたし？　空気をすいに、ほんのちょっと散歩してきただけ。」

（ママがいなくなった。ママはとてもさびしかったので、いってしまったのだ。）
と、ムーミントロールは考えました。

　ごろごろしている石のあいだにしゃがんでいた、ちびのミイはいいました。

「ほら、石が動いているわよ。」

「そんなことどうでもいい。ママがいなくなっちゃったんだ！」

と、ムーミントロールはどなりました。

「ママなんてものは、ほかのものみたいに、そうやすやすとなくなるものじゃないわ。」

と、ちびのミイはいいました。

「よくさがせば、ママはいつだってどこかのすみっこからみつかるものさ。あたいは島ぜんたいがはってにげださないうちに、ひとねむりするわ。あたい、いっとくけれど、遠からずここで、悪魔のようなすごいさわぎがもちあがるわよ。」

　カンテラがむこうの黒池のそばに見えたので、ムーミントロールはそっちへいきました。ムーミンパパはこちらをむくと、高くカンテラをかざしていいました。

「ママが落ちたのでなければいいが……。」

「だいじょうぶですよ。ママは泳げるもの。」

と、ムーミントロールはいいました。ふたりは顔を見あわせたまま、いっしゅんだまって立って

づき、大きな灰色の山のようにもりあがった波が、島をめがけておしよせてくるのでした。
漁師は海のうねりを見ながら、家の中にすわっていました。世間のことについて、なにもわずらわされずにすむのはすばらしいことでした。話しかける人も、問いかける人も、きのどくに思ってあげる人も、ぜんぜんないのです。海と空の神秘さと、そのはかりしれない広大さだけが、自分の上におおいかぶさり、そしてまたすぎていくので、けっして失望することがありませんでした。

もうほとんど暗くなったころ、ムーミントロールがすべっこい岩をこえてやってきたため、男の孤独はやぶられました。ムーミントロールは手をふったり、大きな声を出したりしたあげく、しまいにはまどをたたきだしました。ママがいなくなったんだよ、とかれはありったけの声でどなりましたが、漁師はわらって首をふっただけでした。まどガラスがあまり厚くて、なにもきこえなかったのです。

ムーミントロールは風によろめきながら、波のくだけるみさきを通って、ヒースのしげみの方へさがしに帰っていきました。

パパのよんでいる声がきこえ、カンテラが左右にゆれながら岩の上をはっていくのが見えました。今夜の島は恐怖にふるえていて、不安なささやきやさけび声でうずまっていました。ムーミントロールは走っているうちに、足の下で大地が動いているのをはっきりと感じました。

第7章



南西風

日のくれがたに、漁師は、そろそろあのすばらしい大波がやってくるころだと感じました。それで自分の船をみさきの高いほうにひきずりあげてうらがえしにし、つり糸もまいてしまいました。それから自分のセメント小屋にもぐりこんで、まるでしわくちゃのボールみたいにまるまりました。そうやってそこに横になって、かんぜんに自分をひとりぼっちにしたのです。

南西風は、ほかのどの風よりも漁師のお気にいりでした。風はすっかりこしをおちつけてふきつづけ、夜になってもちっともよわまりませんでした。それは秋の南西風で、ときには何週間も何週間もふきつ

ブルの上に置いてあるし、まどの外ではまだ黒い鳥が、灯台のまわりをまわっていました。西の空の色があせてしまってから、鳥はやっと海をこえて飛んでいきました。夕がたのお茶の時間になると、家族のものたちは帰ってきました。

「ママはどこ。」

と、ムーミントロールがたずねました。

「たぶん水でもくみにいったんだろ。ほら、ごらんよ、みんなが出かけてから、ママはまた木を一本かきあげたんだね。」

ムーミンママは、りんごの木のうしろに立って、みんながお茶の用意をするのを見ていました。ママにはみんながすこしばかりぼやけて見えました――まるで水の中を動きまわっているみたいに。でもママは、ちっともおどろきませんでした。ママはやっと自分の庭に帰ったわけで、すべてがあるべきところにあり、はえるべきところにはえていました。ちょいちょい、ほんものどおりとはいえないところもありましたが、そんなことはどうだってかまいませんさ。

ムーミンママはたけの高い草の中にすわって、川むこうのどこからかきこえてくるかっこうの鳴き声に、耳をかたむけました。

お茶がわくころには、ママはりんごの木に頭をよせたまま、ぐっすりとねむりこんでいましたっけ。

るように感じられたのです。
そのとき、いなずまのような速さで、一つのかげがかべをかすめました。なんだか黒いものが、まどの外を飛びすぎたのです。見ると、まっ黒い大きな鳥が、灯台のまわりをぐるぐるとまわって、西、南、東、北と、つぎつぎにまどの外を通りぬけては、くるったようにやすみなくつばさをばたつかせているのでした。
「わたしたち、取りかこまれたんだわ。」
ムーミンママはうろたえていいました。
「これは魔法の輪だわ。おお、こわ。もとのうちに帰りたいな。……もう、こんなおそろしい荒れはてた島や、いじわるな海をはなれてうちへ帰りたいな。」
ムーミンママはりんごの木をだきかかえて、目をつぶりました。木のはだはざらざらしていて、あたたかでした。海の音もきこえなくなりました。ムーミンママは、もう自分の庭の中にはいっていたのです。
へやの中には、だれもいませんでした。ペンキ缶はまだテー



談でした。一度には一つのかべしか使うことができないからです。それやこれやで、絵はどうも不自然に見えたのです。

ムーミンママが絵をかくのにいちばんいい時間は、日がしずむ直前でした。この時間にはへやの中にはだれもいませんので、ムーミン谷をはっきりと頭にうかべることができたのです。

ある夕がた、西の空の夕焼けが、ムーミンママがついぞ見たこともないほどきれいに燃えました。じつにみごとな日没だったのです。それは、赤と、だいだいと、ピンクと、黄色のほのおがまざりあった色で、荒れもようの暗い海の上の雲までが、その燃えたつ色でそまりました。西南の風が、まっ黒な水平線から島にむかってまっすぐにふいていました。

ムーミンママはテーブルの上にのって、赤ペンキで、木のてっぺんにりんごをかいていました。

（外側もぬれるほど、このペンキがあると、すてきなりんごやばらが、どっさりかけるんだがなあ。）

こんなことを考えながら、ママが空をながめていると、夕日がかべの上にもはいあがってきて、その上にかいたムーミン谷の庭の花々をもそめました。すると花々は、まるで生きているみたいに光りかがやきました。おまけにきゅうに庭がひろがって、曲がりくねったじゃり道までが、ベランダのほうへまっすぐにつづいているように見えたのです。ムーミンママは前足で木の幹にさわってみました。すると木は日の光であたたまっていて、いかにも、ライラックの花がさいてい

ムーミンパパは長いことながめていましたが、なにもいいませんでした。それからやかんを火にかけにいきました。

パパがまたふりむいてみると、ムーミンママはなにか青い大きな斑点をかいて、その上にどうやらボートらしいものをかいているのに気がつきました。だけど、まるっきりおかしなボートでしたっけ。

「こいつはあまりうまくないね。」

と、ムーミンパパがいうと、

「思うようにならないのよ。」

と、ムーミンママもかなしそうにいいました。

「なかなかいいアイディアだけれど、やっぱりベランダにかえたほうがよさそうだ。かきたくないものを、かこうとするのはよしなさいよ。」

こういって、ムーミンパパは、おくさんをなぐさめました。

そのときからこっち、ムーミンママの壁画は、だんだんムーミン谷のすがたに近くなってきました。ときには、遠近関係をあらわすのにてこずったこともありました。また、実際その場にあるものを、背景からきりはなして、それだけとくべつに独立してかくこともありました。居間のストーブとか、道具類がそうでした。それにへやのぜんぶをかきこむということも、できない相

ムーミンママの壁画は、だんだんきれいにできあがってきて、いまでは、戸のところまでひろがっていました。ママは花と実がいっぱいについた、大きな緑色のりんごの木をかきました。木の下の草の上に、落ちたりんごもかきそえてありました。どこもかしこも、ばらの木だらけで、その多くは、どこの庭にもある大輪の赤いばらでした。木のまわりは、白い貝がらでかこんでありました。井戸は緑色で、まき小屋は茶色でした。

ある夕がた、夕日がかべをてらしているとき、ムーミンママはベランダの一部をかいていました。

そこへムーミンパパがはいってきて、その絵をちらっと見ていいました。

「岩はかかないのかい。」

「ここには岩なんかありませんもの。」

と、ムーミンママは気のない返事をしました。ちょうど手すりをかいているところで、まっすぐに線をひくのが、なかなかむずかしかったのです。

「それは水平線かね。」

と、ムーミンパパは、またききました。

ムーミンママは顔をあげていいました――。

「ちがうわ。青いベランダをかいているんですの。この絵には海なんかありませんよ。」

やよ。ねえ、かわいいじゃない！　かわいいわ。」
　ムーミントロールは、顔があつくなるのを感じました。
　ムーミンママは、あのかなぐつを、みがき粉でみがきにみがいたんです。だから、銀のかなぐつの一つが、ほかのよりずっと光っているのを、ムーミントロールは知っていました。だけど、うみうまがひづめを水の中から出さないようにしていることも、わかっていましたから、どっちが自分のうみうまか、わからずじまいでした。
　やがて二頭は、海の方へいってしまいました。わらい声はまだきこえましたけれど、そのわらい声も、だんだんに遠ざかっていって、しまいには浜べをそよそよとなでていく風の音だけになりました。
　ムーミントロールは岩の上にあおむけにひっくりかえって、空をながめました。もう自分だけのうみうまを考えることはできませんでした。考えようとすれば、いつも目にうかぶのは二頭――ぜんぜん区別のつかない、わらっている二頭のすがたでした。しかもその二頭のうみうまが、海からとびだしてはまた海へもぐるばかりなので、目で追いかけるだけでつかれてしまうのです。しまいにはあとからあとからと、いくらでもうみうまがあらわれてきたので、かぞえる気もしないほどでした。ムーミントロールは、ただもうしずかにねむりたいと思いました。



と、二頭ともいいながら、くすくすとばかみたいにわらいました。

「あたしを助けてくれるの？」

と、一頭がいいました。

「ねえ、太っちょのうにちゃん、毎日あたしの絵をながめてるんだって？　そうなの？」

　もう一頭が、とがめだてしていいました。

「うにじゃないわよ。この子はたまごだけぼうやよ。それにあらしになったらあたしを助けてくれるとやくそくしたのよ。ママのために貝がらを集めているたまごの形をしたきのこのぼう

（どうしようもないわね。世の中って、そんなものよ。）

その夜は、雲が低くたれこめていました。ムーミントロールには見えなかったけれど、鳥たちが頭の上を飛ぶのがきこえました。

そのとき、うしろの黒池で水のはねる音がしました。ふりかえってみると、カンテラの明かりにてらしだされた黒い水のおもてに、二頭のうみうまがいるではありませんか。うみうまたちはがけの下を泳いでいたのです。きっと毎晩ここへきていたのに、ムーミントロールが知らなかっただけかもしれません。

うみうまはくすくすわらったり、おたがいに水をかけあったり、また前髪のあいだからムーミントロールの方に目をやったりしました。ムーミントロールは、二頭をかわるがわる見くらべましたが、二頭とも、まったくおなじ目をしていて、首にはおなじ花かざりをつけ、こまっちゃくれた頭もすっかりおなじでした。どっちが自分のうみうまか見当がつきません。

「きみかい。」

と、ムーミントロールはききました。

二頭のうみうまは、こっちへ泳いできましたが、ひざまでの深さのところに立って、

「あたしよ。」

「あたしよ。」

められ、南西の風がふくたびに、海の上までも赤や黄の葉が飛びました。

ムーミントロールはカンテラのガラスの三面を、すみで黒くぬりつぶしました。――まるでわるいやつがなにかわるいことをたくらむときみたいに。それから灯台をさけて、裏道をまわりました。灯台はうつろな目をして、じっとかれのゆく先を追っているみたいでした。ちょうど夕がたで、島が目をさましたところだったのです。

ムーミントロールには、島が起きだすのが感じられました。みさきのまわりでは、海鳥の鳴きさけぶのがきこえました。ムーミントロールは考えました。

(ぼくはもう、どうしようもないんだ。パパだって話せば、わかってくれるだろう。今夜はもう砂の動くのを見るのはまっぴらだ。こんどは島の東のはずれにでもいってみようか。)

ムーミントロールは、岩の上にすわって、カンテラの光る側を海にむけて待ちました。島は、やみの中にしずみましたが、モランはきませんでした。

ムーミントロールを見ていたのは、ちびのミイだけでした。ちびのミイのところからは、モランが砂浜にすわって待っているのが見えたのです。

ちびのミイはかたをすくめると、またこけの下にもぐりました。かのじょは、いままでにも、人々がおたがいにちがった場所で待ちあわせて、ばかみたいに会いそこなうのを、なんべんも見ていました。かのじょは考えました。

らんからな。そうだろう。海はなにかきまった規則にしたがって動くものか、それとも、かって気ままに動くものか、調べてみたいんだ……。これはとても重要なことなんだぜ。」

「もうずいぶんいろんな記録を、おとりになったんでしょう？」

と、ムーミンママはききました。

「うん、ずいぶんとったよ。だけど、本をかきだすまでには、もっともっと資料が必要なんだ。」

ムーミンパパは、テーブルの上にからだをのりだして、秘密をうちあけるようにいいました。

「海がほんとうにてまえがってなのか、それともよくいうことをきくのか、それが知りたいんだ。」

「だれのいうことをきくの。」

と、ムーミントロールは目をまるくしてききました。

ところが、ムーミンパパはきゅうにスープをすするのにむちゅうなふうをして、

「いや……なんだ……なにか規則があるかどうかということさ。」

と、口ごもりながらいうのでした。

ムーミンママが、コップに赤ペンキをすこし取り分けてあげると、パパは昼食をおえるとすぐ、最低水位の印をつけに出かけていきました。

ポプラの葉はすっかり赤くなり、あき地の地面にはしらかばの葉の黄色いじゅうたんがしきつ

やむをえないばあいには、はちをぬりつぶして鳥をかいてもよかったのです。

「まるでほんものそっくりだ！　わしにはどれがなんの花だか、ぜんぶわかるぞ！　あれはばらだね。」

ムーミンパパはさけびました。

「ちがいますよ。」

ムーミンママは、きげんをわるくしていいました。

「あれはしゃくやくよ。ほら、もとの家の階段の前にさいていた、あの赤い花よ。」

「あたいが、はりねずみをかいてもいい？」

と、ちびのミイがききました。

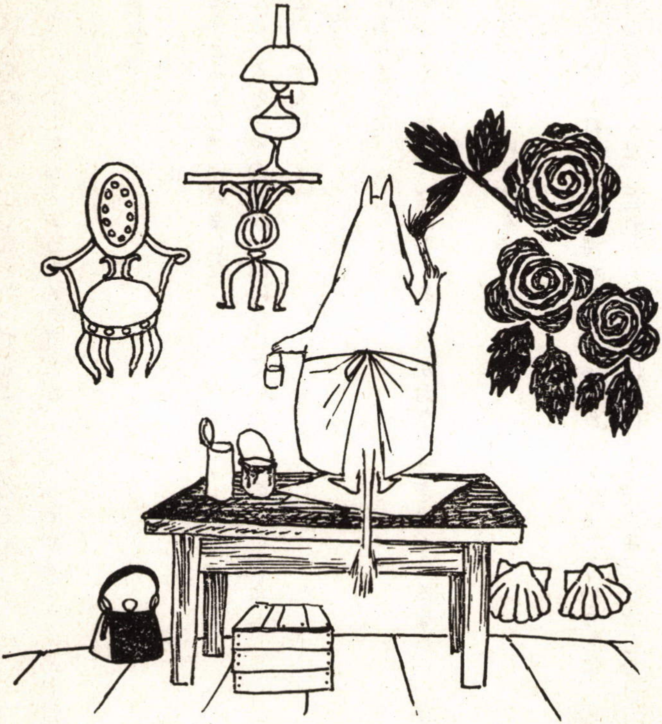
ムーミンママは頭を横にふりました。

「だめ、これはわたしのかべなんだから。だけど、あんたがおぎょうぎよくするなら、一ぴきかいてあげてもいいわ。」

昼食のときには、だれもみんないいきげんでした。

ムーミンパパはいいました。

「わしにすこし赤ペンキをかしてくれないか。海がまた、ふくれあがってこないうちに、岩に最低水位の印をつけなければならないんだ。これからはしんけんに、水位をチェックしなけりゃな



した。

それから、ムーミンママは、かべいっぱいに花をかきはじめました。思いきって大きな花でした。筆は大きいし、ペンキがかべ土によくしみこんで、くっきりとすきとおって見えました。まあ、きれい！　この仕事はたきぎをひくよりも、何百倍もおもしろかったのです。かべの上には、つぎからつぎへと花があらわれてきました。ばら・せんじゅぎく・さんしきすみれ・しゃくやく……。

ムーミンママ自身、こんなにうまくかけるとは、思ってもいませんでしたから、ひどくおどろいてしまいました。床の近くには、風になびく長い緑の草をかきました。上には太陽をかこうと思ったのですが、あいにくと、黄色いペンキがありませんでした。

みんなが昼食に帰ってきたときには、ムーミンママはまだ台所の火もつけていませんでした。箱の上に立って、緑の目をした小さな茶色のはちをかいていたところでした。

「ママ。」

と、ムーミントロールはさけびました。

「どう、うまいでしょ。」

ムーミンママは、はちの二つの目をていねいにかきおえて、満足そうにききました。だけど、なにしろ絵筆が大きすぎましたから、できたらもっとほかのものをかいたほうがよかったのです。

やがて冒険号は、砂浜に引きあげられました。帰ってきてみると、島がかわっていました。みんなはそれを感じましたが、なにもいいもしませんでしたし、どこがちがっているかも、ほんとうはよくわからなかったのです。たぶんちょっとのあいだでも島をはなれていて、そしてもどってきたから、そんなふうに感じたのかもしれません。

みんなはまっすぐ灯台にのぼっていって、その晩はみんなで、絵あわせパズルをして遊びました。ムーミンパパは小さな台所だなをこしらえて、ストーブの近くにうちつけました。

ピクニックは家族にとってたのしかったでしょうに、どうしたわけか、ムーミンママはすこしばかりかなしくなりました。その晩ムーミンママは、もとのうちの近くの島に住んでいるニョロニョロの家をたずねた夢をみましたが、それが緑のたのしい夏の島だったので、朝になって目がさめてから、かなしくなったのでしょう。

朝食のあとで、ムーミンママはひとりになると、だまってテーブルのそばにすわって、まどわくにはやしたすいかずらをながめていました。えんぴつはほとんど使いはたして、のこっていませんでした。のこっている短い分は、ムーミンパパがカレンダーに×印をつけたり、ノートにかきこむためにいるのでした。

ムーミンママはきゅうに立ちあがって、物置へあがっていきました。おりてきたときには、茶・青・緑の染め粉を三ふくろと、ペンキを一缶と、小さなすみと、古ぼけた絵筆を二本持ってきま

バスケットの中をかきまわして、サンドイッチをつくったりしました。ムーミンママがハンドバッグを持って出たのは、島にきてからはじめてのことでした。

　みんながやってきた岩は、小さくて冷たく、植物ひとつはえていず、海草や流木のあとさえも見えませんでした。ひょっこりと水の上にあらわれている、灰色のものにすぎなかったのです。でも、そこにすわってコーヒーを飲んでいるうちに、みんなはきゅうに、すべてがごく自然で、それでよいのだという気がしてきました。一家はぺちゃぺちゃといろいろなことを話しあいましたが、海のことと、島のことと、ムーミン谷のことにはふれませんでした。

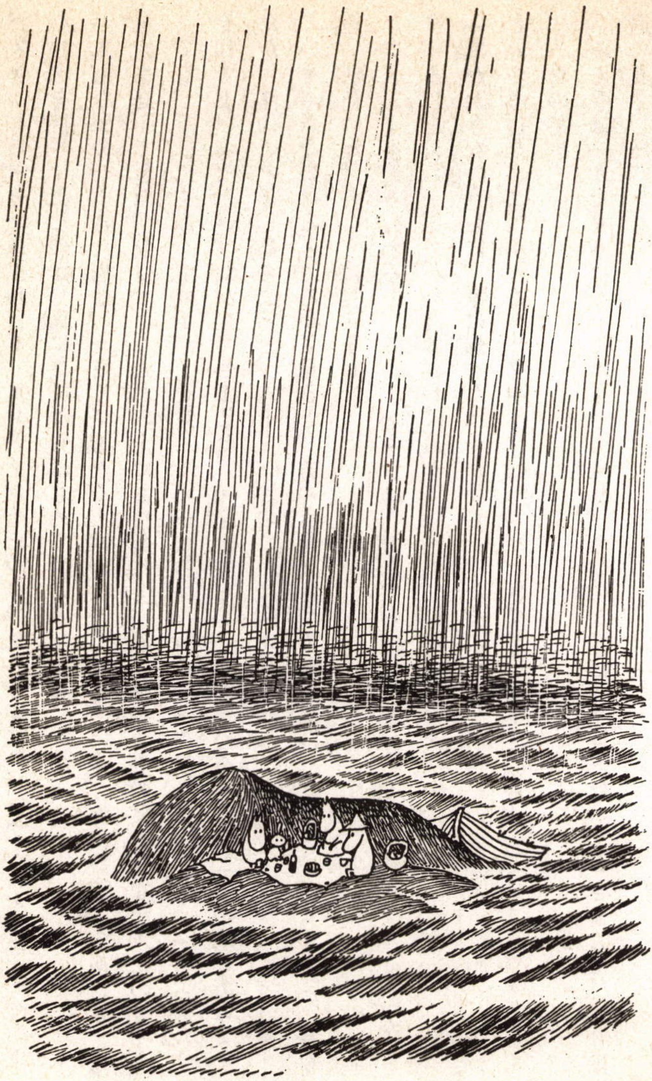
　いまみんなのいるところから見ると、あの巨大な灯台のある島は、雨の中で、とてもふしぎな遠い灰色のかげのように見えました。

　コーヒーを飲みおわると、ムーミンママは、海水でちゃわんをあらって、バスケットの中にしまいました。ムーミンパパは水ぎわにおりていって、風のにおいをかいでいましたが、

「風がおきないうちに、家に帰ったほうがよさそうだぞ。」

といいました。これがどこへピクニックにいったときでも、ムーミンパパのいつもいうせりふだったのです。

　みんなは一かたまりになってボートに乗り、ちびのミイはへさきへはっていきました。帰りは追い風でした。



「びっくりしなくてもいいのよ。火事じゃないんだから。こんな日ですもの、ピクニックに出かけないこと?」

「ピクニックだと? どうしてそんなことが考えられるんだ。」

と、ムーミンパパはどなりました。

「なんだか、危険が近づいてくる予感がするのよ。」

ムーミンママはどなりかえしました。

「いますぐピクニックに出かけないと、なにがおこるかわかったものじゃないわ。」

そこでピクニックときまりました。みんなはたいへんなてまをかけて、冒険号を黒池から引きあげました。それから風にさからって、島の北西の沖にあるいちばん大きい岩礁にむかって、船をこぎました。それからはぶるぶるふるえながら、ぬれた岩にはいあがったのです。

ムーミンママは、石と石のあいだで火をおこして、コーヒーをわかしました。それは何年も前からママがやっていたのと、そっくりおなじやりかたでした。四つの石でおさえたテーブルかけ、ふたのついたバター入れ、みんなのちゃわん、明るい花のように岩の上にひろげたバスタオル、日よけのかさもわすれてはいませんでした。コーヒーがわいたころから、霧雨がふりだしました。

ムーミンママはとてもごきげんで、ありきたりのつまらない話をぶっつづけにしゃべったり、

「まったく、わけがわからん。」
と、ムーミンパパがいいました。
「わしはまだ、考えがまとまらないんだ……。一つ思いついたことがあったが――きえてしまった。」
こういって、ムーミンパパは、ノートをとりあげると、岩の上を考え考え歩いていきました。
ムーミンママは、顔にありありと非難するような色をうかべて、黒池を見ました。
「みんなでたのしいピクニックにいくのに、ちょうどいい時期よ――バスケットにおべんとうを入れてさ。」
こう、ムーミンママはいうなり、まっすぐに灯台にもどって用意をはじめました。
ピクニックに必要なものがぜんぶそろったところで、ムーミンママはまどをあけて、ゴングを鳴らしました。ママはみんなが灯台の方へ走ってくるのを見ていましたが、わるいことをしたとはぜんぜん思っていませんでした――ゴングを鳴らすのは非常のときだけだということは、よく知っていましたけれど。
そのうちに、ムーミンパパとムーミントロールのふたりが下に立って、こちらを見あげました。上から見ると、ふたりはまるで洋なしそっくりだと、ママは思いました。ママはまどわくを前足でつかまえて、からだをのりだしてさけびました。

くすわりこんでいました。
　ちょうどそのとき、ムーミンパパが興奮して目を大きくみはりながら、ママのところにやってきたのです。
「黒池なんだ！　生きているんだ！　いそいで見にきてごらん！」
　こうさけぶとパパは、また池の方へ走ってひきかえしていきました。ムーミンママは立ちあがってわけがわからないながらに、パパのあとについていきました。しかし、ムーミンパパのいったことは正しかったのです。
　黒い水面はゆっくりともちあがったりまたさがったりして、まるで深いため息でもついているみたいでした。池は生きていたのです。
　ちびのミイが岩の上を走ってやってきて、いいました。
「おや、なにかおこりそうね。島が息をふきかえしたんだわ。あたいの思っていたとおりよ。」
「そんな子どもだましを、いうもんじゃない。島が息をふきかえすなんてことは、ありえないさ。生きているのは海なんだ……。」
　ムーミンパパはこういって、だまって鼻を前足でおさえました。
「どうなさったのよ。」
　しんぱいそうに、ムーミンママがききました。

ある晩の真夜中に、ムーミントロールは、おそろしいものを見ました。それは砂でした。砂が動きはじめたのです。砂がモランの下から、ゆっくりはってはなれていくのを、かれははっきりと見たのです。おどりながら地面を氷にかえていくモランの大きなひらべったい足の下から、きらきらと光る砂が、いちどににげていくのでした。

ムーミントロールはカンテラをわしづかみにすると、つんのめるように走って、非常口からしげみの中へ飛びこみました。そしてねぶくろにもぐりこむと、チャックを上までしめてねむろうとしたのです。でも、いくら目をしっかりとつぶっても、砂がどんどん水の方へはっていくのが、目にうかんでくるだけでした。

翌日、ムーミンママはかたい砂地から、のばらの木を四本ほりおこしました。ばらの木は根を石と石とのあいだにしんぼうづよくはりめぐらし、葉っぱを岩の上に、じゅうたんみたいにひろげていました。

ムーミンママは、ピンクのばらが灰色の岩にはよくにあうだろうと思ったのですが、それを茶色の庭に持ってきて植えたときには、にあうかどうか、じゅうぶんには考えなかったらしいのです。いま見ると、ばらはいかにも不安そうに一列にならんでいました。ムーミンママはばらの一株ごとにもとのうちから持ってきた土を一つかみずついれて、水をやり、それからそばにしばら

ているあいだ、あくびをしながら立っていました。

モランがカンテラを見るのには、きまった手順がありました。あのおばさんは、しばらくのあいだ、じっとランプを見つめていてから、うたいだすのでした。あるいは、歌のような音をたてるといいましょうか。それはハミングとくちぶえをいっしょにしたようなかぼそい音でしたが、どこまでもしみとおりました。頭の中にも、目のうしろにも、おなかの中までも、はいりこむような感じなんです。

歌といっしょに、かのじょはからだを前へうしろへゆっくりと重そうにゆすぶりながら、こうもりのかさかさした、しわくちゃのつばさみたいに、スカートをぱたぱたやるのでした。モランはおどりをおどっていたのです。

モランがたいそううれしがっていたのは、たしかです。しかし、ムーミントロールにとっても、このばかばかしい儀式が、とてもだいじなものになってきました。ムーミントロールは島がどう考えようと、この儀式はつづけさせたいと思いました。

しかし、島のほうはだんだんに、不安になってきたようでした。

木々は小声でささやきかわしてふるえていましたし、低くたれさがったえだとえだのあいだには、大きな身ぶるいが、海の波のようにつたわりました。浜べの草は身をゆすりながら、できるだけたいらになって、根をひっこぬいて逃げじたくをしていました。

ばならないと思って、こういいました。

「しげみに火がつかないようにな。それからねる前にカンテラをけすのをわすれるなよ。」

いつもおなじでした。みんなはちっともわかっていなかったのです。

ムーミントロールはねながらあたらしい風の音をきいて、考えました。

(月はかけてきている。うみうまは、しばらくは帰ってこないだろうな。)

しかし、がっかりするよりは、むしろほっとする気持ちのほうがつよかったのです。いまではここにねころんでうみうまとたのしく話しあうことを想像したり、そのすがたを思いだしたりしていれば、それでよかったのです。モランについてははらをたてる必要は、もうなかったのです。モランには、カンテラを見たいだけ見せておけばいいのです。

ムーミントロールは、自分がカンテラを持って毎晩、砂浜へおりていくのは、家族みんなのためなんだと、自分にいいきかせていました。つまり、モランがまっすぐに灯台までものぼっていって、ムーミンママのばらをだめにするのをやめさせるためだ、というのです。そうすれば、家族の人たちに、モランが島にきていることを見せないことにもなるし、またモランのほえるのをやめさせることにもなりますからね。かれがカンテラを持って浜べへ出かけるのは、そのためだったのです。

毎晩、ムーミントロールは、カンテラを砂浜に置いて、モランが明かりを思うぞんぶん見つめ

沖へ沖へと流されて、何年も何年も漂流したあげく、すべりやすいおぼんの上のコーヒーぢゃわんみたいに、世界のはしからころげ落ちたらどうしましょう……。

（ミイ子ちゃんはきっと、そのほうをよろこぶわ。）

ムーミンママはそう思うと、ひとりでにわらいがこみあげてきました。

（おちびさんは、夜はどこでねているんだろ。それからムーミントロールもさ……。母親というものは、すきなときに外にいってねるというわけにいかないのがざんねんね。ほんとは母親こそ、そういうことがときにはできるといいのにさ。）

こんなことを思いながら、ムーミンママは無意識のうちにいつものとおり、むすこに対する愛情こめたあいさつとして、手をふったのでした。

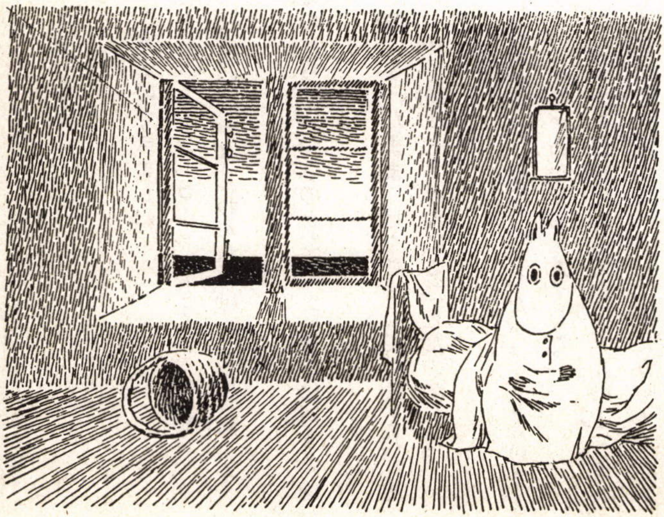
ところで、ムーミントロールは、自分のあき地で横になったまま、目をさましていました。そうしてママのあいさつを感じて、いつもとおなじく、耳を動かしてそれにこたえたのでした。

月が出ていないので、あたりはまっ暗でした。

ムーミントロールが家を出ることについては、だれも文句をいいませんでした。そんなわけで、自分でもほっとしたのだったか、がっかりしたのだか、わけがわかりませんでした。

毎晩みんなでお茶をのんだあと、ムーミンママはろうそくを二本ともしてテーブルの上に置くと、ムーミントロールにはカンテラを持っていかせました。ムーミンパパは、なにかいわなけれ

がいをきしませてバタンバタンと鳴りました。
そうやってねていると、ムーミンママは、自分は小さいのだなあとつくづく感じました。鼻をまくらにうめて、りんごの木のことやなんかを、いっしょうけんめい考えようとしました。けれども目にうかぶのは、風に波だつ海のことだけでした。まっ暗やみの中で、島の上におおいかぶさってきて、浜も島も灯台も、どこもかしこも占領してしまう海ばかりでした。ムーミンママの目の前には、世界じゅうがなめらかに流れる水になって、このへやもゆっくりとただよいはじめるすがたが、うかんできました。
もしも島が流れだして、ある朝思いもかけず、ムーミン谷のあの桟橋のところにたどりついたとしたら、どうかしら。それともまた、



第 6 章



月がかけていく

ある晩、夜の明けるすぐ前のころでした。ムーミンママは灯台のまわりがしいんとしたために、ふっと目がさめました。風の向きがかわるときのように、ふいにしずかになったのです。

ママは長いこと、ねたままで耳をすましていました。

はるか沖合いのやみの中で、あたらしい風がかすかにふきはじめました。ムーミンママには、まるでだれかが水の上を歩いてくるように、風が近づいてくるのがわかったのです。波の音はしないで、風だけでした。風はつよまってきて、とうとう島までやってきました。あけっぱなしのまどが、ちょうつ

はなにをしたのだったかな。
日々がごっちゃになって、頭の中でぐるぐるやりはじめました。島のまわりをめぐっているみたいで、砂浜をいつまで歩いても、どこにもいきつけないのとおなじでした。

「わかったよ。じゃあ、ねぶくろとカンテラを持っていくからね。」

　こう、ムーミントロールはいいました。

まどの外では、霧がうずをまいて通りすぎました。なんだか、へやごとどこかへ動いていくような感じです。

「ちょっとばかり、青い色がほしいわね。」

　ムーミンママはひとりごとをいうと、すいかずらをまどから外にはいださせて、それからまた内側の白いかべにも入れてかきました。そこに大きな花をさかせたのでした。



ムーミントロールはふかく息をすいこむと、できるだけ元気をだしていいました。
「ぼくは島のどこかに、ひとりでくらすつもりですよ。」
「外で？　あら、ほんと？」
ムーミンママは気のない返事をしました。そのときママは北側のまどのところにすわって、花を一つかいていたのです。
「いいわ、いつものようにねぶくろを持っていらっしゃいよ。」
花はすいかずらで、きれいでしたけれど、葉がついて複雑な形をしていたので、ママはほんとうのすいかずらのすがたを思いだそうとして、いっしょうけんめいでした。すいかずらは、海べにははえていないのです。風のあたらないあたたかい場所でなくてはだめなんです。
「ママ、こんどはいつもとちがうんだぜ。」
こういったときのムーミントロールの声は、なんだかひどくしゃがれていました。
しかし、ムーミンママはきいてはいませんでした。勇気づけるような声をだしただけで、絵をかきつづけていたのです。
ムーミンパパは立ったままで、自分のつけた×印をかぞえていました。金曜日が一日、はっきりしませんでした。木曜につけわすれたため、金曜に二つ×印をつけてしまったかもしれないのです。なにかじゃまがはいったため、はっきりとおぼえていなかったのです。――わしはあの日

ムーミンパパのような年よりトロールに、なんでうみうまの絵がわかるものか。あれが美しさそのものをかいた絵だということは、ムーミントロールでなくては、わかりゃしないんです。

ムーミントロールはしげみの中にはいっていって、小えだからカレンダーをはずしました。霧のために、紙にはしわができていました。花のわくをすててしまうと、かれはしばらくそこにすわりこんで、ぼんやり目の前を見つめていました。頭の中には、形になりかけたいろんな考えごとが、うずをまいていました。

とつぜん、ある考えがさっとひらめきました。

「そうだ、ぼくはここへひっこしてこよう。あとのれんじゅうは、あのひどい階段のある古ぼけた灯台で、日をかぞえてればいいんだ。」

それはむねをわくわくさせるような考えでした。あたらしくって、危険で、またすばらしいものでした。

そうなったら、なにもかもがかわってくるのです。周囲にだれもいないひとりぼっち、自分だけの感傷、だれも知らない可能性のあたらしい場がひらけるのでした。

ムーミントロールが家に帰ってきたときには、寒くてからだがこちこちになっていました。カレンダーがたんすの上にもどると、ムーミンパパはすぐにいって、カレンダーの上のかどに、×印をつけました。

「わかったよ。わかったよ。」

ムーミントロールは、大きな声でいいました。それからコーヒーをがぶ飲みにすると、階段をドタドタ音をたてながらおりていき、はだ寒い秋の朝の大気の中へとびだしていきました。

霧はまだはれないで、その中で見ると、灯台は大きな一本の柱のようで、上の方は見えませんでした。あの霧のまいているあたりに、ムーミントロールのことをちっともわかってくれない、家族のものがすわっているわけでした。ムーミントロールは、はらがたつやらねむいやらで、モランのことも、うみうまのことも、また両親のことも、まるっきり気にかかりませんでした。すくなくとも、そのときはそうでした。

灯台岩の下あたりで、ようやく目がさめてきました。見ると、いずれこうなることはわかっていたはずですが――モランがよりによって、ムーミンママの庭にすわっているではありませんか。

ムーミントロールはモランが一時間以上そこにすわっていたかどうか、考えてみました。どうか、そうでなければよいのですが。でも、ばらの木はすっかり赤茶けてきていました。

ちょっとのあいだ、良心のはしくれがちくちくとムーミントロールをつきましたが、すぐにいかりとねむけがもどってきました。

「ちぇっ、おやじがなんだってんだ。カレンダーに×印をつけるんだって！　それからどうする気だね。」

「どうしたのよ。」
ちびのミイが、まどからはいりこみながらいいました。
「きょうが何日だか、見なけりゃいかんのだ。かけどけいを持ってこなかったのは、大失敗だったな。それにしても、日曜だか水曜だかわからないんじゃ話にもならん。わしにはそんな生活はできないわい。」
と、ムーミンパパは説明しました。
ちびのミイは鼻から息をすって、歯のあいだからはきだしました。これは、（こんなばかげたことって、きいたことないわ。）という意味の、この子独特のいやらしいしぐさでした。
ムーミンパパにも、ちびのミイのいおうとすることはわかりましたから、ムーミントロールが、
「ぼくがちょっと借りたんです。」
といったときには、もういかりがそうとうひどく、こみあげていたのです。
そこでパパはいいました。
「こんな島にいるときには、とてもたいせつにしなければならないものがあるんだぞ。ことに、航海簿にいろいろな観察を記録していくばあいはそうだ。なんでもこまかく観察しなけりゃならん。なにをおとしてもいけない。時間、風の方向、水位、なんでもだ。すぐにカレンダーをかべにかけなさい。」

「あなたはなんて勇気があるんでしょう。あたしを助けるために、自分の命をお賭けになったのね……。」

ムーミントロールは、かすかににっこりしていいました。

「ぼくはきみをここにおいていくよ。ぼくはひとりでぼくの道をいくんだ。では、さようなら。」

うみうまは、ムーミントロールがいってしまいそうなのにびっくりして、

「なんですって？　あたしをおいていってしまうの？」

とさけびました。

それでもムーミントロールは、うみうまに手をふって歩いていきました。ひとりぼっちであらしの中を、岩をこえて、だんだん小さくなりながら……。

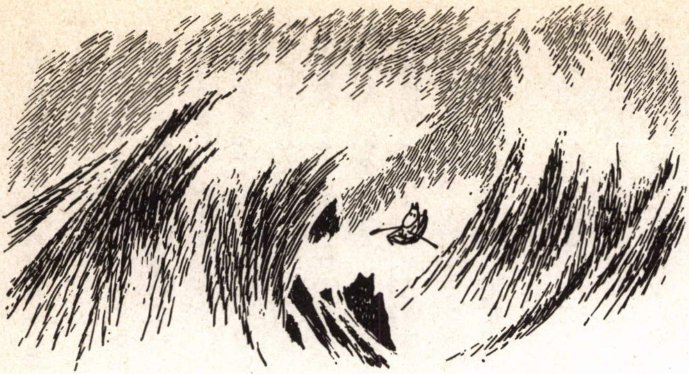
海岸に立って見ていた人々は、みんなおどろいて、たがいにがやがやと話しだしました……。

ここのところで、ムーミントロールはねむってしまったのでした。かれは幸福そうなため息をつくと、あたたかい赤い毛布の下で、まりのようにちぢこまりました。

「カレンダーはどこだ。」

ムーミンパパがききました。

「×印をつけなきゃならないぞ。だいじなことなんだ。」



りには岩礁が、海の中からぬっと大きな黒い歯のように、そそり立っています……だけど、こわくはありませんでした。うしろの海岸では、ちびのミイがさけんでいました。

「あんたにこんなに勇気があるとは、はじめて知ったわ。いままでのことはごめんなさいね。だけどもうおそいわ……。」

スナフキンも古ぼけたパイプをかみながら、つぶやきました。

「なつかしい友よ、さようなら。」

しかし、ムーミントロールは、小さなうみうまがまさにしずもうとしているところをめがけて、ひっしでこぎつけました。――かれがうみうまをボートに引きあげると、うみうまはぬれた金髪をふりみだして、ぐったりとして横になりました。

ムーミントロールはうみうまをぶじに海岸につれてきましたが、そこは遠くはなれたさびしい浜べでした。うみうまがささやきました。

「冒険遊び」にするか、「救助ごっこ」にするかまよいましたが、やっと「救助ごっこ」にすることにしました。そのほうが現実に近いからです。ムーミントロールは目をとじて頭をからっぽにしてから、あらしがくるんだと想像しました。

この島によくにた、どこかの岩だらけの海岸で、暴風があれくるっているのです。人々が手をにぎりしめながら、海岸をあっちへいったりこっちへきたり、かけずりまわっていました――だれか、沖でそうなんしたのでした……でも、だれも救いに沖に出る勇気はありませんでした。それはまったく不可能だったのです。どんなボートだって、あっというまに、こなごなにくだかれてしまったでしょうからね。

いまムーミントロールが助けようとしているのは、こんどはムーミンママではなくて、うみうまだったのです。

銀のかなぐつをつけた小さなうみうまが、うみへびとたたかっていることにしようか。いやいや、あらしだけでじゅうぶんです。

空は黄ばんだあらしの空でした。そこへムーミントロールその人が、海岸へやってきたのです。かたい決意をもってボートにかけよると……人々がさけびだしました。

「やめさせろ！　やめさせろ！　うまくいくわけはないんだ、あの子は海にのまれてしまうぞ！」

ムーミントロールは人々をおしのけてボートを出し、くるったようにこぎにこぎました。まわ

モランは、灯台の下に冷たくすわっていました。その冷たさといったら、下の地面が氷にかわるほどひどいものでした。……またもやはじまったのです。はいあがってくる冷たさを、ムーミントロールはふりおとすことができませんでした。

どうやってみても、あたたまることがなくて、だれにもすかれず、どこへいってもあらゆるものをだめにしてしまうもののことを想像してみるだけならやさしいことです。しかし、どうしても不公平なのは、どうしてムーミントロールだけが、いつもモランにつけまわされるのでしょうか。この少年だって、モランをあたためてやることなんか、できはしないのに！

「なにかしんぱいごとでもあるの。」

ムーミンママがききました。

「いや。」

と、ムーミントロールがこたえました。

「さあ、あしたもまた長い、いい日でしょうよ。しかも、はじめからおわりまでおまえのものなのよ。とてもたのしいことじゃない！」

と、ムーミンママはいいました。

しばらくするとムーミントロールは、ママが寝入ったのを知りました。ムーミントロールはよけいな考えはのこらずすてて、いつもとおなじ夜の遊びをはじめました。ちょっとのあいだ、

あがりました。とうとう、おこってしまったのです。モランが、島のどまんなかまであがってきてしまったのです！

ムーミンママもムーミンパパも、目をさましません。へやの中はしいんとしていました。けれどもあけっぱなしのまどからは、島がぶつぶつねごとをいいながらねがえりをうつようすが、なにか不吉に感じられました。ポプラの葉は、こわがってざわめきました。かもめが鳴きだすのもきこえました。

「おまえ、ねむれないの。」

と、ムーミンママがききました。

ムーミントロールは、まどをしめました。

「目がさめちゃったんだよ。」

ムーミントロールはそういって、床の中にもぐりこみましたが、鼻づらは寒さでかたくなっていました。

「寒くなってきたわね。丸太をぜんぶひいておいてよかったわ。おまえ、寒いの？」

と、ムーミンママがいいました。

「ううん、だいじょうぶ。」

ムーミントロールはいいました。

もしんぱいだったんだ……ぼくはきみをどんな危険からも、まもってあげたいんだ。ぼくにはぼくだけの巣があるんだよ。そこにきみの絵をかけているんだ。その絵のほかは、ぜったいにかけないんだぜ……。」

うみうまは、耳をかたむけてきいていました。

「きみはぼくがいままでに見たなかで、いちばん美しい生きものだよ。」

ムーミントロールはつづけましたが、ちょうどそのとき、モランがほえはじめました。

モランは、霧の中にすわって、明かりをもとめてほえていたのでした。

小さいうみうまはからだをななめにふったかと思うと、もういなくなりました。あとにのこったわらい声は真珠のようにひびき、海にもどっていったうみうまに、真珠の首かざりがついていくみたいでした。

モランが霧の中から、まっすぐにムーミントロールめがけて、足をひきずってやってきました。

ムーミントロールは向きをかえると走りましたが、今夜のモランは海岸でとまらないで、島の上までムーミントロールのあとを追いかけてきました――ヒースを通りぬけて灯台の岩の前まで。かのじょが大きな灰色のかげのように動きまわり、それから岩の下にしゃがみこんで待っているのが、ムーミントロールには見えました。

かれはとびらをバタンとしめると、心臓が胃の中にとびこむほどの早さで、まわり階段をかけ

つかここへたずねてくるかもしれない……きみもぼくの友だちをすきになれると思うよ。」
小さなうみうまがだまっていたのは、そんなことには関心がなかったからでした。ムーミントロールは、もう一度いってみました。
「夜の島はきれいだね。これはパパの島なんだ。だけど一生ここでくらすかどうかはわからないね。ときどき島が、ぼくたちをすきじゃないんじゃないかと思うことがあるんだ——でも、いちばんだいじなのは、島がパパを認めはじめたということで……。」
うみうまはきいてはいませんでした。ムーミントロールの家族のことなんか、知りたいと思ってもいなかったのです。
そこでムーミントロールは、うみうまのために持ってきたプレゼントを砂の上にひろげました。
うみうまは近づいてきて、においをかぎましたが、それでもなにもいいませんでした。
やっとムーミントロールは、うまい話のきっかけをみつけました。
「きみのダンスはすばらしいね。」
うみうまが、返事をしました。
「そう思うの。あたしのことを待っていたの。あたしがくると思った？」
ムーミントロールはさけびました。
「きみを待っていたかって？ 待ちに待っていたんだ。それに、風がふきあれているんで、とて

寝をするんだから。」

と、ちびのミイはいいました。

ムーミントロールはしげみから出ると、手のひらを開いてかなぐつを見ました。うみうまについては、まだなにも話してはいませんでした。うみうまは、まだ自分だけのものでした。

月は出ていなかったし、カンテラもともさなかったけれども、それでもムーミントロールは砂浜におりていきました。どういうわけか、いかずにはいられなかったのでした。かなぐつとプレゼントは持っていきました。

ムーミントロールの目が暗さになれてくると、おとぎ話の中の空想の動物のようなうみうまが一頭、霧の中から出てくるのが見えました。ムーミントロールはかなぐつを砂の上におくと、息をする勇気もないくらいでした。

かげのようなすがたは、小きざみにおどるようなステップで、首をまげて近づいてきました。うみうまは、貴婦人がよくやるようなさりげないようすで、かなぐつに足をつっこみ、それからムーミントロールに顔をそむけたまま、銀のかなぐつがぴったり足にあうのを待ちました。

ムーミントロールはおだやかにいいました。

「ぼくは、きみのたてがみがすきだ。ぼくの友だちにも、そういう髪をしているのがいるよ。い

と、ちびのミイはこたえました。

「小さな白いがいこつよ。ちょうどここについた日に、灯台の下でみつけたのとおなじよ。あんた、ほら、おぼえてるでしょ。『わすれられた骨のふくしゅう』よ。」

「じゃあ、灯台もりのやったことにちがいないな。」

ムーミントロールが、しばらくだまっていたあとでいいました。

ちびのミイがこっくりすると、結んだ髪の毛がゆれました。

ムーミントロールは、ゆっくりつづけました。

「灯台の明かりに飛びこんだ鳥なんだ。鳥はよくやるんだ……それで死んでしまうんだ。」

灯台もりは毎朝死がいを拾いあげたのかもしれない。それでもうあきあきして、あるはれた日、明かりをけしていってしまったんだ。

「しかし、まったくおそろしいことだなあ。」

こう、ムーミントロールはさけびました。

「もう、ずいぶんむかしのことよ。明かりは、どっちみち、きえているわ。」

と、ちびのミイはあくびをしながらいいました。

ムーミントロールは、ちびのミイをにらんで、鼻にしわをよせました。

「あんた、そんなになんにでも心をいためることはないわ。さあ、あっちへいって。あたい、昼

さけようとしました。小えだには、ちびのミイのレーンコートがかかっていました。それから、ほしあんずとほしぶどうのはいったちゃわん、ジュースのびん、それから……。

　だしぬけにムーミントロールはとびあがって、前にかがみこみました。奥の方の木のえだの下は、なめらかなまつ葉で地面がたいらになっていましたが、霧の中で、目のとどくかぎり、何列も何列も小さな小さな十字架が見えたのです。十字架は、おれた棒を帆糸でしばったものでした。思わずムーミントロールはさけびました。

「おまえ、いったいどうしたんだ！」

　ちびのミイは、たのしそうにいいました。

「あたいが敵をここにうめたとでも思ってるの？　これはね、鳥のお墓よ。だれかがたくさんの鳥をここにうめたのよ。」

「どうして、おまえはそれを知っているんだ。」

　ムーミントロールがききました。

「見たんですもの。」



子ちゃんの住んでいるところにちがいないぞ、とムーミントロールは考えました。奥の方で、ざわざわいう音がしました。ちびのミイがそこにいたのです。

ムーミントロールは、一歩前にすすみました。だれかにうちあけたいという危険な欲望が、かたまりのようにかれののどをつまらせていました。かれはかがんで、えだの下をくぐりぬけていきました。ちびのミイは、そこにまりみたいにちぢこまってすわっていました。

「いたんだね。」

ムーミントロールはちょっとへまないいかたをして、こけの上にすわると、ちびのミイの方を見やりました。

「なにを持っているのよ。」

と、ちびのミイがききました。

「なんでもないさ。」

と、ムーミントロールがこたえたので、話の糸口はだめになってしまいました。

「ちょっと通りかかっただけだよ。」

「ちぇっ。」

ちびのミイはいいました。

ムーミントロールは、あっちをむいたり、こっちをむいたりして、ちびのミイのするどい目を



ムーミントロールはママの飲み水ポットの上に鼻をのせて、草の上にねころんでいました。かれはかなぐつをすきとおった茶色の水につけて、銀色が金色に見えるのをながめていたのです。ポットの水の表面には木のえだや草の葉がうつって、とても小さなさかさまのけしきがありました。小えだは霧の中に美しくくっきりとうかびでていて、小えだをのぼりおりするどんな小さな虫でもはっきりと見えました。

　ムーミントロールは、どうしようもないほどうみうまのことをだれかと話したくてたまりませんでした。うみうまがどんなようすをしていたか、話すだけでいいのです。あるいは、自分の見たうみうまのことではなく、ただのうみうまのことを話すだけでもよかったのです。

　虫が二ひき、草の上にきました。ムーミントロールがポットをゆすると、小さいけしきはきえてしまいました。そこで立ちあがって、ぶらぶらとしげみの方に歩いていきました。しげみのふちに、こけをふみかためた小道がありました。これはミイ

「波の動きというものは、いつでもわれわれをおどろかす……。」

とかかいては、そこでノートを手からはなして、深い考えにしずんでいくのでした。

霧が島の上にしのびよってきました。だれも気がつかないうちに、霧が海の方からはいよってくると、きゅうにすべてがうす灰色のもやにつつまれ、灯台もりの岩だなは、ふわふわした空間にひとりぼっちでさびしくういているみたいになりました。

ムーミンパパは、霧の中に自分がかくされるのを、うれしく思いました。ひとねむりすると——かもめが鳴いたので、びっくりして目がさめました。それからがけの上にはいあがって、島じゅうをぶらぶら歩きまわりながら、潮流や風や、雨とあらしのおこるわけや、だれにもはかることのできない海底のあななどについて、あれやこれやと考えこむのでした。

ムーミンママは、ムーミンパパが鼻づらをおなかまでおとして、考えにしずみこんで霧の中からちらっと出てきては、またきえていくのを見ていました。ママは思いました。

(きっと資料を集めてるんだわ。そういってたものね。あのノートには、きっともう資料がいっぱいよ。かきおわったらほっとするでしょうね。)

ママはキャラメルを五つかぞえてさらにのせると、ムーミンパパをはげますために、それを岩だなにおいてきました。



やっぱりこの島に灯台もりをおとずれる人があったのかもしれません。それがきっと、はげましにもなったことでしょう。あとはたいてい、ムーミンパパにはなんのことだかわからない数字ばかりでした。パパはノートをうらがえしにしてうしろからかきはじめました。

たいていの時間、ムーミンパパは池の図面——断面図や見取図をかいたり、ふくざつな計算をしたり、見取図の説明をかいたりで、すっかりそれに没頭してしまっていました。

ムーミンパパはもうあまり池を調べる話をしなくなり、だんだんに池をさらうのもやめてしまいました。そのかわりあのさびしい灯台もりの岩だなにすわって、考えごとをしているだけでした。ときには、池のことや海のことについて、ノートにかきこむこともありました。たとえばパパは、

「潮流というのはふしぎなものだ。まだ、だれもこの点にじゅうぶん注目したものはいない。」

とか、

自身も、またそのなぞの中にはいりこむことができるんだと。

そこでムーミンパパは、かたい決心で池の底さらいをつづけ、何度も何度もくりかえして、おもり綱をたらしたのでした。パパは池の中心付近を、「底なしのふち」と名づけました。「底なしのふち」とひとりでつぶやくだけで、そのことばのもつ魔法で、背ぼねがしびれる気がしました。たいていのばあい、おもり綱はいろいろのちがった深さでとまりました。でも、ときには、いくらやってみても底にあたらないで、どこまでもどこまでもおりていくことがありました。ボートの中はこんがらかったなわや糸でいっぱいでした。せんたくものの綱、つり糸、いかりの綱、そのほか考えられるかぎりのひもと名のつくものは、なんでもありました。どれも使いみちはちがっていたのですが、ひもというものは、もともと、こんなめにあうものなんです。

ムーミンパパはこの池が、たしかに地球の中心までつながっているあなで、死火山の噴火口だという理論をたてました。しまいにはムーミンパパは、物置でみつけた古ぼけたノートに、この理論をかきはじめました。

このノートの何ページかは、灯台もりがかいたもので、大きく間をあけて、小さな文字でぎっしりとかいてありました。まるで紙の上をくもがはいずっているみたいに。

「波はさびしく、月は七番めの家に宿る。」――ムーミンパパは読みあげてみました。

「土星が火星に会う。」

「それじゃ、この貝がらを庭にならべてこようかしら。」
ムーミンパパは、なにもこたえませんでしたが、それは深い思いにしずみこんでいたからでした。

それとおなじころ、ムーミントロールは、ムーミンママのストーブで、貝がらをはがしたあとの箱を燃やしていました。貝がらをとってしまったのだから、もう箱はとっておくことはなかったのです。ムーミントロールは、この箱をたんすのいちばん下のひきだしでみつけたのでした。このひきだしは、灯台もりのいちばんとっときのものがはいっているとして、ママも手をつけなかったのです。

ドラムかんはさびてこわれていました。おそらくテレビン油か灯油がはいっていただけの、おもしろくもないものだったのでしょう。それにしても、証拠品ではありました。黒池は海がものをかくす場所、秘密にしておきたいものをかくす場所だったのです。
ムーミンパパは、そういう秘密のものが池の底で自分を待っているものと、やけに思いこんでいました。池の底には、そりゃなにかしらあったかもしれません。ムーミンパパは、ぜんぶを引きあげさえすれば、海のことがわかり、なぞがとけるんだと思いこんでいたのです。そしてパパ

があるというけど、ここにはそんなものは、ほとんどないんだがなあ！　こりゃおもしろいぞ！　それにこの貝がらにかいてあることときたら！　――ふうん、かぎりない可能性が開かれるわい。」

　ムーミンパパはまじめな顔をして、ムーミンママを見つめました。

「こういうことにこそ、しんけんにとりくんで、できたら本をかきたいね。海と関係のあることはのこらず――ほんとうの大海のことだがね――わしは研究しなければならないんだ。桟橋や小道、魚つりなんていうものは、つまらん人間のすることで、ほんとうに偉大なことにかかわる人間のすることじゃないのだ。」

　ムーミンパパはもう一度、厳粛な口調で、

「ほんとうに大きなことにかかわる人間。」

とくりかえしましたが、それはとても印象的でした。

「この黒池のおかげで、わしもそういうことを考えるようになったよ。」

「そこ、深いの？」

　ムーミンママは、大きな目をしてききました。ムーミンパパはこたえました。

「すごく深いさ。おもり綱が、やっとこさ底につくかつかないくらいなんだ。きょうは、このドラムかんを引きあげたんだけど、わしの考えが正しかったことを証明できるね。」

　ムーミンママはうなずきましたが、しばらくしていいました。



とかいてあったことでした。

ムーミンママはますますおどろいて、貝がらをみんなエプロンにいれると、いっしょうけんめいに黒池をさらっている、ムーミンパパに見せにいきました。

ムーミンパパは、ボートのわきから鼻先をのりだしていて、岩の上から見ると、とても小さく見えました。ボートはオールを水につけたまま、ただよっていました。

「ちょっと、きてごらんなさいな。」

と、ムーミンママはよびました。

ムーミンパパは、池の岸までこいできました。

「ほら！　ほんとうの貝がらよ。」

ムーミンママはいいました。

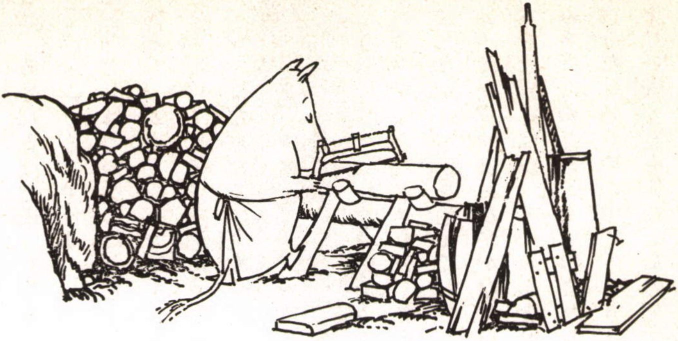
「砂浜のずっと上の方でみつけたの。きのうは一つもなかったのに。」

「それはおかしいな。」

ムーミンパパは、パイプの灰を岩にぶっつけてたたきおとしながらいいました。

「海のなぞの一つだね。こんなふしぎな海のやりかたには、わしもまったくひきつけられるよ。砂浜のずっと上にあって、しかもきのうはぜんぜんなかったというんだね。そんなら、数時間だけ海が一メートルもふくれあがって、またひいたのかもしれんぞ。南の方の人は、潮の満ちひき

にのこぎりびきをつづけたのでした。
ほかの家族たちは、ムーミンママののこぎりびきにはなれっこになりました。たきぎのかべが高くなればなるほど、かべにかくれて、ムーミンママを見ることもだんだんすくなくなりました。
はじめのうちは、ムーミンパパはおどろいて、自分でたきぎ集めをひきうけようとしました。
ところが、ムーミンママはおこっていいました。
「これはわたしの仕事よ。わたしだって遊びたいわ。」
そんなわけで、しまいにはたきぎの山のうしろから、ムーミンママの耳が見えるだけになりました。ママは毎朝島を歩いてあたらしい木を集めては、たきぎをひきにいきました。
ある灰色をした、とてもおだやかな朝のことです。ムーミンママは浜で貝がらをみつけました。大きなまき貝で、中はピンク色で、外側はうす茶にこい斑点がついていました。
ムーミンママはおどろくやらよろこぶやらでした。貝は浜のずっと高い方にあったのですが、この一週間は潮がそんな高いところまできたことはなかったはずです。すこしはなれたところでは、花だんのまわりにならべるような白い貝をみつけました。しょうじきにいって、そこの砂浜は大きいのや小さいのや貝がらだらけでした。しかもいちばんふしぎなのは、貝がらの一つに小さい赤い字で、
「西海岸の思い出。」



かわいた棒きれは、ストーブの下にひろげました。でも、大きな丸太にはとりくむ勇気はありませんでした。おのをふりまわすのは、ママはむかしからあまりとくいではなかったのです。

ムーミンママのたきぎの山のすぐそばに、とねりこが一本はえていましたが、ママはこの木がすきでした。こんな小さな木なのに、赤い実がいっぱいについていました。ママはいちばんいいたきぎは、この木の下に集めました。

ムーミンママは、木についてよく知っていました。どれがかしか、のうぜんかずらの木か、また、バルサの木、オレゴンまつ、マホガニーも知っていました。木によって、かおりも手ざわりもそれぞれちがってはいましたが、ムーミンママの手にはいるまでには、それぞれみんな長い長い旅をしてきたのでした。

「のうぜんかずらとブラジルのしたんよ。」

こうムーミンママはひとりでつぶやいて、また満足そう

日は、あきれるほど長いものとなりました。
それにムーミンママは、パズルをやる気もありませんでした。それは、パズルで時間をつぶすほどひとりぼっちなんだと思うのが、いやだったからでした。
ある日、ムーミンママはたきぎを集めはじめました。どんな小さな棒きれでもみつけしだいひろっていったので、潮にうちあげられた流木がきれいにかたづいて、海岸はきれいになりました。ママはだんだんに丸太やえだきれも集めて、山とつみました。このたきぎ集めのよい点は、同時に島がきれいになることでした。このことがムーミンママに、島全体を庭のようにきれいにそうじし、美しくすることができるんだ、という自信をおこさせました。
ムーミンママは、たきぎをみんなひとりで、灯台岩の風下の自分のみつけた場所に運びました。そこにママは、たきぎをひくためにのこひき台もつくりました。のこひき台はちょっとまがっていましたが、右側を前足でおさえれば、ちゃんと役にたちました。
ムーミンママはおだやかなくもり日の下で、のこぎりをひいてひいてひきとおしました。一本一本を正確にはかって、みんなおなじ長さにそろえ、自分のまわりに半円になるようにきちんとつみあげたのです。ママのまわりのまきのかべは、だんだん高くなっていって、ついには、ママが自分だけのへやの中でのこぎりをひくようなかっこうになりました。それがママに、なんともいえない安心感をあたえたのです。

でちがってきました。ひとりぼっちでいることがすきになって、空想の中で遊ぶほうがよっぽどおもしろくなり、自分とうみうまとのあいだのことばかり考えていたのです。それからまた、月の光のことも考えました。月の光は、モランのかげをバックにすると、なおさら美しく見えましたっけ。

モランが、そのあいだもずっとどこかにすわりこんでいたのは事実です。夜になると、ほえもしました。でも、ムーミントロールにとっては、そんなことはどうでもよくなっていました。ムーミントロールは、うみうまのためにいろんなプレゼントを集めておきました。美しい石ころや、海が宝石のようにみがいたガラスのかけらや、灯台もりのひきだしから持ちだした、小さな光る銅のおもりなどでした。ムーミントロールは、うみうまがプレゼントをもらったときに、なんというかしらといろいろ想像をめぐらしては、自分もなにか気のきいた詩的な話をしようと、考えをねっていました。こうやってムーミントロールは、月夜になるのを待っていたのです。

ムーミンママは、もうずっと前に、家から持ってきたものはぜんぶ、きちっと整理してしまいました。また、こういう小島ではほこりもたちませんから、あまりそうじする必要もありませんでした。いずれにせよ、そうじなどはあまりおおげさにするものではありませんね。食事のしたくもめんどうくさいものをつくらなければ、かなりてっとりばやくやれるものです。すると一

「おもしろいぞ。やけにおもしろいぞ。」
ママは、いそいであたりを見まわしました。もちろん、ママがやけなんてわるいことばをつかったのをきいたものは、だれもいませんでした。

ムーミントロールはあき地にねころんで、しらかばの葉がゆれるのをながめていました。しらかばの葉は黄色くかわりかけて、いよいよきれいでした。

ムーミントロールは自分の家に、三つ入り口をつくりました。表玄関と勝手口と、にげだすときの非常口です。かれはしんぼうづよく、自分の家の緑色のかべに、あんだ小えだをつめていきました。このようにしてこのあき地を自分の手でかこって、自分だけのものにしたのです。

ムーミントロールは、もうありのことなんか考えませんでした。ありはもうかれのまるまっちいからだの下の土の一部となっていたのです。灯油のにおいはもう風とともにきえましたし、かれた花のかわりには、あたらしい花がさくことでしょう。しげみのまわりにはいく千もの幸福なあかありが、さとうをたのしんでいるものと、かれは想像していました。すべてがうまくいっていると思っていたのです。

いや、ムーミントロールが考えていたのは、うみうまのことでした。この少年には、ある変化がおこったようなのです。かれはまったくべつの「トロール」になったようで、考えまでがまる

「もちろん、いますぐさ。わしは池の底を徹底的にさらってみるんだ。だけど、まず池の深さをはからなければならん。池にボートを運びあげなくちゃ。斜面へものをほうりあげようとしたら、また落ちてしまうかもしれん。それに、池のまん中に近づくことがだいじなんだ。いちばんいいものが、まん中にあるのはたしかだからね。」

「てつだいましょうか。」

と、ムーミンママがききました。

「だめ、だめ。これこそわしがしなければならない仕事だからな。おもり綱をみつけなくちゃ……。」

こういってムーミンパパは、はしごをのぼっていって、あげ戸をくぐってランプ室にあがると、ランプには目もくれず、さらにその上のてんじょうの低い暗い物置へあがっていきました。しばらくしてからパパは、ロープを持っておりてきてききました。

「おもりになるようなものが、なにかないかね。」

ムーミンママはストーブのところにかけよって、アイロンをムーミンパパにわたしました。

ムーミンパパは、「ありがとう。」といって、戸口を出ていきました。ムーミンママが見ていると、パパは階段を一度に二段ずつおりていきました。それからはまた、あたりはひっそりとなりました。

ムーミンママは、テーブルのところにすわってわらいました。

「いい考えがうかんだぞ。」
と。
「なんですって。それはたいした考えですの？」
と、ストーブのところに立っていたママがいいました。
「もちろんさ。すばらしい思いつきだ。さあ、ここにきてすわりなさい。いま、みんな話してやるから。」
と、ムーミンパパはいいました。
ムーミンママがへやの箱の一つにこしかけると、ムーミンパパはその思いつきを話しはじめました。話しおわるとムーミンママはいいました。
「まあ、すごい。そういうことを思いつくのはあなただけね。あそこには、ほんとうになにがあるかわかりませんね。」
「そうなんだ。ほんとうになにがあるかわからんぞ。」
と、ムーミンパパはいいました。
ふたりは、顔を見あわせてわらいました。
「いつから探検をはじめるの。」
と、ムーミンママがききました。

しきいをこえて池にはいってきて、鏡のような水の中にきえていきました。

（ここは、何百年ものあいだ、あらしが、島をとりまく波を流しこんできた場所なんだ。コルクの浮きや、木の皮のかけらや、小さな棒なんかが波に運びこまれたり、運びだされたりしてきたんだ。そういうことが何度も何度もくりかえされて、ついにある日……。）

ムーミンパパがこんなふうに考えて、鼻をあげたとたんに、とっぴょうしもない考えがうかびました。

（そうだ。ある日とつぜんに、なにか大きな重いものが難破船から流されてきて、ここに流れこんでしずんだんだ。そしてこの池の底に、いつまでもいつまでもしずんだままになっているんだ。）

ムーミンパパは、思わず立ちあがりました。それは、宝物のはいった長持かもしれないし、密輸品のウイスキーの箱か、海賊のがいこつかもしれません。この池の底に、なにがあるかは、わかったものではないのです。ふしぎなものでいっぱいかもしれません。

ムーミンパパはひどくうれしくなり、きゅうに元気があふれてきました――はがねのばねが、パパの胃の中ではねたときのように、または、からだの中でねむっていたものが、きゅうにめざめてパパのはだをはいまわるように、パパを動かしだしたのです。

パパは家に走って帰って、階段を一度に二段ずつとびあがって戸をおしあけるとすぐどなりました。

（なにかちがうこと、なにかあたらしいことをしなくちゃな。なにかすばらしいことをやるんだ。）

だけど、いったい自分がなにをしたいのか、それがちっともわからないのです。パパはこまってしまいました。頭がこんがらかるばかりです。ずっと以前、ガフサのむすめに足の下のじゅうたんをひきはがされたときと、おなじ気持ちでした。でなければ、いすの上ではなくって、いすの横の空中にういているような気持ちといったらいいでしょうか。いや、それともちがう、自分がなにかにだまされているような気持ちでしたっけ。

ムーミンパパはすわって、絹のような灰色の海をながめているうちに、なんだか海はあらしをおこすのをことわっているように思われてきて、自分がなにかにだまされているのだという気持ちが、だんだんつよくなりました。

「いまにみていろ。わしがとことんまでつきとめてみせるから。」

パパはこんなことを、ひとりでつぶやきました。

といっても、自分がいっているのは、海のことか、島のことか、それとも黒池のことだか、それは自分でもわかりませんでした。灯台か、灯台もりのことだったのかもしれません。いずれにしても、ムーミンパパの声には、すごくぶきみなひびきがありましたっけ。

それからムーミンパパは、こんがらかった頭をぶるっとふって歩きだすと、黒池のそばへいってすわりこみ、鼻を前足の中にうずめて、考えごとをつづけました。ときどきくだけた波が岩の

が、それはあらしがくるかこないかと、考えていたからです。ほんもののあらしのことですよ。もしくるとしたなら、かけずりまわって家財道具を安全なところに運ぶとか、家族が流されないような手配をしなければなりませんからね。それからまた、灯台の上までのぼって、風力をはからなければならないでしょう。……それからまたおりてきて、

「風力は13。みんなおちついていなけりゃいかんぞ。なにも不安はないんだから……。」

とかなんとか、いわなければならないでしょう。

ちびのミイは、水たまりでとげうおをつかまえていましたが、こういってききました。

「どうしてつりをしないの。」

「もうつりはやめたよ。」

と、ムーミンパパはこたえました。

「それじゃ、ほっとしたでしょ。あまり長くつづけると、うんざりしちゃうものね。」

と、ちびのミイはいいました。

ムーミンパパはおどろいていいました。

「まったくだ！　すっかりいやになっちゃったのさ。どうしてそのことに、自分では気がつかなかったんだろうな。」

ムーミンパパは灯台もりのあのさびしい岩だなにやってきて、そこにこしかけて考えました。

だれだってわかりました。家族に食べさせたいばかりに、つぎからつぎへとすずきをつりあげていたときに、大かますがかかったとなれば、これはたいへんなできごとのはずです。そこへムーミンママが、魚はもうたくさんなんていったから、いけなかったのです。

そのとき、ムーミンママはいつものようにまどぎわにすわって、まどわくに花の絵をかいていたのです。どこもかしこも花でうずまっていました。ふと、ムーミンママは、とくにだれにむかっていうのでもなく、パパがあんまりお魚をつってきたので、どうしまつしたらいいかわからなくなった、というようなことを口ばしったのです。それとも、魚を塩づけにするかめがもうないわ、といったのだったか、たまにはオートミールを食べるのもかわりばえがしていいわ、といったのでしょうか。いずれにしても、なにかそんなことをいったのです。

ムーミンパパはだまってつりざおをかべにかけると、散歩に出ていきました。浜べを歩いていきましたが、漁師のみさきには近づきませんでした。

くもりがちの、とてもしずかな日でした。東風のふきやんだあとの海は、しずかにうねっているだけで、水のおもてはほとんど見えません。色は空とおなじ灰色で、絹みたいに見えました。かもめが数羽、水とすれすれに飛んでいましたが、いかにも自分の仕事にむちゅうといったふうにはりきっていました。ムーミンパパは片足を岩に、片足を水につけて、しっぽを海の中にひきずりながら歩いていきました。灯台もりの帽子を、鼻までかぶさるほど深くずりさげていました

第5章



霧

しょうじきな話、ムーミンママはなにもひどいことをいったわけではありません。また、もちろんムーミンパパをきずつけるつもりは、ちっともなかったのです。それなのにムーミンパパは、きげんをわるくしてしまいました。ママがなにをいったのだったか、パパもおぼえてはいませんでした。それはなにか、一家には魚はもういらない、というようなことだったのです。

ムーミンママが、大かますのことをもうあまり感心しなくなったことが、はじまりでした。はかりはなかったけれど、あの大かますが三キロか、すくなくとも二キロはある大きなものだったということは、

いうだろうな。それがぼくには、いちばんたまらないんだ。)

しげみのはずれで、ちびのミイは低くたれたえだの下にころがって、耳をそばだてていました。かのじょはこけできっちりと身をつつみ、くちぶえでもふくみたいな調子で、もっともらしくつぶやきました。

「あの子は、こんどこそ、にっちもさっちもいかなくなったわ。モランとかかわりあったり、うみうまと友だちになろうとするから、ああいうめにあうのさ。」

それからちびのミイは、きゅうにありのことを思いだして、ひとりでげらげらとわらいだしたのです。



心みたいな冷たい雲につつまれてすべってきて、浜をはいのぼってきたのです。
きゅうになんともいえないいかりがこみあげてきて、ムーミントロールはどなりつけました。
「しいっ。あっちへいけ！　じゃまじゃないか。おまえなんかにかまっているひまはないんだぞ。」
モランは浜のもっと上までのぼってきました。
ムーミントロールは、はんのきまであとずさりして、さけびました。
「おまえのすきなカンテラなんか、持っちゃいないよ。おまえのために明かりをつけてやることは、もうぜったいないんだ。もうここにきちゃだめ。これはパパの島なんだから。」
ムーミントロールはあとずさりしながら、モランからはなれると、くるりとうしろをむいて走りだしました。まわりのポプラの木たちは、ぶるぶるふるえて、あらしの前のようにざわざわ音をたてました。ポプラには、モランが島にやってきたことがわかったのです。
ムーミントロールがベッドにもどってからも、モランの泣き声はきこえていました——しかも、前よりもずっと近くからです。
（——ここにはいってこないといいけどな。）
と、ムーミントロールは思いました。
（どうか、モランがいることに、みんなが気がつきませんように。あいつめ、霧のときのサイレンみたいに泣きつづけやがる……きっとだれかが、おまえはばかなことをしたじゃないかって、

「銀みがきでみがいたから、ほら、こんなにきれいになったでしょ。」
といっただけでした。それもいつもとかわりない声で。

　ムーミントロールは、ママにはなにかかわりのものをあげるよ、とかなんとか、そんなふうのことをもごもごというと、しっぽを足のあいだにたらして出ていきました。かれには、うみうまのことを説明することはできなかったのです。ただもう、できなかったのです。

　かれは、うまく貝がらでもみつかればいいがと思いました。ママはかなぐつよりも、貝がらのほうをよろこぶにちがいありません。うみうまにとっては、海の底からいちばん大きくて、いちばんきれいな貝をいくつか持ってくるくらいのことは、とてもかんたんなはずです。もっとも、それはうみうまが、よそのママのことまでかまう気があるならばの話でした。そんなことは、もともとたのまないほうがいいでしょうかね。

　うみうまはやってきませんでした。

　月はおちてしまいましたが、それでもうみうまはやってきませんでした。うまたちは「いつかべつの晩」とはいったけれど、「あすの夜」といったわけではありませんでした。「いつかの晩」では、いつの晩のことだか、わかりませんよね。

　ムーミントロールはそこにすわりこんで、砂を前足でかきまわしていましたが、そのうちに、とてもねむくなりました。もちろん、モランはやってきました。水の上を、だれかさんのわるい

一頭がふりかえって、遠くからさけびました。
「いつかまた、べつの晩にね……。」
ムーミントロールは、砂の上にすわりました。うみうまが話しかけてくれたのです。しかも、もどってくるってやくそくしてくれたのです。雲さえ出なければ、これからいく晩かは月夜のはずでした。ですからムーミントロールは、カンテラはつけないことにしました。
とつぜんムーミントロールは、自分のしっぽが冷たいのに気づきました。よく見ると、まわりの砂がすっかりこおっていました。ちょうどモランがすわっていた場所に、かれはすわってしまったのでした。

つぎの晩、ムーミントロールは、カンテラを持たずに浜におりていきました。月はかけはじめていました。まもなくうみうまは、どこかほかの場所に遊びにいってしまうのです。ムーミントロールには、本能的にそれがわかっていたのです。
かれは、銀のかなぐつを持ってきていました。それをママからかえしてもらうのは、容易なことではありませんでした。ムーミントロールは顔をあかくして、しどろもどろだったのです。でも、ムーミンママは、どうしてかなぐつがまたいるのかもきかずに、かべのくぎからはずしてくれました。ママは、

ムーミントロールはいって、大いそぎでカンテラをけしました。
「ぼく、きみのかなぐつをみつけたんだけど……。」
うみうまは立ちどまって、頭をかしげました。
「でも、ママにあげちゃったんだ。」
と、ムーミントロールはつづけました。
月がかくれると、うまのひづめの音がもどってきて、ムーミントロールはうみうまのわらい声をきくことができました。
「あれ、きいた？　あれ、きいた？」
と、二頭はたがいにさけびあっていました。
「ママにあげちゃったんだって！　ママに、ママに。」
うみうまはムーミントロールにむかって走ってきて、もうすこしでさわるほど近くにきました。
たてがみが、やわらかい絹の草のように、ムーミントロールの顔にふりかかりました。
「かえしてもらってもいいんだよ。すぐ、とりにいってこようか。」
暗やみの中で、ムーミントロールはさけびました。
月はまた出ました。ムーミントロールは、うみうまがならんで、たてがみを明るい色のスカートのようにうしろになびかせながら、海にはいっていくのを見ました。二頭はうり二つでした。

やってくることは危険なんです。

いつもとおなじように、ふたりはだまってむきあいました。モランはカンテラから目をはなして、ムーミントロールを見つめました。こんなことは、いままではなかったことです。その目はとても冷たく、なにかにおびえているみたいでした。月は雲のかげに見えたりかくれたりして、浜にはかげがはげしくゆききしていました。

そのとき、みさきの方からうみうまたちが走ってきたのです。うみうまはモランには目もくれないで、月明かりの中で、おたがいに追っかけっこをしては、水しぶきでにじをつくって、とびはねながらその中を通りぬけました。そのうちムーミントロールは気がつきました——二頭のうち一頭は、かなぐつを一つなくしたのか、三つしかつけていないではありませんか。

うみうまは花もようのあるコートをきていましたが、首や足のところでは、その花もようがすこし小さくなっていました。その花はたぶんひなぎくだったでしょう。もしかするとすいれんだったかもしれません。それだともっと詩的ですね。うみうまはカンテラのま上を走りぬけたので、カンテラは砂の上にひっくりかえりました。

「あなたは、わたしの月の光のじゃまをしてるのよ。わたしの月の光の！」

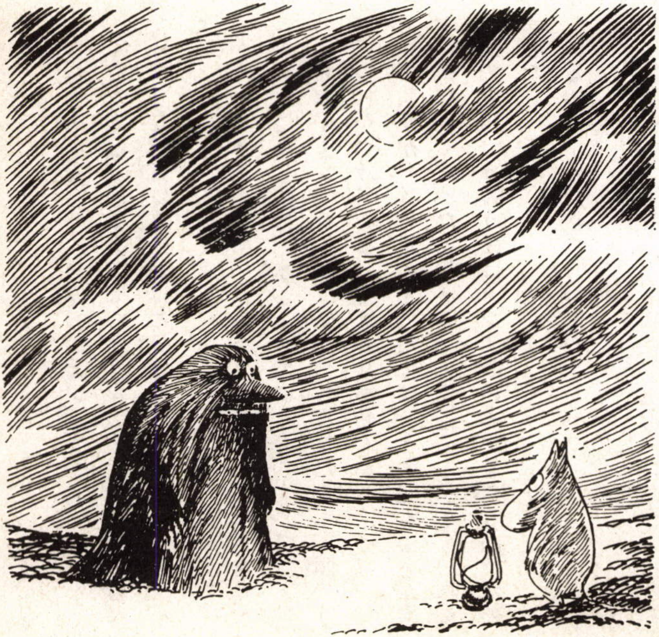
と、小さいほうのうみうまがさけびました。

「ごめんね。」

中にきえていきます。そうしてムーミントロールは、うちへ帰ってくるのでした。

しかし、モランは一晩ごとに、すこしずつ近くまでやってくるようになっていたのです。その夜は、砂の上にすわって待っていました。

ムーミントロールは、はんのきのところで立ちどまって、カンテラを地面におきました。モランが海岸にあがったのは、いままでの習慣をやぶったことです。これはいけないことでした。モランは島とは関係がないのです。島のいろんな植物や、ありとあらゆる生きものにとっては、あのおばさんが



また、ちびのミイがなにを見たり、考えたりしているかは、だれも知りませんでした。あの子は、たいてい漁師のあとを追いまわしていたのでしたが、おたがいに話をするということは、ほとんどありませんでした。おたがいにただ相手をそういう人間だとみとめて、好意をもちながら、しかもおたがいに無関係という関係だったのです。おたがいに相手を理解しようとか、相手に印象をきざみつけようとか、めんどうなことを考えなかったのですが、それも一つの生きかたですよね。

うみうまがもどってきた秋の夜の島のありさまは、まずこんなふうだったのです。

カンテラを持って浜におりるのは、もうなにも冒険ではありませんでした。ムーミントロールは、もうモランにはなれっこになっていました。モランはしょうじきいって、危険というよりも、ぶきみなものだったのです。

自分が浜におりていくのは、モランのためか、それともうみうまがもどってくるかもしれない希望のためか、ムーミントロールはわからなくなってしまいました。月がのぼると目がさめてしまい、ただなんとなく起きなければならなかっただけなんです。

モランはいつもそこにいました。浜からちょっとはなれた水の中に立って、目でカンテラの動きを追いかけるのです。ムーミントロールがカンテラをけすと、モランは音もたてずに暗やみの

ムーミンママは、春になったら植えてみようと思う花のことを、よく夢にみました。そこで、北側のまどわくに、そういう花をえがいてみました。そのまどから外の海をながめるたびに、ぜんぜんべつのことを考えながらも、手は無意識に花をかいているのでした。ときにはママは、自分で自分のかいた花にびっくりすることがありました。花が、まるでしぜんにそこにはえてきたみたいに見えたからです。そう思うと、いよいよその花たちはきれいに見えましたっけ。

まどのそばの席は、外につばめがいなくなってから、すこしさびしくなりました。つばめたちは、ある風のつよい雨の日に、南へ飛んでいってしまったのでした――だれも見ていないうちに。島は、いまではふしぎなほどしずかになりました。

なにしろママは、つばめがいつでものき下でピーピー鳴いたり、おしゃべりをしているのになれていましたからね。それなのに、いまではまどの外は、かもめがその黄色い目をすこしも動かさずに飛びすぎていくのと、ときたま南へ――遠い南をめざして飛んでいくつるの声がかすかにきこえるだけでした。

ムーミンママもムーミンパパも、いつも考えごとがあったので、ムーミントロールのやっていることに気がつかなかったのも、ふしぎではありませんでした。ふたりとも、しげみの中のあき地のことも知らなかったし、毎夜月がのぼると、むすこがカンテラを持って浜におりていくことにも、気がつかなかったのです。

ママは心の中で思うのでした――。

（パパは遊びごとではなくて、大まじめなのだわ。うちにあるだけのかめやたるは、もう魚の塩づけでいっぱいだけど、それでもまだパパは魚つりに出かけている。たしかに食べものがたくさんあるというのはいいことだけど、どういうわけか、あまり食べものがないときのほうがたのしかったわ。これはきっと、海がパパをとりこにして、こんなふうにしてしまったのだと思うわ。）

ところで、ムーミンママが毎日エメラルドのバンドをつけていたのは、このバンドがどんなに気にいっているか、パパに見せたかったからなんです――。ほんとうは上等なものだから、日曜だけしめるのがいいんだけれど――それにしても、ガラスのかけらはやたらとそこらにひっかかってやっかいでしたし、また気をつけて動かないと、こめつぶがぱらぱら落ちるのでした。

ムーミンママのあたらしい庭は、灯台岩の下にまるく、海草だけでできていました。海からは貝がらがすこしもとれなかったので、ママは、まわりをぐるりとまるい小石でかこみました。まん中には、もとの家から持ってきたばらが、うちから持ってきたままの土に植わっていました。花が一りんだけ、いましもさきかけていましたが、さこうかさくまいかと、まだまよっているふうでした。もう九月になっていましたから、それもむりはなかったでしょうね。

れもついていくことをゆるしません。漁師をからかうのは、もうやめましたが、それはあんなちっぽけな、どうしてもおこらない人間をからかっても、しようがないからでした。ムーミンパパの頭には、一つのかたい決心――つまり一家のために食料を確保することだけがあったのです。パパは、えものをとってくると、いつも灯台の階段の上におきました。

手ごろの大きさの魚がつれたときは、浜にもっていってくんせいにしました。パパは、風のふく中でいろりの前にすわると、つぎからつぎへとゆっくり小えだをくべて、火が平均して燃えるようにしました。それからまた、魚が正しいやりかたでくんせいにされるように、魚を砂とじゃりとでくるんだり、とねりこの小えだや、はんのきのこまかくわったのをあつめたりしました。それやこれやで、ほかのものたちが、ムーミンパパを見かけることは、あまりなかったのです。

夕がたには、パパは黒池でもつりをやってみました。でも、そこでは魚がかかったことは、一度もありませんでした。

夜、みんながあつまってお茶を飲むときも、ムーミンパパは魚とつりのことしか話しません。しかも、いつものようなほほえましいじまん話など、ちっともしなくなって、長い講義をつづけるだけなんです。といっても、ムーミンママはただあきれて、めいわくそうにきいているだけで、そのために魚や魚つりについて、とくになにかをおぼえたということはありませんでした。

と、ちびのミイはいいました。

ムーミンパパは、すずきを階段にどさりと投げだすと、ききました。

「ママはどこだ。」

「自分の庭をいじっているわ。」

と、ちびのミイはこたえました。

「お魚は、あたいが持ってってやるわよ。」

ムーミンパパはうなずくと、島の西のはずれの方へ歩いていきました。

「わしはあいつの鼻の先で魚をつってやろう。あそこの魚を一ぴきのこらずつってやるんだ。いまにみてろ。」

あなだらけの網を灯台の階段の下にほすと、みんなはほっとしてそれっきり、網のことはわすれてしまいました。ムーミンママも、小さなたなや家具のことは、もう口にしなくなりました。てんじょうのしみは雨がふるたびに、だんだん大きくなっていきました。あげ戸はしまったままになりました。

ムーミンパパは、つり以外には、まったく興味を失っていました。一日じゅうつり糸をもって出かけて、食事のときに家に帰ってくるだけなんです。朝だってはやばやと出かけていき、だ

の上ではねさせたりして、できるだけ漁師に見せびらかしてやりました。しかし漁師の灰色のすがたは、ぴくりともしないで、沖を見つめているだけでした。

「この大かますは八キロぐらいはあるぞ。」

と、ムーミンパパはすずきをうしろにかくしながら、大声でいいました。

「これをくんせいにするのは、たいへんだて。」

それでも漁師は、一センチも動きませんでした。

「ざまあみろ。」

と、ムーミンパパは小声でいいました。

「灯台もりのことを考えるとかわいそうになるな。せっせと自分の話をしゃべりつづけたのに、あのえびみたいなやろうは、耳もかさなかったんだ。ひでえやつだ。」

ムーミンパパはすずきをしっかり前足につかんで、灯台にむかってのぼっていきました。ちびのミイは階段にこしかけて、単調な雨の日の歌をうたっていました。

ムーミンパパはどなりました。

「おい、わしはおこっているんだぞ。」

「けっこうだわ。パパは、だれかてきとうなかたき役がみつかったみたいね。それで気が休まるでしょ。」

ムーミンパパはききました。
漁師はかたをすぼめて糸をたぐりましたが、はりにはなにもかかっていませんでした。
「わすれちゃったよ。」
と、男はいいました。
ムーミンパパは絶望しながらも、もう一度いってみました。
「だけど、あの人は一日じゅうなにをしてたんだね。なにかこしらえるとか、網でもかけていたのかね。」
漁師がスマートな身ごなしで、ゆっくりとつり糸を投げると、水の表面にはかんぜんな円がえがかれ、それがしずかにひろがってきえていきました。漁師はパパにはかまわずに、海の方に目をむけました。
ムーミンパパは立ちあがって歩きだしました。どういうわけだかしりませんが、いかりがこみあげてくるのが、いまのばあいはこころよく感じられました。ですから、パパはつり糸をかなり遠くへ投げましたが、紳士がよその人の近くでつりをするときにまもるべき礼儀である距離を、自分がまもっているかどうかは、気にしませんでした。
すぐさま手ごたえがあって、ムーミンパパは、五百グラムほどのすずきをつりあげました。パパはおおげさに、はあはあいったり、うんうんいったり、水をはねちらしたり、またすずきを岩



くい人にあったことはありません。どういってみても、ばつのわるいことになってしまうのです。
「冬は、ここはちょっとさびしいだろうね。」
パパはこういってみましたが、もちろん返事はかえってきませんでした。それでもパパは、もう一度いってみました。
「だけど、ここにはもちろんふたりでいたんだろ。灯台もりはどんな人だったのかね。」
漁師はなにかぶつぶつ口の中でいうと、おちつかないふうにもぞもぞとおしりを動かして、席をすこしばかりうつしました。
「あの人はおしゃべりだったかね。自分のことをよく話したかね。」
するとだしぬけに、漁師はこういいました。
「だれだって、そうさ、自分のことは話すさ。あいつも、いつでも自分のことばかり話していたよ。だけど、わしゃきいてなかったのかもしれない。わしゃ、おぼえていないよ。」
「あの人はどうして島をはなれたんだ。灯台は、あの人がいっちまう前にきえたのか、それともいなくなってからきえたのかね。」

父親にはそういうタイプがよくあるものですが、ムーミンパパも魚つりがすきでした。しかも、魚を持たないで家に帰るのはきらいなんです。つりざおは、二、三年前のたんじょう日にもらった、とても上等なものでした。ときにはつりざおは、あんまりパパがつりにいかないでいると、ぼくは魚をつるためにあるんだぞといわんばかりに、すこしばかり不平たらしく、かべにかかっていましたっけ。

　ムーミンパパが、立ったまま池の黒い水を見おろすと、池はまたその大きな目で見かえしました。パパは糸をたぐりよせると、パイプを帽子の中にしまいこんで、島の風下のほうへいきました。

　そっちへいけば、たとえ小さいやつでも大かますがいるかもしれません。でなければ、ほかの魚でもいいんです。なにか家に持ちかえることのできるものが、つれさえすれば。

　岸のすぐそばに、漁師がボートにのってつり糸をたれていました。

「ここは、よくつれるかね。」

と、ムーミンパパはきいてみました。

「いや。」

と、漁師はこたえました。

　パパは岩の上にすわって、話のいと口をさがそうとしました。いままで、こんなにとっつきに

「まだ、なにかのこっているかい。」
と、ムーミンパパはつづけました。

ムーミンママは、はっきりしない手つきをしました。どうやらそれは、オートミールのほかはあんまりのこっていないけれど、とにかくたいしたことではない、というふうに思われたのです。するとムーミンパパは、こういうばあいに考えられるたった一つのことをしました。――かべにかかっていたつりざおをおろしたのです。それから灯台もりの帽子をかぶると、さもとくいそうに、だまったまま、いちばんきれいな毛ばりをえらびはじめました。家族もえんりょしてだまっていました。てんじょうからはあいかわらず雨だれが落ちていました。それからパパはしずかにいいました。

「ちょっと魚つりにいってくるぜ。大かますにもってこいの天気なんだ。」

北東の風はもうふきやみましたが、波はまだたいへん高かったのです。霧雨がふり、岩も水もおなじ色のとてもさびしい、むなしい灰色の世界でした。

ムーミンパパは一時間ほど、黒池でつりをしました。しかし、魚はぜんぜんくいつきません。
（つかまえるまでは、大かますの話はするもんじゃないな。）
と、ムーミンパパは思いました。

ポツンでもなく、ポタンでもなく、「プツン。」にかわりました。かのじょはぽつんといいました。

「これで、おこめのプディングともさようならね。」

ムーミンママは、とがめるようにいいました。

「わたし、ちょっとこしまわりが太くなりすぎたから、これからはオートミールを食べればいいんだわ。」

オートミールときくと、みんなはだまりこくってしまいました。そのしいんとした中で、てんじょうからの雨もりの音が、三つの音色で一種のメロディーをかなでました。ムーミンパパには、このメロディーが、なんだか自分だけのために作曲されたもののようにきこえて気にいりませんでした。

「ねえパパ、わたしが宝石とおこめのプディングとどちらをえらぶかというと……。」

と、ムーミンママがいいかけましたが、ムーミンパパはそれをさえぎってききました。

「いったい、食料はもうどれくらい食べちまったんだ。」

ムーミンママは、不安そうにこたえました。

「そうとう食べてしまったのよ。海の空気がどんなはたらきをするか、知ってらっしゃるでしょ……。」

あつめて、金づちで根気よくたたいて、おなじほどの大きさのきれいなつぶにしました。

ムーミンパパが、午後になってあげ戸からおりてきたときには、バンドはできあがっていました。そうしてパパは、こういったのです。

「おれは自分でしめてみたんだ。それよりもそうとう短くしたから、おまえにちょうどいいかしれないよ。」

ムーミンママは、バンドを頭から通して、こしのちょうどよいところまでずりさげました。

「まあ、夢じゃないかしら。こんなきれいなもの、いままでもらったことがないわ。」

ムーミンママはこういって、あまりのうれしさに、きゅうにまじめな顔になりました。

「パパがどうしておこめがいるんだか、わからなかったなあ。おこめはぬれるとふくらむから……なにかまどのすきまをふさぐのに使うのかと思った……。」

と、ムーミントロールはさけびました。

「まあ、すてき。」

と、ちびのミイまでいやいやながらほめました。

「あたいだって、思いもかけなかったわ。」

そういってちびのミイは、洗面器をべつの場所にずらせました。すると、雨もりの水の音は、

うし、大きいほうのに落ちるときは、「ポタン、ポタン、ポタン。」といいました。
　上のランプ室では、ムーミンパパがこわれたまどをにらんで、うんざりしていました。こわれたまどのことを考えれば考えるほど、頭はぼうっとなってしまうのです。
「外側からくぎをうちつけるか、内側からきれをはったらどうですか。」
と、ムーミンママがちえをつけたんですが。
　ムーミンパパはだんだんつかれてきて、とうとう床の上にごろんとねころびました。緑色のまどガラスは、美しいエメラルド色になりました。ムーミンパパの気分もたちなおってきました。しばらくするととつぜん、パパ独特のいい考えがうかんできました。
（麻布をはば広くさいて、それによくのりをつけておいて、それから緑色のガラスをこまかいエメラルドのようにくだいて、布にはりつけてみたらどうだろう。）
　ムーミンパパは思わずすわりなおして、つぶやきました。
「これはいい思いつきだぞ。のりがかわかないうちに、エメラルドのあいだにはこまかい白い砂をまくんだ。いや、こめつぶのほうがいいかな。うん、何千という小さな白いこめつぶを、真珠みたいにはめこむことができるんじゃないかな。宝石と真珠のバンドだ。」
　ムーミンパパは立ちあがると、ガラスをそっとはずそうとして、金づちでコツコツやりはじめました。大きなかけらが床に落ちて、こなごなにくだけますと、小さいかけらを二本の前足で

と、ちびのミイはいいました。

これには、こたえることばがありませんでした。その晩、ちびのミイは、ムーミントロールがすがたをかくそうとして、ヒースの中をはっていくのを、ちらと見ました。ちびのミイは、もちろんあとをつけていって、ムーミントロールが、もみの森とのさかいめにさとうをまいてから、あき缶をもってしげみの中へきえていくのを見ました。

(ははあん。)

と、ちびのミイは思いました。

(あいつ、良心がとがめてるんだわ。いっとくけど、死んだありはおさとうを食べませんよ。それに、いずれにしても、地面がぬれているから、おさとうはとけちまうわ。あたいにやっつけられなかったありにとっては、このことはぜんぜん関係ないんだから、なぐさめてもらう必要はないしさ。とにかく、こんなことはあたいの知ったことじゃないよ。)

それからまる二日かけて、ムーミンママとムーミントロールは、せっせと網から海草をとりのぞいたのでした。

それに雨がまたふりだしました。てんじょうのぬれたしみは、日ましに大きくなっていきました。雨もりのしずくは、小さいほうのなべに落ちるときは、「ポツン、ポツン、ポツン。」とい

まって死んでいるのです。みるもおそろしい光景でした。大虐殺がおこなわれたのです。ありはただの一ぴきも生きのこってはいなかったのです。みんな、灯油づけになっていました。

ムーミントロールは立ちあがりましたが、そのとたんに、さっとわかったのです。

（なにもかも、ぼくがわるかったんだ。わかっていたのに。ちびのミイが、相手と話しあって説得するような子じゃないってことは、わかってたのになあ。あの子は、衝動的になにかやらかすか、ぜんぜんやらないか、どっちかなんだ。さあ、どうしよう。どうしたらいいんだろう。）

ムーミントロールは、永久に自分だけのものになったあき地にすわりこんで、からだじゅうをはいまわる灯油のにおいをかぎながら、からだを前後にゆすぶっていました。うちへ帰る道じゅう、においは鼻につきっぱなしでした。

（もう、このにおいはぬけることはないだろう。）

と、ムーミントロールは思いました。

「だって、ありって、かとおなじようなものでしょ。だからありをやっつけるのはいいことじゃないの。どっちにせよ、あんたはあたいがありになにをするか、ちゃんと知っていたはずよ。あんたはあたいがそれを口に出さないことを、ねがってただけだわ。あんたったら、ほんとに自分自身をだますのがじょうずね！」

（わしは、もうなにもなおしたくないな。海草とりだってしたくないし……。つくるんなら、なにか大きい、しっかりしたものがつくりたい、ほんとうにそういうものがつくってみたいな……だけど、どうしたらいいかわからん……父親らしくするのは、まったくむずかしいことだなあ。）

ふたりは灯台の方にむかって歩いていきましたが、ムーミントロールは、両親がしっぽをたらして坂をのぼっていくのを、見えなくなるまで見送っていました。

灯台の岩の上には、すきとおった七色のにじが見えました。でも、そのにじはとぎれていて、見ているあいだにだんだん色あせていくのがわかりました。にじがかんぜんにきえないうちに、しげみの中のあき地にいくことがかんじんだと、ムーミントロールは、直観的に思いました。それで、いそいでしげみまでとんでいって、四つんばいになってもぐりこんでいきました。

あき地は、やっとムーミントロールだけのものになりました。くもった日でも、そこはいつもとかわらずきれいでした。こんどは、えだとえだのあいだにくもが巣をはっていて、そのくもの巣に、水玉が銀色にひかっていました。外は風がふいていましたが、ここは、まったくしずかでした。おまけに、きょうはありもいませんでした。ただの一ぴきも。

きっと、雨をさけてかくれているのでしょう。ムーミントロールは二本の前足で、いそいで草の根をほりおこしてみました。するとまた、ぷうんと例の灯油のにおいがしました。

いました、いました、ありがわんわんいました。だけどみんな死がいでした。みんなちぢこ

と、ムーミンパパは気ぬけしていいました。

　そこで、石のことはそのままにして、みんなはボートのそばを通りすぎて、ポプラのしげみのところまでひきあげました。

　すると、ムーミンパパが立ちどまっていいました。

「ここでは道をつくろうとしても、むりだね。やってみたんだけど、ここの石は大きすぎてだめなんだ。道ができるくらいなら、灯台もりがとっくのむかしにつくっていたはずだ。桟橋だっておなじことさ。」

「この島では、あまりものごとをかえようとしてはいけないのかもしれませんわ。あるがままにしておくほかないわ。もとのうちだと、もっとなんでもやりやすかったけど……。だけど、あたしはもっと高いところに、あたらしい庭をつくってみるわ。」

と、ムーミンママはいいました。ムーミンパパがなにもいわなかったので、ママはなおもつづけました。

「それから、灯台でもやることはたくさんありますわ。小さな戸だなをあちこちにつけたり、きれいな家具をつくったりさ。そうでしょ。それから、あのあぶなっかしい階段をなおして……つぎには屋根を……。」

　そのあいだにムーミンパパは、考えていいました。

ちへいったり、こっちへきたりして、こしの深さまで水につかりながら。パパはふりかえってなにかさけびました。

「なんていっているのかしら。」

ムーミンママがききました。

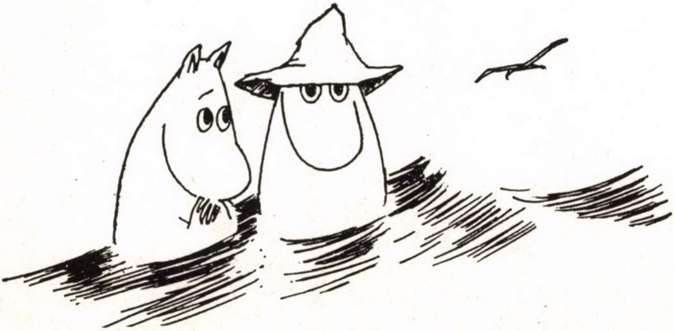
「なくなってしまったんだって。石がみんなころがっていってしまったんだってさ、浜べから。」

と、ムーミントロールがいいました。

これはたいへんです。ムーミンママは、ぬれた砂の上を走っていって、水の中にとびこみました。パパに同情しているのを見せるためなんです。こんなばあいには、こういうふうにするのが、なにかいうよりもずっといいのですよ。

ムーミンママとムーミンパパは、寒さにふるえながら、ならんで水の中に立っていました。ママは思いました。——パパの海は、なんてパパにふしんせつなんだろうって。

「さあ、岸にあがろう。あの石は、わしが思ったほどには大きくはなかったのかもしれないな。」



いく日たっても、東風はあいかわらずしつこくふいていたので、水かさはずんずんましていきました。波はまるで催眠術でもかけられたみたいに、たえまなくとどろきながら、島のまわりをあらっていました。漁師の小屋はかんぜんに孤立してしまいましたが、ちびのミイにいわせると、漁師はじゃまがはいらないのを、かえってよろこんでいるとのことでした。でも、雨がやんだので、一家はそろって浜べにおりて見てまわりました。

「わあ、なんてたくさんの海草。これだけあれば、ずっと大きな庭ができるわ。」

と、ムーミンママはよろこんでさけびました。

ところが、岩をこえたとたん、ママはきゅうに立ちどまりました。庭があとかたもなく、きえていたのです。海があらってもっていってしまったのでした。

（まあ、海に近すぎたのね。そうだわ。）

と、ムーミンママは思いました。ママはとても気をおとしました。

「もっと高いところまで海草を運んで、あたらしいのをつくりにかからなくては——。」

ママは、水びたしの浜べを見つめました。そこでは波が白い半円をえがいて、かん高い音をたてながらくだけていました。波は、はんのきのしげみにおしつけてあったボートのところまでもやってきて、ボートのともにぶつかります。するとボートはおこって、おどりあがるのでした。

ムーミンパパは、水のまん中に立って、自分のつくった防波堤をさがしていました。——あっ

その夜、モランは海でうたっていました。だれもカンテラを持って、浜べにおりてはきません。待っても待っても、だれもきませんでした。

モランは、はじめは小さい声でうたいだしたのですが、だんだんとそのさびしい歌の声は大きくなっていきました。歌はもうかなしいだけではなく、やけっぱちにもなっていました。

　ほかにはモランはいないの
　わたしだけがモランよ
　わたしは世界でいちばん冷たいもの
　けっしてあたたかくはならないの

「あれはあざらしだよ。」

ムーミンパパは、まくらの上で、こうつぶやきました。

ムーミントロールは、毛布を頭の上まですっぽりとかぶりました。モランが、カンテラを待っているのを知っていたのです。けれども、そんなことでくよくよするのはやめようと思いました。モランがほえたいだけほえたって、ムーミントロールの知ったことではありませんものね。そんなことは、なんでもないんです。おまけにムーミンママが、あんたたちは灯油を使いすぎますよ、といいましたものね。そんなわけで、かまわなかったんです。

「ねえ、ママ、まどはだめですよ。」

ムーミンママはため息をつきました。ママがしんぱいしていたとおりになったのです。雨ふりのおかげでみんなは、ちょうど旅のとちゅうで雨にとじこめられたときみたいに、頭がすこしへんになっていたのです。

この島でも、雨の日がこれから何日もあるでしょう。もとの家だったら、家の中でやることが、いつでもどっさりありました。でも、ここではね……。ムーミンママは立ちあがると、たんすのところにいって、いちばん上のひきだしをあけていいました。

「わたし、きょう、この中をのぞいてみたの。ほとんどからっぽだったわ。だけど、なにをみつけたと思う。絵あわせパズルよ。すくなくとも千まいはあるでしょうね。つなぎあわせてみるまでは、それがなんになるか、だれにだってわからないの。おもしろいゲームだと思わないこと？」

ママがパズルをテーブルの上のちゃわんとちゃわんのあいだにあけると、かなりの山になりました。みんなは気のすすまないような目で、それを見まもっていました。

ムーミントロールは、一まいのふだをうらがえしてみました。それはまっ黒でした。モランのような黒というか、あるいはしげみの中のかげというか、それとももうみうまの黒い目でしょうか。ほかにも百万も黒いものはあるでしょう。それはなんだってかまわないのです。パズルがおおよそできあがるまでは、その一まいがどこにあてはまるのか、だれにもわからないのです。

「ひまはいくらでもあるんですもの。お天気さえよければ、なかなか楽しい仕事かもしれませんよ……。」

そのとき、ちびのミイが提案しました。

「きっとあの漁師が、きれいに食べてくれるわ。海草が大すきだもの。へへん。」

ムーミンパパはがっかりしてしまいました。あのランプのみじめなしっぱいにつづいて、またこの海草ではひどすぎました。働いても働いても、うまくいかないのです。ものごとがみんな、指のあいだからぬけていってしまうのでしょうか。ムーミンパパの思いは、つぎからつぎへとうつっていき、さとうがとっくにとけているのに、スプーンでちゃわんをいつまでもかきまわしていました。

テーブルのまん中には、いちばん小さいなべが置いてありました。あいだをおいて、てんじょうからぽつんぽつんと水玉がおちてきました。ムーミントロールは、そこにすわってカレンダーを見つめながら、自分でも知らずに、しっぽにむすびこぶをこしらえていました。

ムーミンママが陽気にいいました。

「カンテラをつけましょうよ。今夜は荒れているから、まどにカンテラをつるさなくては。」

「だめ、だめ、まどはだめ。」

と、ムーミントロールはとびあがってさけびました。

んでしまいました。もう日がくれてきたのです。

「なんとかうまくいったね。」

ムーミントロールが、そっとパパの方を見あげながらいうと、パパはうたがわしそうにいいました。

「そう思うかい。」

それからパパは、しばらく網と山のような海草を見つめていましたが、むすこのいうとおりだと思いなおして、いいました。

「うん、うまくいったね。大海とのたたかいだったね。外海に住んでいると、こういうことがちょいちょいおこるんだよ。」

ちびのミイは、ふたりの冒険の話をきくと、ちょうど食べかけていたサンドイッチをテーブルにおいていいました。

「さあ、おふたりさん、これからがお楽しみよ。あの網をきれいにするのに、三日や四日はかかるわ。あの茶色い海草は、悪魔みたいにしがみついてはなれないもの。網を一日じゅう海にほっぽっておくから、こんなことになるのよ。」

「それがどうした。」

ムーミンパパがいいかけたので、ママはいそいでいいました。

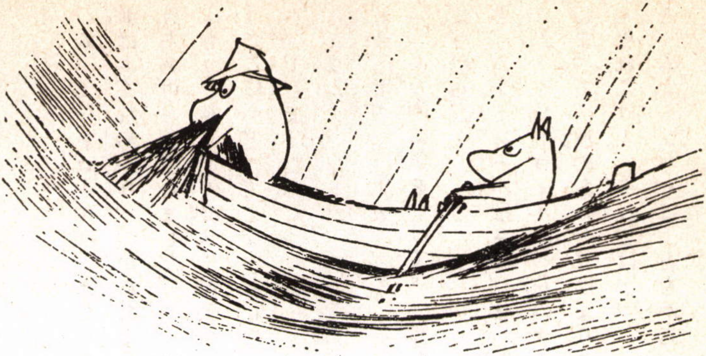
ムーミンパパは、なんにもいいませんでした。前足で網を引きあげるのをやめると、ボートの底に横になって、さもなげやりなようすで両うでで網をたぐりこみました。うでにあまるほどの茶色の海草が、つぎからつぎへと船べりをこえてはいってきました。でも、魚は一ぴきもあがってきません。網は三つともおなじように、海草だけでした。

ムーミントロールは、へさきの向きをかえてから、右のオールはこがずに固定して、ボートを浜にむかって流れるにまかせました。まもなく冒険号のへさきは岸につきました。つぎの波が横からボートにぶつかったため、ボートは浜と平行にひっくりかえりました。ムーミンパパは、とたんに元気づいてどなりました。

「とびこんでへさきを引き出せ。引き出してから、しっかりおさえつけるんだ！」

ムーミントロールはこしまで水につかって、冒険号のともづなをつかみましたが、ボートが荒うまのようにとびはねるので、波がくるたびに鼻づらまで水をかぶりました。いたいほどつめたい水でした。

ムーミンパパはボートをともの方から引き出しましたが、ボートに持ちあげられたり、引っぱられたりしました。パパの帽子は目の上におおいかぶさりました。おまけにオールは砂の上にころがるし、網はパパの足にからまりました。――最悪の事態でした。ふたりがやっと冒険号を安全な場所に引きあげたとき、またもや海の方から雨の幕がやってきて、まわりをうすやみにつつ



「船をまわせ！　バック！　バック！」

パパはボートのともにはらばいになって、浮きをつかもうとしました。

「だめ、だめ、こっちだ！　ちがう、ぎゃくだってば。ようし、さあつかまえた。さあ、こんどはまっすぐにこげ！」

ムーミンパパは網をつかんで、引きあげはじめました。雨がパパの目にふきつけました。網はとても重く感じられました。パパは当惑して考えました。

（こんなに魚がとれたって、とても食べられやしない。なんというやっかいな生活だ。だけど、家族があるんだからしようがないわい……。）

ムーミントロールはくるったようにオールを引きながら、網といっしょに、なにか黒っぽいものがあがってくるのを見ました。それは海草でした。網は海草でフェルトのように厚くなり、何メートルも何メートルもおなじ状態でした。

……。」
　ムーミントロールは、あたりを見まわしました。浜のながめは、すっかりかわっていました。海はふくれあがり、つかれたように、またすねたようにうねっていて、浜べには海草がうずたかくうちあげられていました。
（もううみうまの浜べじゃなくなっちゃった。うみうまがすきなのは、砂浜だけなんだもの、もうここにもどってこないとしたら、どうしよう。もしモランが、あれたちをおどかして、追っぱらってしまったんだったら……。）
　こうムーミントロールは考えて、おそるおそる岩礁の方に目をやりましたが、岩礁は霧雨の中にかくれていました。
「こぐ方向に気をつけて！　浮きをよく見て、波に気をつけるんだぞ。さもないと岸に流されちまうから。」
と、ムーミンパパはさけびました。
　ムーミントロールは、左のオールを力いっぱい引きました。冒険号は、ずっと風下にまわってしまって、波のあいだにはまりこんでいました。
「それこげ！　それこげ！」
と、ムーミンパパは、ともからどなりました。

長い雨の日もおわりに近づき、夕がたごろには風もおさまったので、ムーミンパパは網を引きあげることにしました。

「どうだ、パパは海のことをちょっとばかり知っているだろ。夕飯にはじゅうぶんまにあうように帰ってくるよ。いちばん大きい魚だけ、持って帰ってくるからね。のこりは海に返してやるんだ。」

こう、パパはいかにも満足そうにいいました。

島はどこもぬれていました。すっかり雨にうたれて、色まであせてしまったみたいでした。水かさは浜の大部分が見えないほどにましていて、ボートは、おしりを海に半分つきだして、右に左にゆれていました。

それを見て、ムーミンパパはいいました。

「ボートは、はんのきのところまで引きあげなくてはだめだな。秋になると、水がなにをしでかすかわかったかね。わしがもし、あすの朝まで網を引きあげるのを待っていたら、もうボートはなくなっていたろうよ。海についていては、いくら気をつけても気をつけすぎるということはないんだよ。」

それからパパは、まじめな顔をしてつけくわえました。

「どうして海はこのように水位を上げたり下げたりするんだろう。なにかわけがあるはずだが

と、ちびのミイは感心したようにつけくわえました。
「おまえにも、なにもいわないのかい。」
と、ムーミンパパはききました。
「ひとこともいわないわ。」
と、ちびのミイはいうと、暖炉をよじのぼり、あたたかいかべぎわに身をちぢめて、雨の日をねてくらそうとするのでした。
「どっちにしても、あの人とはおとなりどうしですからねえ。近所づきあいというのは、しなくてはならないんでしょう。」
ママは、こういってため息をつくと、
「雨がふりこんでくるみたいよ。」
とつけくわえました。
「わしがなおしてやるよ。ひまをみて、だんだんにな。」
と、ムーミンパパはいいましたが、心の中では思っていたのです――。
(なに、天気はじきによくなるだろう。もう上にはのぼりたくないな。あそこには、灯台もりのことを思いださせるものが多すぎるよ。)

南西の風で、風力10のものだったようです。ほかの場所にも灯台もりはまだもっと詩をかいたらしいのですが、太い黒い線でけしてありました。ムーミンパパにわかったのは、なにか鳥についてうたっているらしいということだけでした。

（灯台もりのことを、もうすこし調べてみなくちゃな。天気がよくなったら漁師をさがしだしてみよう。おなじ島に住んでいたんだから、おたがいに知っていたはずだ。さあ、このあげ戸をしめて、もうここへはのぼってはくるまい。気がめいってしまうからな。）

と、ムーミンパパは考えました。それからムーミンパパは、はしごをおりながらいいました。

「風向きが、すこし北東にかわってきているから、まもなくあらしはおさまるだろう。ところで、いつかあの漁師を、コーヒーによぼうじゃないか。」

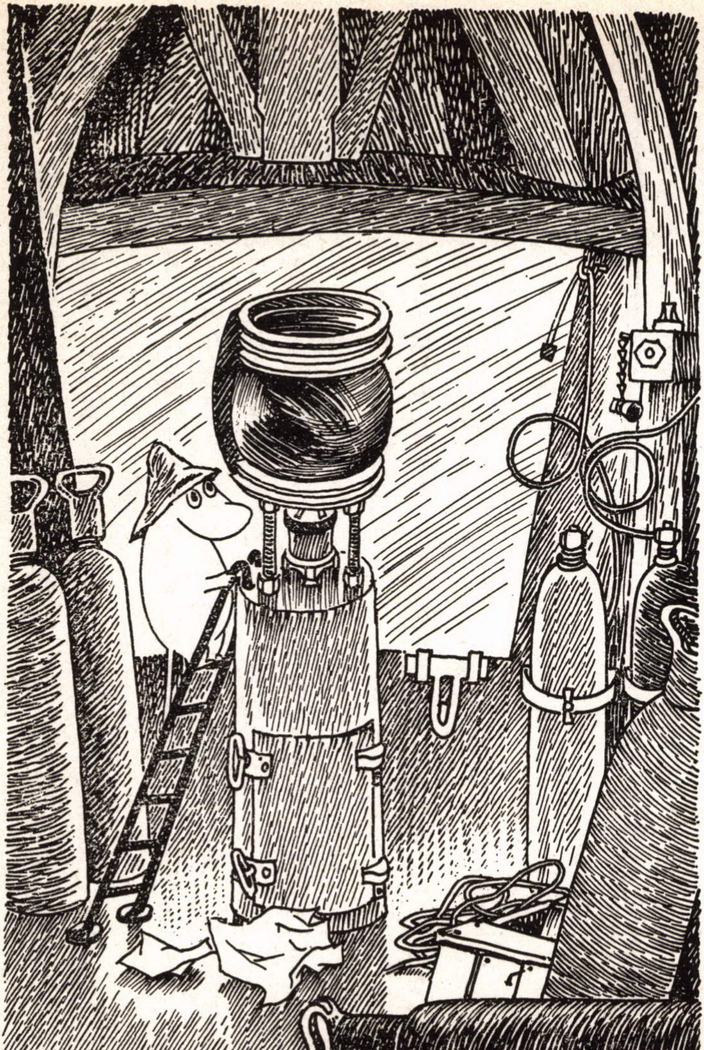
「あの人が、コーヒーなんか飲むものですか。海草となま魚だけしか食べないにちがいないわ。たぶん、前歯のあいだからプランクトンをすっていることよ。」

と、ちびのミイがいいました。

　ムーミンママはびっくりしていいました。

「なんですって。とんだいかもの食いね。」

「ほかにはなにも食べないみたいよ。だからって、あたい、ちっともおどろかないわ。だけどあの人は独立心がつよくて、人にものをきいたりなんか、けっしてしないわよ。」



たので、パパは近づいていって読んでみました。

むこうのがらんとした海には
お月さんが出るだけだ
帆ひとつ通るのも見えないで
四年の長い月日がすぎた

（きっと、灯台もりがかいたんだ。きっと、どうにもやりきれない気持ちになった日に、思いついたんだろう。ぜんぜん通りもしない船のために、灯台の明かりをつけるんだものなあ。）
と、ムーミンパパは思いました。

かべのもっと高いところには、灯台もりが気分のよいときにかきつけたらしいものがありました。

東からふく風も
ばばあのあくたいも
どちらもさいごは
なみだでおわる

ムーミンパパはかべぞいに歩いて、もっと灯台もりのかいたものがないかとさがしはじめました。風のつよさについてかいたものが、たくさんありました。どうやらいちばんひどいあらしは

ですが、おまけに雨までふっていました。そこでムーミンパパは、網はそのままにしておくことにしました。

「なに、網にかかる魚が、ふえるだけのことさ。朝飯がおわったら、いちど上にのぼって、このあらしのようすを見ることにしよう。きっと夕がたまでには、風ぶくろだってからになるだろうよ。」

高いところから見ても、あらしのようすはまったくおなじでした。ムーミンパパは、立ってランプを見ました。つぎには、ねじを一つゆるめてみたり、しめてみたりしました。それからランプの口をあけてみたり、しめてみたりしましたが、なんの役にもたちません。いぜんとして、どうしたら明かりがつくか、わからないのです。このような灯台に、ちゃんとした説明書をのこしておかないなんて、どうかしています。まったく、ゆるせないことですね。

ムーミンパパは、ガスボンベの一つにこしかけて、かべによりかかっていました。頭の上では、雨がまどガラスをたたき、突風がふいてくるたびに、はげしい音をたてました。緑色のガラスは割れていて、下の床にはだんだん水たまりがひろがっていきました。ムーミンパパは、ぼんやりとそれをながめながら、その水たまりを、長い曲がりくねった川の三角州だと想像してみました。

それから、目をかべにそってうつしていくと、だれかがえんぴつでかいた詩のようなものがあっ

らその水滴がぽつりとテーブルの上におちると、すぐつぎの水滴ができました。

ちびのミイが、とびらをほそめにあけてすべりこんでくると、髪の毛の水をしぼりながらいいました。

「この天気では、エレベーターはだめさ。風で灯台のかべからふきとばされてしまうんだもの。」

風が塔のまわりでうなりをあげるのがきこえたかと思うと、とびらが大きな音をたててしまりました。

「コーヒーはもうできた？」

と、ちびのミイがききました。

「こんな天気だと、おなかがすいちゃうわ。大波は黒池までおしよせるし、あのおいぼれのいるみさきは、はなれ島になっちまったわ。おいぼれはあわてふためいてボートの下にもぐって、雨のしずくをかぞえているわよ。」

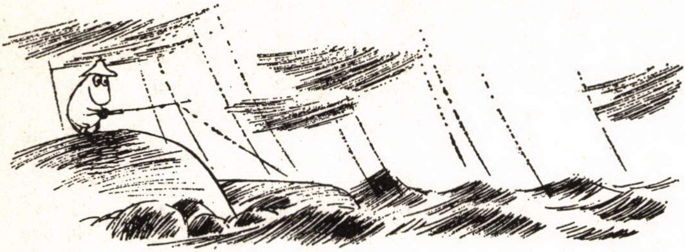
「網！」

と、ムーミンパパはさけびながら、ベッドからとびおきました。

「網をしかけてあるんだ。」

パパはまどのところにいってみましたが、浮きのうの字も見えませんでした。東風はみさきのまっ正面からふきつけていました。風を横からうけながら、網を引きあげるのはたいへんな仕事

第4章



北東の風

日の出のちょっと前に、風がふきだしました。不愉快な、しつっこい東風でした。一家が八時ごろ目をさますと、風は東からつよい雨をふきつけ、灯台は風雨につつまれていました。

「これで、水がためられるわ。つぼをみつけて、あらっておいてよかったこと。」

ムーミンママは、こういって、火だねの上にまきをのせて燃やしつけました。

ムーミントロールは、まだ床の中にいて、だれとも話したくありませんでした。てんじょうにはしみがあらわれて、そのまん中に水玉ができたかと思うと、それがだんだん大きくなってきました。それか

とあとずさりをはじめました。それでもモランは、氷の小島の上にじっとしていました。ムーミントロールは目をモランからはなさないままで、砂浜をあがると、ポプラのしげみの方へ、あとずさりをつづけました。そしてカンテラをけしました。

たいへんに暗くなったのは、月が、島のうしろにおちてしまっていたからでした。水の上を動いていくのは、あれはかげでしょうか――ムーミントロールにもはっきりとはわかりませんでした。かれは灯台へ帰っていきましたが、頭の中は考えてみなければならないことでいっぱいでした。

海はもうすっかりおだやかになっていましたが、ポプラの木立の中では葉がおそろしさのあまりにざわざわいっていました。しげみの中から、つよい灯油のにおいがただよってきました。でも、それはこの島に関係したことでも、その夜に関係したことでもないように思われました。

「このことについては、あした考えるとしよう。いまは、もっとたいせつなことが、心をしめているんだものな。」

と、ムーミントロールはひとりごとをいいました。

んじゃないかな。」

こうムーミントロールは思いました。そこでカンテラをともすと、目の前の砂の上において、暗い水のおもてをねっしんに見つめました。

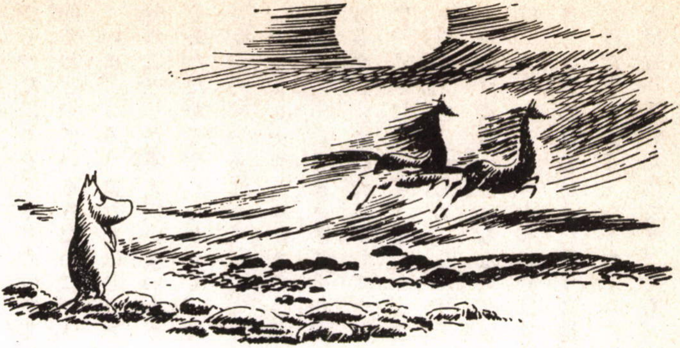
しばらくすると、ムーミントロールは立ちあがって、ゆっくりとカンテラを前後にふりました。それは合図の信号でした。かれが考えていたのは、ただやさしく人をなぐさめることだったのです。かれはどこまでもしんぼうづよくカンテラをふりつづけました。

浜べが寒くなりだしたのは、きっと朝になりかかっていたからでしょう。寒さが海からただよってきて、手足がこごえだしました。ぶるぶるっとふるえて、かれが目をあげると、目の前の水の上にモランがすわっているではありませんか。

モランの目はカンテラの動きを追っていましたが、そのほかの部分は動きませんでした。でもムーミントロールは、モランがもっと近くによってくるにちがいないと思いました。

でもムーミントロールは、モランとはどんな交渉ももちたくなかったのです。モランの冷たさからも、のろまさからも、孤独さからはなおさらのこと、遠くへにげだしたかったのです。しかし、動くことができませんでした。わけもなく、ただもうできなかったのです。

ムーミントロールは、カンテラのふりかたをだんだんのろくしながら、じっと立っていました。ふたりのどちらも動かないまま、時はすぎました。とうとうムーミントロールは、そろりそろり



やったらいいか、それがわかりませんでした。ただ、自分が小さくて、太っちょでみにくいことを、ふたたび感じただけでした。

二頭が自分のそばを通って海へにげこんだとき、ムーミントロールはさけびました。

「きみたちはきれいだねえ。ほんとうにきれいだねえ。ぼくをおいてきぼりにしないでよ！」

しかし、しぶきが空中にあがり、さいごのにじがきえてしまうと、海岸にはもうなにも見えなかったのです。

ムーミントロールは、砂の上にすわって待ちました。きっと二頭は、帰ってくるにちがいないと感じたからです。かれがしんぼうづよく待っていさえすれば、たしかにかれらはもどってくるはずでした。

夜はふけて、月はおちました。

「きっとあいつらは、浜べに光があったら、うれしがるだろう。光はきっとあいつらをここへよびもどして、あそばせる

つくったにじをくぐりぬけて走ってかえると、上を見あげたり、頭をさげたりして、まるで鏡の前でおどっているみたいに、首のカーブと、せなかから尾までの線をみせびらかすのでした。

いま、うみうまたちはじっと立って、おたがいになであいました。あきらかに、おたがいに自分のことしか考えていないふうでした。二頭とも灰色のビロードを着ていましたが、それはとてもあたたかでやわらかくて、ぬれることがなさそうに見えました。そのビロードには、花のもようがついているようでした。

ムーミントロールがうみうまたちを見まもっているあいだに、きみょうといえばきみょうですが、ごくあたりまえのことがおこりました。というのは、きゅうにムーミントロールは、自分自身も美しいような気がしてきたのです。なんとなく心がうきうきして、いたずらっぽい気持ちになってきたのです。そこで、こんなことをいいながら海岸へ走りおりていきました。

「月の光をごらんよ。なんてあったかいんだろ。ぼく、飛べそうな気がするよ！」

うみうまは一声いなないて棒立ちになると、月の光をあびてにげていってしまいました。二頭は、ムーミントロールのそばをかけぬけるときに、じっとこちらを見つめました。髪は風になびき、ひづめはおびえたように地面を打ちました。でも、それはみんなただそんなふりをしているだけだと、ムーミントロールにはわかっていました。二頭がほんとうにおどろいたのではないことは知っていたのです。でも、相手をしてやったらいいか、またはうみうまの気持ちをしずめて

は、月の光をあびて身動きもせずにいる島を、ずっと身近に感じて、すこしもこわいとは思わず、じっと耳をすましてすわりました。

すると、またきこえるではありませんか。――ポプラのうしろの方で、どこか砂の上をはねる足音が。その足音は、すすんだりしりぞいたりしながら、やがて海岸へおりていって水にはいり、水をはねちらしたり、あわをとばしたりしました。

それが、あれ――ムーミントロールのうみうまだったのです。

もうすっかりわかりました。砂の中でかれがひろった銀のかなぐつ、高まる波に月が足をひたしているカレンダー、かれがねむっているあいだにきいたよび声――ムーミントロールは木立の中に立って、うみうまのおどりを見まもりました。二頭のうみうまは、頭を高くもたげ、たてがみをなびかせて、尾を長い光の波のようにひきながら、浜べをいったりきたりしてはねていました。

なんともいえないほど美しいながめでした。うみうまたちも、それを自覚しているかのようでした。かれらはいかにも魅力的で、自由にあけっぴろげに、思いのままにおどっていました。それは自分のためであり、おたがいのためであり、島のためであり、海のためでした。そのどれであっても、うみうまにとってはおなじことだったのです。ときどきかれらは、きゅうに水にとびこんで、まわりに高くしぶきをあげました。それから自分で月の光の中ににじができるほどに。

の歩く一歩一歩ごとに、まわりのかべの上ではかげぼうしがおどりまくりました。こわいと考えるには美しすぎました。

とうとうムーミントロールは、カンテラをしっかりとつかんで階段を一歩一歩おりていって、灯台の下のどろだらけの床につきました。とびらはいつものようにきしんで、ひどく重く感じられました。かれは外の岩の上に、うそのような冷たい月の光をあびて立ちました。

（生きるって、すばらしいことだなあ。どんなものでも、なんの理由もなしにいっぺんにかわることがあるんだねえ。階段がきゅうに美しくなったもんだから、あき地のことなんか、もうまるきり考えたくなくなったぞ。）

と、ムーミントロールは思いました。

ムーミントロールは息をはずませながら、岩の上や、ヒースの中や、ポプラの小さなしげみのあいだを歩きました。いまは木々はひっそりとして動かず、風も息をしていませんでした。かれは耳をそばだてながら、ゆっくりと歩きました。浜べはひどくしずかでした。

（ぼくはあいつらをおどかしたらしいな。なんにせよ、ここへ夜やってくるものは、はにかみやにちがいない。夜の島ってものは、こわがりやなんだなあ。）

こうムーミントロールは考えて、かがみこんでカンテラをけしました。

さて、カンテラがきえると、島はずっと近づいてきたように思われました。ムーミントロール



れはだいじなことだから、おまえは夜のやみの中に出ていって、海岸でなにがおこっているか見なければいけないって。だれかがムーミントロールをよんでいるのでした。おそれてなんかいられません。

ムーミントロールは戸口まできましたが、階段のことを思いだしてためらいました。夜のまわり階段が、こわかったのです。――昼なら、考えるひまもなくかけあがることだってできたのですが。そこで、へやにひきかえして、テーブルからカンテラを持ち出しました。マッチはマントルピースの上にありました。

かれがへやを出て戸をしめると、塔は目の下に深い暗い井戸のように口をあけていました。目には見えなくても、勝手は知っていました。カンテラのほのおは、はじめはちらちらと、明るくなったり暗くなったりしましたが、そのうち安定した燃えかたになりました。ムーミントロールはカンテラを下において、勇気をふるいおこして見まわしました。

カンテラを持ちあげると、光はありとあらゆるかげぼうしをよびさまし、かれのまわりをゆらゆらとうごきました。たいていのかげぼうしは、ふしぎな形をしていて、がらんどうになっている灯台の内側を、上がったり下がったりしてちらつくのでした。きれいなながめでした。階段は下へむかってどこまでもおりていきます。まるで歴史以前の動物のがいこつのように灰色で、いまにもこわれそうでした。すその方は、暗やみの中にきえていて見えません。ムーミントロール

るものが、なんであるか、自分は知らないですむことをねがいました。

ま夜中に目をさましたムーミントロールは、横になったまま、じっと耳をそばだてました。だれかがかれをよんだのです。けれど、ただの夢だったのかもしれません。そこははっきりしませんでした。夜は夕がたとおなじようにしずかで、青白い光がいっぱいでした。満月にちかい月が島のま上にありました。

ムーミントロールはパパとママを起こさないように、できるだけしずかにベッドをぬけだしてまどのところへいって、そっとまどをあけて外を見ました。浜べにくだけるかすかな波音がきこえ、さびしく海の上にうかんだ黒い岩が見えました。ずっと遠くで一わの鳥が鳴きました。島はかんぜんにねむっていました。

いいえ——なんだか知りませんが、下の海岸でおこっていました。だれかが、遠くの方で、いそぎ足のギャロップで水の中をバシャバシャわたっています。——下の方でなにかがおこったのでした。

ムーミントロールは、ひどく興奮しました。なんだかわかりませんが、とにかくほかのだれでもない、自分に関係したこと、自分だけに関係のあることだと確信しました。下へおりていって、自分でようすを見なくてはなりません。なにものかがムーミントロールに告げたのでした。——こ

たってくるのをききました。ムーミントロールはじっと立ちどまりました。
「わしは、あれをきのうもきいたぞ。鳥の声だと思うが。」
と、ムーミンパパがいいました。
ムーミントロールは海を見わたしていいました。
「なんだか、沖の岩礁の上にすわっていますよ。」
「あれは標識だよ。」
ムーミンパパはこういって、歩きつづけました。
（きのうは、あそこに標識なんかなかったぞ。）
と、ムーミントロールは思いました。
（あそこには、なにもなかったがなあ。）
ムーミントロールは棒立ちになったまま、じっと見つめて待ちました。
それは動いていました。とてもゆっくりと岩の上をすべっていって、きえてしまいました。漁師であるはずはありません。あの男は、背が低くてやせていました。あれはなにかべつのものでしょう。
ムーミントロールは元気をだして、また歩きはじめました。この子は、たしかなことでないと、口にだしたがらないのでした。とにかく、ムーミントロールは、毎晩あそこにすわって泣いてい



をしかけよう、ゆっくりと。そらっ。」

パパはこういって、白い小さなペナントのついた浮きを投げこみ、網を水におろしました。網はゆっくりとおなじ動きで、すべるように開き、水のしずくがきらきらと網の目に光りました。コルクは、ちょっとのあいだは水の表面にうかんでいましたが、やがて、ビーズ玉のネックレスがつながってしずんでいくように、しずんでいくのが見えました。網をしかけるのは、とてもたのしい感じでした。それは男らしく心のおちつく仕事で、しかも家族のためにする仕事なんです。

三つの網をおろしおわったとき、ムーミンパパは、標識の上に三度つばをはきました。そのつばは、空中に尾をひいて、まっすぐ水の中にきえていきました。それからパパは、船尾にこしかけました。

しずかな夕がたでした。きれいな夕やけの色はあせて、夕やみの中にきえはじめましたが、しげみのま上の空だけは、まだまっかでした。ふたりはだまってボートを砂浜に引きあげると島をつっきって、うちへ歩いていきました。

ポプラのところまできたとき、ふたりはかすかな泣き声が、水をわ

に長いこと、パパといっしょに住んでいるくせに。

ムーミンパパは、不愉快なときにだれでもがするように、まどのところへいって、へやに背をむけて立ちました。

網の標識が、まどわくの上にのっかっていました。そりゃそうですよ。パパは網をしかけるのをすっかりわすれてしまったのですもの。それはたいせつなことでした。とてもたいせつなことでした。ムーミンパパはほっとしました。パパはふりむいていいました。

「今夜は網をしかけようね。網は日の入り前に海におろさなければならないんだ。いままではわれわれは島で生活するのだから、ほんとは、毎晩網をしかけなければいけないんだ。」

そこでムーミントロールとパパは、網をもってこぎだしました。

「東のみさきから弓形に網をしかけなくちゃ。西のみさきは、あの漁師の領分さ。人の鼻っ先で魚をとるのは、よくないだろ。さあ、ゆっくりおこぎ。わしは海の底から目をはなさないから。」

と、ムーミンパパはいいました。

水は、まるで砂のたいらなテラスから大きな式場の階段をおりるみたいに、ずんずんと深くなっていきました。ムーミントロールはみさきにむかって、だんだんと色のこくなる海草の森をぬけてこいでいきました。

「ストップ。ちょっともどるんだ。ここの海底がちょうどいい。その岩にむかって、ななめに網

「到着」の意味でした。それからパパは、月曜と火曜の下に、二つ小さな×印をかきました。
「だれか、うみうまを見たことある。うみうまって、絵にあるようなきれいなもの？」
と、ムーミントロールはききました。
「たぶんね……。わたしは見たことないわ。だけど、絵かきってものは誇張するっていうから
――。」
と、ムーミンママはいいました。
ムーミントロールは考えぶかそうにうなずきました。絵だけでは、かわいいうみうまが銀のかなぐつをつけているかどうか、わからないのがざんねんでした。
夕日はへやじゅうを金色にし、それからまもなく赤にかえました。ムーミンパパは考えこんで、へやのまん中につっ立っていました。
夕がたですから、あがっていってランプに火をいれる時刻なのです。
でも、ほかの者たちには、パパがはしごをのぼっていけば、上でなにをするか、ちゃんとわかっていました。それからまた、パパがランプをつけられずにおりてくることも、知っていました。なぜみんなは、暗くなるまで家の外にでていて、パパにゆっくり実験をさせてあげないのでしょうか。家庭生活の中には、ときにはムーミンパパの気にくわないものがありました。いまのばあいのように、ときどきパパの家族たちは、思いやりのないことをやったのです――。こんな

くらにゃ……。」

「それから、屋根になにかといのようなものも。二、三日のうちに、飲み水がなくなりますもの。」

と、ムーミンママがつけくわえました。

「しんぱいするな。ママ。といはちゃんとつくってやるよ。待っておいで。わしはなんでもできるんだぜ。」

と、ムーミンパパは、おうようにいいました。

それから家族は、灯台に帰っていったのですが、パパはいつまでも巨大な大かますのことを話していました。風は、ヒースごしにしずかにふき、夕日は島ぜんたいをあたたかい金の光でぬらしました。でも、黒池だけは、岩と岩のあいだで、かげの中にしずんでいました。

ムーミンママは、ちびのミイのちらかしたあとをかたづけていました。あげ戸はもうしまっていました。ムーミンパパは、はいってくるなり、カレンダーに気がついていいました。

「これは、ちょうどわしがほしかったものだ。どこでみつけたのかい。わしがこの島で、きちんとやっていくには、その日が何曜だか、知らなけりゃならんからな。きょうは火曜日、それは知っている。」

ムーミンパパはペンをとりあげると、余白の上のところに大きなまるをかきました。それは、



「きっとお魚がいるね。」
と、ムーミントロールがききました。
「いそうだね。もしいるとすれば、大きいやつにちがいないぞ。あそこに百年もすんで、太りほうだい、みっともなくなりほうだいの、ばけものみたいな大かますを想像してごらんよ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「だったら、すごいな。あたい、つり糸を投げてみるわ。」
と、ちびのミイが感動していいました。
「魚つりは、女の子のすることじゃないな。」
と、ムーミンパパはきっぱりといいました。
「だめだめ。黒池はパパ向きさ。あんまり池のそばまでいってはいけないよ。ここがとても危険な場所だということがわかったね。わしが、くわしく調査してみる。いますぐじゃないがね。いま考えなくちゃならんのは、桟橋のことだ。つぎには、五キロ以上もめかたのあるうなぎや大かますをくんせいにする天火を、つくらにゃならん。それから、雨がふりださんうちに、網をしかけなければならないし、いけすをつ

ムーミンパパはうれしくなりました。ほんとうの湖、黒い池で、とても神秘的に見えました。ときたま小さな波が、海から岩をこえてはいってきました。さかいをこえて波がすべりこんでくると、いっしゅん、鏡のような水のおもてがみだれますが、すぐにまた池はしずけさをとりもどして、ぽかんと空を見つめるのでした。

（——あそこは深いだろうな、うんと深いにきまってる。まったくこのわしの島は、島だけでかんぜんな一つの世界だな。なんでもあるし、しかもちょうどよい大きさだ。なんてうれしいんだろう。わしは世界をこの足でつかんだのだ。）

と、ムーミンパパは思いました。

ムーミンパパは、できるだけの早足で、灯台へ帰っていきました。ムーミンパパは、黒い池をみんながみつけないうちに、自分で家族のみんなに見せたかったのです。

「ざんねんなことに、ま水ではないのね。」

ムーミンママがいいました。

「いやいや、これは海がつくったものさ。きっと大あらしが島をおそい、池に海水をため、底の石をごろごろところがして、すごく深くしたのだろうよ。」

と、ムーミンパパは足で身ぶりをしながらいいました。

ムーミンパパはヒースのあいだをぬけて家路につきました。つかれてはいましたけれど、しあわせな気持ちでいっぱいでした。心の奥のどこかでは、灯台のランプをつけるために、まだまだやってみなければならないと思っていたのはたしかです。でも、夕がたになるまでにはまだ時間がありました。それに、パパはそれまで、大きな石をころがしていたのです。石が海の中にころがりおちるごとに、ムーミンママが、庭から顔をこちらにむけたのでした。

ムーミンパパは、西のみさきをまわって帰ることにしました。

みさきの風下側を、漁師がボートのへさきにつりざおをつけて、こいで通りました。ムーミンパパは、一年のうちのこんなにおそい時期に魚がつれるなんて、きいたことがありませんでした。つりをするんなら七月です。

けれども、この人はあたりまえの漁師ではないんです。たぶん、ひとりだけでいるのがすきなのでしょう。ムーミンパパは、手をあげてふろうとしましたが、とちゅうでやめました。どうせ、こたえてはもらえないでしょうものね。

ムーミンパパは岩の上によじのぼると、風にむかって歩きだしました。ここらの岩は弓なりになっていて、まるで海の方へならんですすんでいく、巨大なけものの背ににていました。思いがけなくムーミンパパは、池に出ました。そこへつくまで、池は目にはいらなかったのですが、水はしずかで黒く、形はだえん形で大きな目みたいでした。

れる。」

　ムーミントロールは、自分の鼻が赤くなるのを感じました。

「あたいがうまくかたづけてやるわ。」

と、ちびのミイはしずかにいいました。

「二、三日たったら、いってごらんなさい。そのかわり、あたいのためにエレベーターのせわをするのよ。あたい、出かけるから。」

　ムーミントロールはかなしくなってじっと立ちつくしました。秘密はあばかれてしまったのです。せっかくのかくれ場所も、いまでは、ありふれたところになってしまいました。ムーミントロールは、いそいでカレンダーのうみうまの目を見つめました。ムーミントロールは思いました。

(――ぼくたち、きみとぼくとは、にているんだねえ。ぼくたちは、おたがいにわかりあえるんだ。ぼくたちは美しいものにだけ心をひかれる。いつかはぼく、ぼくのあき地を手に入れるだろう。ほかのものはいらない。けれど、いまはそのことを考えたくないな……。)

　下ではちびのミイが、ロープをふってどなっていました。

「引きあげてよ。はなしちゃだめよ。ありのことをわすれないで。」

　エレベーターは、かんぜんに役にたちました。まったくのところ、ちびのミイは、失敗するなどとは思ってもみなかったのです。

ロールは、絵をつくえの上にのせて長いあいだ見つめていました。
「そんなの、五年も前のものよ。」
と、ちびのミイは床へとびおりながらいいました。
「曜日がぜんぜんちがうじゃないの。とにかく、だれかが、破ってすてたものよ。ちょいと、ロープを持ってちょうだい。あたい下へおりていって、このエレベーターが役にたつかどうか見たいのよ。」
「ちょっと待ってよ。おまえにききたいことがあるんだ。ありにひっこしをさせるにはどうしたらいいだろうね。」
と、ムーミントロールがいいました。
「ほじくりかえしちゃうのよ。わかりきっているわ。」
ちびのミイはいいました。
「だめ、だめ。ぼくは、ありをおとなしくどかせたいんだよ。」
と、ムーミントロールがさけびました。
ちびのミイは、じっと相手を見つめていましたが、しばらくしていいました。
「ああ、わかった。あんたはあのしげみの中に、気にいった場所をみつけたんだ。そしてそこは、ありでいっぱいなんでしょ。もし、あたいがありを追っぱらったら、あんたはあたいになにをく

ら、かってにどんどんやってくばかりだ。）

ムーミントロールはいいました。

「ところで、あのしげみだけれど、だれもいやしないよ。まるっきりいないんだ。せいぜい、ありが二、三びきいただけさ。」

「でしょうね。あたいもそう思ったわ。」

と、ちびのミイはいいました。

それはそれでおしまいでした。ちびのミイは歯のあいだでくちぶえをふきながら、大きなくぎをガンガン打ちこみました。

「パパが帰らないうちに、こんなごたごたはすっかりかたづけなくちゃだめだぜ。」

ムーミントロールは、金づちの音の合間にさけびましたが、なんのききめもなかったようでした。そこでムーミントロールはがっかりして、古い紙やかんからや、古い魚網や毛のてぶくろや、あざらしの皮の切れっぱしの山をひっかきまわしました。——そうしているうちにカレンダーをみつけたのです。

大きなかべカレンダーで、月の光をあびて波のりをしている、うみうまのすばらしい絵がついていました。お月さまは水あびをしているし、うみうまは、金の長いたてがみと、底しれないあわい目をしていました。だれがこんなきれいな絵をかくことができたのでしょう。ムーミント

ちびのミイは自信たっぷりに、危険をおかして、あけはなした北のまどの外にぶらさがっていました。まどの出っぱりに、くぎで木を打ちつけていたのです。あげ戸はあいているし、床の上にはなにか灰色のごたごたしたものが、つみかさねてありました。

「こんなことをして、パパがなんというと思う。だれもあそこへのぼることはゆるされていないんだぜ。パパの私室なんだから。」

と、ムーミントロールはいいました。

「パパの私室の上には、物置があるわよ。」

と、ちびのミイはへいちゃらでいいました。

「それはそれは、いい物置よ。あの中にはなんでもあるわ。そのくぎをよこしてちょうだい。食事のたびに階段をあがることにあきあきしちゃったから、エレベーターをこしらえているのよ。あんたたちは、あたいをバスケットにいれてたぐりあげてくれるか、食べものをあたいのところへおろしてくれればいいの。こっちのほうがいいかもしれないわね。」

(なんていう女の子だろ。)

と、ムーミントロールは思いました。

(こいつは、したいと思ったことはなんでもやるんだ。おまけにだれもとめるものがない。だか

れを自分のものにしたいと思ったのに、そこにはもとからおおぜいのものが住んでいて、ほかへはひっこしていこうとしないことがわかったとするの。そのくせ、そいつらには、その場所がどんなにすばらしいとこか、わかりもしないんだよ。そういうばあいでも、そのれんじゅうには、そこに住む権利があるの？」

「もちろん、ありますとも。」

と、ムーミンママはいいながら、海草の中にすわりこみました。

「もしそいつらが、どんながらくたの中にいても、おなじようにしあわせだとしたら、どう？」

と、ムーミントロールはさけびました。

「そんならだんだんにいってきかせるのね。そうして、おひっこしのときには、てつだってやればいいかもしれないわ。でも、おなじ場所に長いこと住んでいれば、ひっこさなければならないとなると、ずいぶんつらいことなのよ。」

と、ムーミンママはいいました。

「ああ、いやになっちゃうな。ちびのミイはどこにいるの。」

と、ムーミントロールがいいました。

「あの子は、灯台のどこかよ。エレベーターらしいものをつくっているわ。」

と、ムーミンママはこたえました。

と、ムーミントロールはくりかえしました。
「ぼくたち、あいつらと話ができるの？　もしぼくが、立てふだを立てて注意をかいておいたら、あいつらにわかると思う？　あいつら、字が読めるかしら。」
「あかありだって？」
と、ムーミンパパはけげんそうにいいました。
「もちろん、やつらにゃ、なにひとつわかりっこないさ。――さてと、わしは三角形の石をみつけて、この二つの大石のあいだにいれにゃいかんぞ。防波堤はつよくなくちゃいかん。――だからそれをつくるのは、海をよく知っているものでなくちゃならんて……。」
ムーミンパパは、こんなことをつぶやきながら、水に鼻をつっこんで、水の中を歩きつづけました。
ムーミントロールが、海岸の小高いところへいって立つと、ムーミンママがママの庭を歩きまわっているのが、よく見えました。ママは、海草をひろげていました。ママの前足とエプロンは茶色っぽくよごれていましたが、ママはまるでしあわせをそこらじゅうにまきちらしているみたいでした。
ムーミントロールは、ママのそばへいって、声をかけました。
「ママ、ちょっとこういうことを想像してみてよ。ママがとてもすばらしい場所をみつけて、そ

ボンところがりおちるんです。ころがした人は、その努力と誇りに身ぶるいして、そこに立ちつくすのです。

「パパ。」

ムーミントロールはさけびました。

ムーミンパパは、ふりかえって、むすこにむかって手をふりながらどなりました。

「石は、ちょうどいいところにおちついたよ。突堤をこしらえるのさ。防波堤の一種だよ。」

それからムーミンパパは、海の中へはいっていき、鼻を深く水の中へつっこみ、ふうふういいながら、前のよりももっと大きなまるい石を、海の中でころがしはじめました。

水の中で、石をあげたり、ころがしたりするのは、陸でするよりもずっとらくでした。ムーミンパパは、なぜだかふしぎに思いましたが、いずれにせよ、自分がとてもつよい人間に思えたので、大満足でした。

「ぼく、パパにききたいことがあるんだ。」

と、ムーミントロールはさけびました。

「あかありのことなの。ぜひきいてよ。」

ムーミンパパは、水から鼻をだして、きき耳をたてました。

「あかありなんだよ！」



と、ムーミントロールがいいました。
でも、ムーミンパパはきいてはいませんでした。というのは、ムーミンパパはちょうどそのとき、大きなまるい石にうまく手をかけて、ごろごろドスーンとばかり、斜面をころがしおとすことに成功したからです。石はきれいな火花を二つも出して、かすかにですけれど、うっとりするような火薬のにおいをあとにのこしたまま、いまでは、下の方の、おさまるべきところにおさまっていました。
大きな石をころがすのは、すばらしいことです。最初は耳からしっぽの先まで、ありったけの力をこめておすんです。はじめはほんのすこししか動きません――それからもうすこし多く――そしてついには大石がごろごろころがりだして、とてつもない水けむりをあげて、海へド

たいに正しい正義にしたがうと、このあき地は、ありのものではなくて、たしかにムーミントロールのものなんです。

（どうしたらそのことを、ありにわからせられるかな。）

と、ムーミントロールは思いました。

（やつらが、ほかのところにひっこしてくれればかんたんなんだ。ほんのちょっと、たった数メートル先でもいいんだ。そのことをありたちに説明する方法はないものかしら。万一のばあいには、境界線をひいてこのあき地をわけたって、いいじゃないか。）

ありはまたもどってきて、ムーミントロールの居場所をつきとめると、攻撃を開始しました。ムーミントロールは、たいきゃくしました。楽園からの不名誉な逃亡です。でも、またもどってくるぞと、かれはかたく決心しました。なにしろこの場所は、一生かれを待っていたのです。何百年ものあいだ待っていたかもしれません。ムーミントロールは、だれよりもその場所がすきでした。だから、ここはかれのものなんです。もし百万のありが同時にその場所がすきだったとしても、ムーミントロールほどつよくそれを感じることはないはずですからね。

とにかくムーミントロールは、そう信じたのです。

「ねえ、パパ。」

は、かれの大まじめなねがいの一つでしたから、いつもさがしていたのです。いままでにも、いくどもみつけたことがあります。でも、どの一つだって、これほどすばらしいものではありませんでした。ここは、かくれ場所であって、しかもあけっぴろげでした。自分を見ることができるのは、鳥だけなんです。地面はあたたかいし、四方はまもられていました。ムーミントロールはほっとふかい息をつきました。

　そのとき、なにかが、ムーミントロールのしっぽにかみつきました。やけるようないたさでした。ムーミントロールは思わずとびあがりましたが、すぐにそれがなんだかわかりました。あり——小さな執念ぶかいあかありでした。草の中にありの大群がいて、それが四方八方からやってくるのです。また一ぴきが、こんどは足にくいつきました。

　ムーミントロールはそうそうにひきさがりましたが、ひどくがっかりしたために、目をまっかにしていました。すっかりはらをたてていたのです。もちろんありたちは、ムーミントロールがこの場にあらわれる前から、ここに住んでいたのでしょう。けれども、地面の下に住んでいると、上の世界のことはすこしも見えないものです。ありは、鳥や雲がどんな形をしているか、考えたこともありません。そんなわけで、たとえムーミントロールにとってたいせつなことでも、ありはすこしも気にしないのです。

　正義といっても、いろんな種類の正義があります。すこしばかりこみいっているけれど、ぜっ

ました。ときどき、メリメリと音がして、朽ちたやわらかい幹が茶色のビロードのかたまりのようになってたおれました。地面は絹みたいにふわふわとなめらかで、ぎっしりとかれたまつ葉でおおわれていました。

だんだんと奥へすすむにつれて、不愉快なとじこめられた感じがなくなり、ムーミントロールは、自分がひえびえした暗がりにまもってもらっているように感じるだけになりました。そして、小さなかわいい動物であるかれは、だんだんと、ここにそっとかくれて、平和にくらすのをのぞむような気持ちにもなったのです。

ところが、きゅうにまた、海の音がきこえてきたかと思うと、太陽のあたたかさと、まぶしさを感じました。かれはしげみのまん中のあき地へ出たのです。

それはごく小さなあき地で、やっとベッドを二つならべられるほどの大きさでした。あき地の中はとてもあたたかくて、はちが花のまわりをぶんぶん飛んでいます。どっちを見ても、木々が立ち番をしていました。頭の上には、しらかばの葉がサラサラと波うって、うす緑の屋根となり、その屋根をすかして青空が見えました。なにもいうことはありません。ムーミントロールは大満足でした。だれひとり、自分より先にここにきたものはいないのです。このぜんぶが自分のものなんです。

ムーミントロールは、そっと草の上にすわって目をとじました。安全なかくれ場所をもつこと

方へ身をくねらせて、いまにも自分の根っこを引きぬいて、にげだそうとしてるみたい。そんなことぐらいわかっているさ。）

ムーミントロールはまだおこりながら、しげみの中へぐんぐんはいっていきました。太陽の光はかくれて、寒くなりました。えだがムーミントロールの耳をひっかき、もみの葉先がちくちくからだにささり、かれた木の切れっぱしが足の下でぽきんと折れました。なんだか地下室か、またはかれた植物のにおいがしました。あたりはひっそりとして、海の音ももうきこえません。そのとき、だれかの息をする音がきこえたような気がしました。ムーミントロールはぎょっとして、これは木々につかまってとじこめられてしまうかもしれないぞと、こわくなりました。大いそぎで、お日さまのあたっているところに出なくちゃと、かれはひどくあせりました。でも、そのとき思いました。

（いや、もしいまぼくがひきかえしたら、もう二度とここへこようという勇気はおこらないだろう。ぼくは一生のあいだしげみの外をめぐりながら、中にはいる勇気がなかったんだと自分にいいかせることになるだろう。きっと、ちびのミイがぼくをおどかしただけのことなんだ。よし、帰ったらあいつにいってやろう。——「しげみの中には、なにもいなかったぜ。ぼくはちゃんと見てきたんだぞ。この、うそつきめ！」って。）

ムーミントロールは、一つくしゃみをしてから、またすこし先まで、木のあいだをはっていき

「そうじゃないよ。ぼくには、ただ、だれかがあそこにすわっているのが見えるだけなんだ。とてもはっきり見えるんだぜ。だけど、あれがほんとうなのか、ただぼくをからかっているだけなのか、それがわからないんだ。おまえはまじめに、ほんとに、あそこにだれかがいると思うのかい。」

ムーミントロールがこういってきくと、ちびのミイはわらいながら立ちあがって、いいました。

「ばかなこといわないでよ。じゃあ、さようなら。あたいはあのへんなおいぼれ漁師を見に、みさきへいくわ。あたい、あのおじさんに興味があるのよ。」

ちびのミイがいってしまうと、ムーミントロールはもうすこししげみの近くへはっていって、むねをどきどきさせながら、中をのぞきました。海べからはおだやかにくだける波の音がきこえてくるし、太陽はムーミントロールのせなかをぽかぽかとてらしていました。

（もちろん、だれもいやしないさ。）

と、ムーミントロールははらをたてて考えました。

（ちびのミイが、つくりごとをいっただけなんだ。あいつはいつでもありもしないものをつくりあげて、それをぼくに信じさせようとするんだ。こんどやったらいってやろ。「やあい。ばかいうんじゃないぞ。」って。すこしつっぱなして、いばってやるんだ。なあに、このしげみは、危険なことなんかありゃしない。ただすこしこわがっているだけさ。どの木もどの木も、うしろの

と、ちびのミイは感心していいました。

ムーミントロールは、こんがらかってへびのように曲がりくねっている、木のかたまりの下をのぞきました。すると、地面の上には、もみのはい枝と、茶色のまつ葉のじゅうたんがしかれていて、それがほらあなみたいな暗いあなの上にもかかっているのが見えました。

「ごらんよ。もみの木が、小さいしらかばをかばってうでにだいているよ。」

と、ムーミントロールはいいました。

するとちびのミイは、いじわるくこたえました。

「あんたはそう思うの？　あたいは、もみの木がしらかばをしめつけているんだと思うわ。ここは、まさしくそういう種類の森なのよ。たったいま、だれかがそのへんでしめつけられているとしても、あたいはおどろかないわ。こういうふうにして！」

ちびのミイは、ムーミントロールの首にとびついて、しめあげはじめました。

「やめろ。」

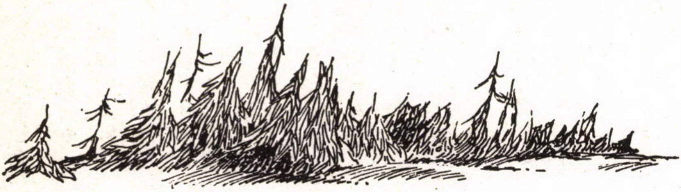
と、ムーミントロールはさけんで、ふりはなしました。

「おまえ、ほんとうにだれかがあの中で……。」

「あんたは、なんでも文字どおりにとりすぎるわ。」

と、ちびのミイはばかにしていいました。

第 3 章



西風

ムーミントロールとちびのミイは、ひなたにはらばいになって、しげみをのぞきこんでいました。そのしげみは、背が低くて、木がもつれあっていました。

小さなふしくれだったもみの木と、それよりもっと小さいしらかばは、うまれてからこっち、ずっと風とたたかってきたのです。木々は、身をまもるためにくっつきあってはえていました。こずえは成長をやめたのですが、えだは土にくっついたところで、どこまでもそこにしがみついていました。

「この木たちは、よくもこんなにしゅうねんぶかく、いがみあう元気があるわね。」

にならないこと？　ここでは森のざわめきがきこえませんわね。」
と、ムーミンママはいいました。

　ムーミンパパは、耳をすましました。島のまわりでぶつぶついっている海の音をきくと、もとのうちのまわりでは、夜になると、どんなに木々がサヤサヤと話をしていたかを思いだしました。

「しょうじきにいうと、こっちのほうがたのしいくらいね。そりゃ、ちがいますけれど。」
と、ムーミンママは耳の上まで毛布を引っぱりあげながらいいました。

「あなた、もうこわい夢はみそうもないこと？」

「うん、みないと思うよ、夜中にサンドイッチを食べるのは、おいしいもんだねえ。」

へやの中はひっそりして青く、四つのまどの外側には夜がはりついていました。

「夢をみていたんだ。ああ、こわかった。」

と、ムーミンパパはいいました。

　ムーミンママは起きあがると、灰になりかかった火の上へ、かわいた木を二、三本ほうりこみました。それが燃えあがって、あたたかい金色の火がやみの中にちらちらしました。

「サンドイッチをつくりましょう。かわった場所でねたからですよ。」

と、ムーミンママはいいました。

　ムーミンパパが、ベッドのはしにこしかけて、サンドイッチを食べると、夢のこわさはきえていきました。

「へやのせいだとは思わないな。あんないやな夢をみたのは、このベッドのせいだ。わしは自分であたらしいのをつくるよ。」

と、ムーミンパパはいいました。

「そうなさるといいわ。ところでなにかものたりないとお思い



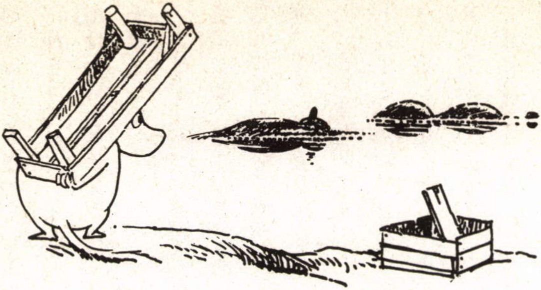
へ、のぼりついたのです。それからかべのまわりを手さぐりしてマッチをさがすころには、夢の速度はおそくなっていました。カーブした色ガラスの大きなのが、何まいも目の前にあって、外の海をうつしていました。赤いガラスは波を火のように赤くしましたし、緑のガラスをとおすと、海はたちまちエメラルドグリーンにかわり、月の世界かどこかにある海みたいに、遠く冷たく思われました。

ぐずぐずしているひまはありませんでした。けれど、ムーミンパパがいそげばいそぐほど、ことはうまくはこびません。ムーミンパパがガスボンベにつまずくと、ボンベはつぎからつぎとむこうのはしまでころがっていっては、また波のようにころがってきました。そこへまた、鳥が帰ってきて、ガラスまどにつばさをぶっつけました。すべてが、ムーミンパパのランプをつけるじゃまをするのです。

ムーミンパパはおそろしくなって、大きなさけび声をあげました。ガラスが割れて、ムーミンパパのまわりにきらきら光るかけらが、何千となく落ちてきました。海は灯台の屋根の上までも高くあがり、ムーミンパパは深く深くしずみはじめました。やがてムーミンパパが目をさましたときには、ムーミンパパは床のまん中で、頭のまわりに毛布をまきつけていました。

「いったい、どうなさったんですの。」

と、ムーミンママがききました。



と、ムーミンパパは思いました。

それからベッドをかたにかつぎましたが、それは、じょうぶなよいベッドで、文句をいうところはありませんでした。しかし、ムーミンパパのベッドになるのは、塔の中にある灯台もりのベッドです。これはほかのものに使わせるわけにはいきません。

その晩ムーミンパパは、おわりのない階段をかけのぼっている夢をみました。ムーミンパパをとりまくやみは、鳥のつばさのパタパタいう音でうずまっていました。みんなだまってにげていくんです。階段は一段ごとにミシミシ鳴って、しないました。

ムーミンパパはひどくいそいでいました。おそくならないうちに、てっぺんにたどりついて、ランプに火をつけなければならなかったからです。自分でランプに火をいれることが、ぜったいに必要なのでした。階段はだんだんせまくなりました。

いま、ムーミンパパはその足の下に、鉄ばしごの音を感じました。やっと、ランプがムーミンパパを待っているガラスの丸べや

弱な階段がしんぱいだけれど……。」
「わしが自分で運びあげるよ。」
と、ムーミンパパは帽子をくぎからはずしながらいいました。
岩の上はほとんど暗くなっていました。ムーミンパパは、海を見つめながら思いました。
「いまごろ、ママは、カンテラをともしているだろうな。ママは、ほのおを大きくして、いつものようにほのおを見つめて立っていることだろう。油はたくさんあるし……。」
鳥はみんなねむりにつきました。島の西のはずれの岩は、日がしずんでいった空を背にして黒く見えました。岩の一つに目じるし――ひょっとすると石のケルンかもしれませんが、立っているのが見えました。ムーミンパパは、最初のベッドを持ちあげたとたんに、立ちどまって耳をかたむけました。
ずっと遠くの方で、かすかな泣きさけぶ声、とても奇妙なかなしそうなさけび声がきこえたのです。いままでにきいたどんな音とも、それはちがっていました。その声は、水をわたり、広いさびしい荒野を通って、ムーミンパパの方へやってくるように思われました。ちょっとのあいだ、ムーミンパパは自分の足の下の岩が、ふるえたように思いました。しかし、つぎにまた、すべてはしずかになりました。
（鳥だったにちがいないが、ずいぶんへんな鳴きかたをするんだなあ。）

ばされるのはごめんよ。」
ムーミンパパは、テーブルから立ちあがってどなりました。
「おまえにわかるもんか。灯台もりはわしなんだ！　明かりはともるはずだ。それだけが目的なんだ。ランプに火をいれずに灯台に住めると思うか。暗やみの中にいるあのたくさんのボートに、なにがおこるかわかったものではない。いつなんどきでも、難破して、われわれの目の前でしずむかもしれないんだ……。」
「パパのいうとおりよ。そして朝の海岸は、おぼれたフィリフヨンカや、ミムラや、ホムサで、いっぱいになってるんだ。みんな青い顔して、海草で緑色になってさ……。」
と、ちびのミイはいいました。
「ばかなことをいうんじゃないの。」
こういって、ムーミンママは、ムーミンパパの方をむいていいました。
「あなたのことですもの。今夜、明かりがつけられなくても、あしたかいつかはつけられるでしょうよ。それに、もしどうしてもだめだったら、お天気のわるいときには、このカンテラをまどにぶらさげましょうよ。それを見て、この方向へいけば、岩にのりあげるんだと、人がわかるにちがいありませんもの。
それはそうと、暗くならないうちに、ベッドを運びあげるのがいいんじゃないかしら。あの貧

「あなた、あたしたちのために、いいベッドをつくってくださったのね。それからあのたるは、お魚の塩づけにちょうどいいと思いましたよ。雨水をためるだけに使うのはおしいようですもの……。」

ムーミンパパは、南に面したまどへ歩いていって、外をのぞきました。いそいで顔をあげたムーミンママは、ムーミンパパのしっぽがこちこちにかたくなっていて、そのはしがいらいらとふるえているのに気がつきました。

ムーミンママは火にもっと木をくべておいて、にしんのかんづめをあけました。ムーミンパパは、一言もいわないでお茶をのみました。ムーミンママはかたづけをおわると、カンテラをテーブルの上においていいました。

「わたし、思いだしたんですが、灯台によってはガスを使うのだそうですよ。ガスがおしまいになると、そういう灯台に明かりを入れることは、ぜんぜんだめなんですって。」

「ガスボンベはあるんだ。」

と、ムーミンパパはむっとしたようにいいました。

「灯台じゅうボンベだらけだ。だけどどうやって接続するか、それがわからないんだ。」

「ねじがたりないのかもしれませんよ。わたし、どうもガスは信用できませんの。危険でこわいんですもの。あなた、ほっておいたほうがいいんじゃない。わたしたち、ガスが爆発してふきと

ん。それにはなにかほかのことを考えているのがいちばんいいのです。

　ムーミントロールは、テーブルにむかって、小さなまるい小石をつみあげていました。

「ただいま、パパはどこ。」

と、ムーミンママはいいました。

「明かりをつけに、上にいっているよ。ぼくがいっしょにいこうとしたら、きてはいけないってさ。パパはすごく長く上にいるんだよ。」

と、ムーミントロールはこたえました。

　からっぽの鳥の巣が、つくえの上においてありました。ムーミンママはくちぶえをふきながら、ストーブのそばに木をつみあげました。風はすっかりおち、夕日の光が西のまどからさしこんで、床と白かべにあたたかい光を投げかけていました。

　火がおこりかけたころ、ちびのミイが戸口からはいこんできて、ねこのようにまどわくにとびあがりました。それから鼻をまどガラスにおしつけると、つばめにむかって、「いいっ。」をしました。だしぬけに大きな音をたて、あげ戸が開いたとおもうと、ムーミンパパが鉄ばしごをおりてきました。

「明かりがつきましたの？」

と、ムーミンママはききました。



ぎの夏までは、一つだって実現しないことは承知のはずなのに、ムーミンママったら、それにはおかまいなしでした。ムーミンママには夢みるくせがあったのです。そして、ムーミンママの心のおくにあったいちばん大きな夢といえば、りんごの木を植えることでした。

その日もおわりに近づきました。灯台の中のハンマーの音は、とっくにやんでいましたし、つばめもずっとしずかになりました。ムーミンママはひとりでくちぶえをふきながら、ヒースを通りぬけて、うでいっぱい流木をかかえて帰ってきました。ムーミンパパは、ムーミンママがつかまれるように、手すりをつくりました。ドアの前には、木で作った小さなベッドが二つできていました。また、ムーミンパパが海でみつけてきたたるもおいてありました。たるはちっともいたんでいないで、前には緑色だったように思われました。

それやこれやで、まわり階段はいまではそんなにこわくなくなりました。ただ、下を見ないように気をつけないといけませ

と、ムーミンパパはいいました。
「なにかわからないことがあったら、いつでもわしにきかにゃいかんよ――海に関することは、なんだってわしは知っているんだから。それはこういうことなんだ。おまえがみつけたのは、波に打ちあげられた海草なんだよ。ある時間がたつと、それが土になるんだ。ほんとうの土にさ。それをおまえ、知らなかったのかい。」
ムーミンパパはわらいながら、前足を外側へのばして、海の中にある海草をのこらずムーミンママにやるようなかっこうをしました。
そこでムーミンママは、海草を集めにかかりました。そうやって一日じゅう、海草を運んで岩のわれめにおきました。ムーミンママはだんだんに小さな庭をつくるつもりだったのです。
海草は、もとのうちの庭の土とおなじように、あたたかく黒い色をしていましたが、むらさきとかオレンジ色とか、独特の色もまじっていました。
ムーミンママは、なごやかなたのしい気持ちでいっぱいでした。にんじん・あかかぶ・じゃがいもなんかが、あたたかい土の中ではどんなに大きく太く育つかを、うっとりと夢みました。ムーミンママは、緑の葉がつよいじょうぶなかたまりになって、ぞくぞくと出てくるところが、目の前に見える気がしました。青い海を背景に、青々した葉が風にそよぎ、家族に食べさせるためのトマトやえんどうやいんげんが、ふさふさと実るのが見えるようでした。そんなことはつ

た。すると、とうとう土がみつかったのです。肥えた土の黒いベルトが、海岸線にそったはんのきの下にありました。元気のいい青々した植物が石と石とのあいだにはえていて、金色やむらさき色の花をつけて、まるでジャングルのようにしげっていました。

ムーミンママは、足を土につっこんでみました。すると、何百万という生きている根が、ぎっしりと土をうずめているのがわかって、それをじゃましてはいけないと感じました。でも、そんなことはどうでもいいことでした。とにかく土があったのです。いまこそ、はじめてムーミンママは、この島がほんものだと感じました。

ムーミンママは、海草の中で、木のきれを集めていたムーミンパパの方へ、エプロンを風になびかせながら、走っていって、さけびました。

「土をみつけましたよ！　土をみつけましたよ！」

ムーミンパパは顔をあげました。

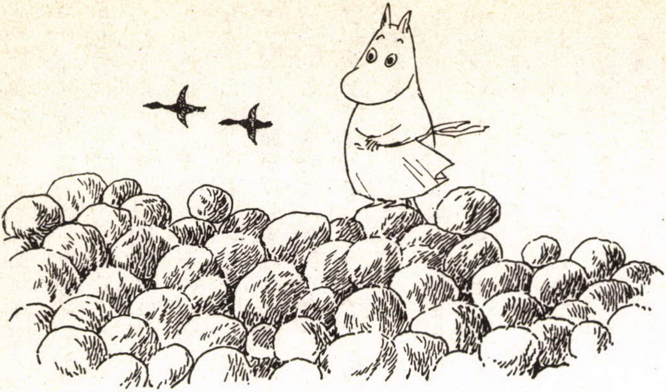
「おうい！　わしの島をどう思うかね。」

「世界じゅうのどこともにていないのね。」

ムーミンママは熱をこめてムーミンパパにいいました。

「土は海岸にあるのですよ。島のまん中にはちっともないの。」

「そのわけをいってきかそう。」



いまだかつて、こんなにたくさんの石を見たことは、ムーミンママはありませんでした。ポプラの木のしげみのうしろは、灰色の石がごろごろしているだけの荒れ地でした。そのまん中に、だれかが石をとりのけてあなをつくったのがありました。ムーミンママはそこへいって、あなをのぞいてみましたが、中にはなにもなくて、まわりとまったくおなじ灰色をした石が、もっとたくさんあるだけでした。

いったい、灯台もりはなにをさがしていたのだろうと、ムーミンママはふしぎに思いました。たぶん、なにもとくべつのものではなかったのでしょうね。もしかすると、ただおもしろ半分にやってみたのかもしれません。あの人は、つぎつぎに石をもちあげてみたけれど、石はもとのところへころがっていくばかりなので、とうとうあきてしまい、やめてしまったのでしょうよ。

それからムーミンママは、砂浜の方へ歩いていきまし

しに、鳥をおっぽりだせるというだけじゃないの。」
「ほんとうに、これから先ずっと、外で食事をするのかい。」
ムーミンパパは、あきれてききました。みんなは、ムーミンママを見ました。
すると、ムーミンママは、きっぱりといいました。
「巣はとってちょうだい。まどの外にさげたらいいわ。ときによっては、かもよりもトロールのほうがたいせつですからね。」
ムーミンママは、よごれたさらをベッドの下におしこんで、へやをきれいにしました。それから土をさがしに外へ出ました。これはとてもだいじなことでした。
ムーミンママは灯台の階段のそばで立ちどまって、ばらの木に塩水をすこしかけました。ばらはまだ以前の土がはいった箱のままで、待ちくたびれていました。庭は、できるだけ灯台に近いところで、風下のよく日のあたるところにつくられるべきです。しかし、なにより、肥えた土がたっぷりとなければいけません。
あっちこっちを見てまわったすえに、ムーミンママは、灯台の立っている岩にそって、ヒースのはえているところから、こけのはえている方へおりていって、さがしました。それから、ポプラのしげみの方へゆき、あたたかみのある泥炭質の砂地にもいってみましたが、どこにも土はありません。

ムーミンパパは、暖炉の中に立って、えんとつの上の方をのぞいてさけびました。
「おや、あんなとこに鳥の巣がある。これじゃあ燃えなかったはずだ。」
「巣には鳥がいますか。」
と、ムーミンママはたずねました。
ムーミンパパが、えんとつの中から出てきたときにはまっ黒でした。
「きのどくに、かもかなんかだろうと思うが、もういなかったよ。きっと南の方へ飛んでいったんだろう。」
「だけど、きっと春には帰ってくるよ！　鳥が帰ってきて、巣がみつからなかったらかわいそうね。炊事は外でしてもいいもの。」
と、ムーミントロールがさけびました。
「なんですって。これから先ずっと？」
と、ちびのミイがいいました。
「そうね、そのうちに巣をうつしてやればいいさ。」
と、ムーミントロールはつぶやきました。
「ふん！　いかにもムーミントロール式だよ。あんたは、巣がすぐにうつされたか、すこしたってからうつされたか、かもにわかると思うの。どっちみちあんたは、良心にとがめられることな

ちゃいかん。おまえは気をらくにして安心しておいで。」
と、ムーミンパパは大声でいいました。
ちびのミイは、戸口のところでふりむいていいました。
「あたいは外でねるから、ベッドはいりませんよ。ベッドってつまんないもの。」
「いいですよ。雨が降りだしたら中へはいっておいで。」
と、ムーミンママはいいました。
　ムーミンママはひとりになると、銀のかなぐつを、戸口の上のくぎにかけました。それから、まどのところへいって外をながめました。ムーミンママはまどをつぎつぎにまわりました。どっちを見ても、海とつばめの鳴き声だけでした。本土はぜんぜん見えませんでした。
　さいごのまどのところで、ムーミンママはけずってないえんぴつ一本と、魚をとる網の修繕につかう糸と、はりをみつけました。ムーミンママは、えんぴつをおもちゃにしながら立っているうちに、なんとなくまどわくの上に小さな花をかいて、葉にきれいにかげをつけはじめました。だからって、とくべつになにも考えてはいなかったのですが。



ムーミンママは、つづいて見てまわりました。——ちゃわんとソースなべをひろいあげたり、あき箱にかいてある字を読んだりしながら。マラガ（スペインにあるぶどうの産地）のほしぶどう、スコットランドのウイスキー、ふつうのフィンランドの乾パンなど。ムーミンママはベッドの上の毛布を持ちあげて、まだその下にシーツがしいてあるのを見ました。でも、つくえをあけてみることはしませんでした。

ほかのものたちは、不安な気持ちでムーミンママを見ていましたが、とうとうムーミンパパがいいました。

「どうだね。」

「この人は、たいへんなさびしがりやだったにちがいないわ。」

と、ムーミンママはいいました。

「うん。だけどおまえは、ここをどう思うかね。」

「けっこうだと思いますよ。あたしたち、みんないっしょにおなじへやに住めますわね。」

と、ムーミンママはいいました。

「うん、そのとおりさ！　わしは浜べから流木を集めてきて、みんなのためにベッドをつくろう。それから道をつくり、桟橋をつくろう。——することはいっぱいあるよ……でも、まず最初に、雨になるばあいのことを考えて、荷物を運びこまなくちゃね。だめ、だめ、おまえは手をだし

気持ちをのびのびとさせるね。まどから外をながめても、おなじように大きく、自由で、のびのびとしてるよ。」

ムーミンパパはムーミンママを見ましたが、ママはわらいながらいいました。

「そうね。ここはぜったいに大きくて、のびのびとしてますわ。」

「ここではだれかがおこって、あばれたんだわ。」

と、ちびのミイは意見をのべました。そこの床には、ガラスのかけらがいちめんにちらばり、その上の白かべには油のしみがありました。しみはかべをつたって床にとどき、ま下に油のたまりをつくっていました。

「だれが、このランプをこわしたのかしら。」

ムーミンママは、テーブルの下にころがっていたしんちゅうのランプ台をみつけて、ひろいあげながらいいました。

「これをともして、まっ暗な中にすわっていたのね。」

ムーミンママはテーブルの上を手でなでました。その表面には、何百、いや何千もの、小さなひっかききずがいちめんについていました。それが六つずつならんでは、七つめは直角にひかれていました。なぜ七つなのでしょう。一週間は七日だからです。毎週毎週がそっくりおなじだったのです。ただ一週間だけ、きずが五つしかないのがありましたけど。

した。
「きれいだこと。なんてすばらしいプレゼントでしょう。こんな小さなうまがいるなんて、わたし知らなかったわ……。」
「おいでよ、ママ。中へはいっていって、てっぺんまでかけのぼろうよ。」
と、ムーミントロールがよびました。
　ムーミンパパは、てっぺんの戸口に、いつもとちがった帽子をかぶって立っていました。やわらかにふちのたれさがった帽子で、上はよれよれでした。
　ムーミンパパはいいました。
「これ、どうだい。ドアの内側のくぎにかかっていたのだよ。これは灯台もりのものだったにちがいない。おはいり、おはいり。なにもかも想像していたとおりなんだ。」
　そこは、大きな円形のへやで、てんじょうは低くて、まどが四つありました。床のまん中に、白木のテーブルと、あき箱がいくつかありました。むこうの暖炉のそばには、ベッドが一つと、小さなつくえが一つあり、鉄のいすがてんじょうのあげ戸へついていていました。ムーミンパパは説明していいました。
「あの上に明かりがあるんだ。夜になったらわしがつけてやる。この白かべはすてきじゃないか。

状に上へ上へとだんだん小さくまきあがっていたのです。パパがほとんど階段をのぼりきったのが、下から見えました。

厚いかべのそこここに明かりとりのまどがあいていて、光がすこしさしこんでいました。どのまどのところにも、鳥がじっとすわって、みんなの方をじいっと見ていました。

「天気がわるいこともかんじょうにいれなくちゃ。お日さまがてっていないと、なんでもいくらか陰気に見えるものだね。」

と、ムーミントロールがささやきました。

「もちろんよ。」

と、ムーミンママはいいました。

ムーミンママは、しきいをまたいだまま、立ちどまりました。中はたいそう寒く、しめっぽくて、あちこちに水たまりがありました。その水たまりと水たまりのあいだの土は、黒々とぬれていて、階段の手前のところには、板が二、三まいしいてあります。ムーミンママは思わずためらいました。

「見て。ぼく、ママにあげるものをみつけたんだよ。」

と、そのときムーミントロールがいいました。

ムーミンママは、銀のかなぐつを手に取って、長いこと見つめていましたが、さいごにいいま

ムーミンパパはもったいぶっていいました。

「さあ、そこんところはよくはわからないがね。世の中には、すばらしいことがいっぱいあるが、それはそれにふさわしい人物にでなくては開かれんのだ。たぶん、わしにかぎをプレゼントしたのは、いちばん大きな、いちばん白いかもめだったかもしれんよ。」

「へえ。絹のリボンにむすんで、軍楽隊つきでね。そうでしょう。」

と、ちびのミイはいいました。

ムーミンパパは、階段をあがっていって、あなにかぎをさしこみました。ギイーッと音をたてて、大きなとびらはゆっくりと開きました。中はまっ暗でした。ちびのミイは、いなずまのようにとびこみましたが、ムーミンパパは髪をつかんでひきもどしました。

「それはいかんぞ。こんどはおまえが一番乗りしてはいかん。いまはわしが灯台もりなんだ。わしが先にはいって下検分をしなくちゃな。」

こういって、ムーミンパパは、ちびのミイをうしろにしたがえて、やみの中に見えなくなりました。

ムーミンママは、おずおずと戸口に近よってきて、中をのぞきました。灯台はくさった木の幹のようにがらんどうで、てっぺんから下まで、貧弱なまわり階段がついていました。その階段はムーミンパパがあがっていくと、いかにもつらそうに、ミシミシガタガタと鳴りながら、らせん

におしつけたとき、その岩のさけめに小さな白い花がさいているのをみつけました。こんなところに花がさいていたのです。おまけに、いちばん大きなさけめの中に、なにか光る赤さび色のものがありました――かぎ、重たい鉄のかぎだったのです。

ムーミンパパの頭の中では、なにかがカチッとはまるような音がしました。これで、なにもかも昼間のようにはっきりとしました。ここが灯台もりが、ほんとうにひとりになりたいときにやってきて、考えごとをする場所だったのです。ここぞ、灯台もりがかぎをおいていって、ムーミンパパにそれをみつけさせ、灯台を受け取らせようとした場所だったのです。こういうりっぱな儀式と魔法の力をとおして、ムーミンパパははじめて灯台の持ち主となり、灯台もりに選ばれたのでした。

「まあ、すばらしい。ではあなたが、それをみつけたというのですね。」

と、ムーミンママはいいました。

「どこにあったの。」

と、ムーミントロールが大声をあげました。



感じました。そこでいそいですわりましたが、それでも下を見ずにはいられませんでした。これは千キロもある深い海でした。うちの桟橋のまわりでさざ波をたてていた海とは、まるでちがいました。

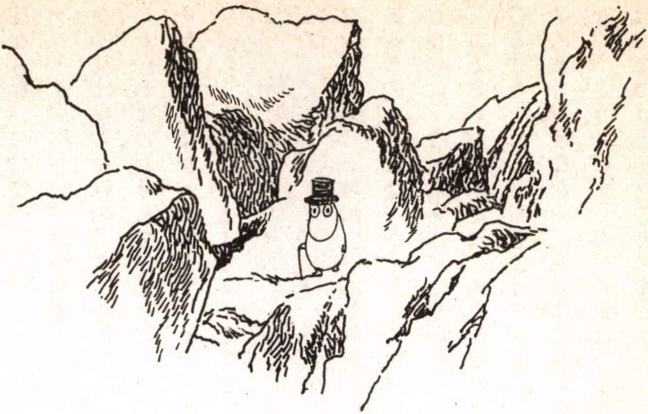
ムーミンパパが、すこしばかり前へのりだしてみると、てっぺんのすぐ下に小さな出っぱりのあるのが目にはいりました。ムーミンパパはごくしぜんに、断崖の表側にあるそのなめらかなたなに、おりてみたくなりました。たなはいすのようにまるくくりぬかれていたのです。とたんにムーミンパパは、まるっきりひとりぼっちに切りはなされたのを感じました。

ムーミンパパのまわりには、空と海しかなかったのです。

ここは灯台もりのすわったところにちがいありません。何度もすわったにちがいありません。

ムーミンパパは目をとじました。ムーミンパパのまわりのすべてのものは、目がまわるほど大きく、頭の中の豆つぶは、前よりももっとひどく鳴りました。灯台もりは、高波がおしよせるとき、ここへきたにちがいありません……荒れもようの空を、風にむかって、かもめが飛ぶのを見たにちがいないし、岩にくだけ散るしぶきが、雪の雲のように目の前にのぼってくるのを、ながめたにちがいありません。小さい真珠のような水の玉が空中にぱっと飛び散って、灯台もりにもかかり、つぎには、下のさかまく黒い水にとびこんでいったにちがいありません……。

ムーミンパパは、ぶるぶるっと身ぶるいしました。ところが、せなかと足をうしろの岩のかべ



灯台もりは、ずっと前、何回となく、ここをのぼったりおりたりしたにちがいありません。そして、ムーミンパパがいまいる断崖の、まさしくそのおなじ場所へきて、海を見おろしたにちがいありません。道はそこでおしまいでした。ここには大きなむなしい海だけしかありませんでした。

ムーミンパパは、がけっぷちまですすんで、見おろしました。断崖はそこできゅうに落ちこんで、その下はけわしい絶壁になり、ずっと深い目のとどかないところまで、ありとあらゆる形の彫刻のようなものが、ごちゃごちゃにかさなりあっていました。その断崖のすそでは、波のくだけるにぶい音がきこえ、水はもりあがったりしずんだりしてきて岩にぶつかっては、みにくい大きなけもののようにして引いていきました。日かげになっている水は、黒々としていました。

ムーミンパパの足はふるえ、すこしばかりめまいを

ばならないのです。
ムーミンパパは、いつも義父がやったように、なにかひらめくような気分になるようにつとめなければならないのです。義母は、しょっちゅう、ものをあっちこっちに落としたり、どこにおいたかわすれたりしていました。そのたんびに義父は、頭の中になにかをひらめかすのでした。それだけでよかったのです。そうすると、いつでもなくなった品物がみつかったのです。そして、
「ほら、これがおまえさんのなくしたがらくただよ。」
というのでしたが、そのいいかたには愛情がこもっていましたっけ。
そこで、ムーミンパパは、そのようにやってみようとしました。パパはぼんやりと岩のあいだをぶらつき、その頭の中になにかひらめかせようとつとめました。しまいには、自分の頭の中にあるものがみんな、かんからの中にある豆つぶみたいに、カラカラと鳴るように感じました。それなのに、なんにも出てこないんです。
ムーミンパパの足は、ふみあとぐらいの細い道をみつけました。日にやけたみじかい草の中をごろごろしている石をよけて、あっちこっちへまがりくねった石ころ道でした。ムーミンパパはその道を歩きながら、頭の中になにかをひらめかせようとつとめているあいだに、こういう考えがふっとうかびました。それは、この道をのぼったりおりたりしたものこそ、きっと灯台もりだったろうということです。

あればの話だけれど……。」
「そういうことをぜんぶするのが、わしの役なんだが。」
と、ムーミンパパはかなしそうにいいました。
「ちょっとのあいだ、がまんおし。なんでもかんでも、きちんと順序をたててしなければいけないんだ。かぎがみつかるまでは、食べものや雨水や、そんなつまらんことに気をつかうわけにはいかないよ。」
「ふん！ あのおいぼれ漁師め、かぎも灯台もりも海へ投げこんでしまったんだな。ほんとうよ。おそろしいことがここでおこったのよ。でも、これからはもっとわるいことがおこるんじゃないかしら。」
と、ちびのミイはいいました。
ムーミンパパは、ため息をついて、灯台をぐるっとまわると、海を見おろせる岩山の方へいきました。そこは、ほかの岩からは見えない場所でした。ムーミンパパだって、ときには家族のものが神経にさわるのです。――なにしろ、みんなはちっともこらえ性がありませんでしたものね。
(――どこの父親もこんなめにあうのだろうか。)
と、ムーミンパパは思いました。そうだ、ひとねむりしてみたって、かぎをさがすヒントも、かぎを作りだすヒントも得られないでしょう。自分の力で、かぎがどこにあるか、かぎだささなけれ

がいになんでも知りつくすか、さもなけりゃ、まるきり関係なしにしたがるものよ。きっと両方だわ。もちつもたれつってとこね。ほんとうよ。こういうことにかけては、あたい、目がきくんだから。」

「雨にならなきゃいいが。」

と、ムーミンママはつぶやきました。

みんなは、ムーミントロールを中にして、輪になって立っていました。太陽が雲の中にかくれたので、いまはひどく寒くなりました。ムーミントロールは、すこしばかり頭がこんがらかってきて、波をながめるために建てられたあの家のことは、みんなに話す気になりませんでした。それに、ここでかなぐつをムーミンママにあげるのは、できない相談でした。いまはみんなが、自分を見つめて立っているのですもの。ムーミントロールは、あとでふたりきりになったときに、それをムーミンママにあげることにしました。

「雨にならなけりゃいいんだけど。」

と、ムーミンママはくりかえしました。ムーミンママは、銅のかんからを石でつくったかまどのところまでもっていって、ムーミンパパが自分のためにつんでくれたはまなでしこを、水にさしながらいいました。

「もしも雨になるなら、雨水を集めるために、水さしを一つあらっておかなくてはね。水さしが

うちに出かけるかもしれないしね。）

　雲が島の上にすすんできました。しずかな青ねず色の雲がならんで空をすすんできて、まっすぐ水平線にむかいました。海岸はさびしくなりました。うちへ帰ろうかなと、ムーミントロールは思いましたが、そのうちというのは、いまでは灯台の前の階段のことになってしまったのです。みんなで住んでいたムーミン谷は、もうずっと遠くになっていました。でもムーミントロールは、うみうまのかなぐつをみつけたので、いくらか気がすみました。

「しかし、漁師がなにもかもわすれたということは、ありえないな。漁師は灯台もりを知っていたにちがいないさ。ふたりはおなじ島に住んでいたんだもの。きっと友だちだったにちがいないよ。」

と、ムーミンパパはもう一度いいました。

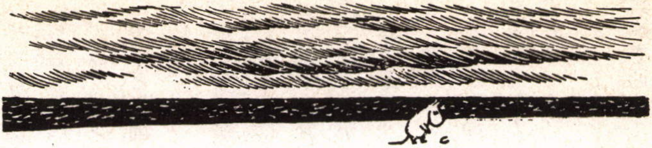
「でも、漁師はなにひとつおぼえていないんだって。」

と、ムーミントロールはいいました。

　ちびのミイは息を鼻からぐうっとすいこんで、シューシュー歯のあいだからはきだしました。

「あの漁師は、ばかなおいぼれで、頭の中には、海草しかつまっていないんだ。あたいには一目見たしゅんかんに、ちゃんとわかったわ。あんなやつがふたりでおなじ島に住むとしたら、おた

（ちょうどこのところで、うまが海にとびこんで、かなぐつを一つ落としたにちがいないぞ。）
そう、ムーミントロールは、大まじめで考えました。
（そうにちがいない。とても小さいうまだよね。これはほんものの銀でできているのかな。それとも、ただの銀めっきかしら、どうだろう。）
ムーミントロールは、かなぐつをひろいあげ、ママにプレゼントすることにきめました。
すこしむこうの方で、ひづめのあとは海から出てきて、まっすぐに海岸の上の方へつづいていました。
（これはうみうまにちがいないな——ぼく、まだ見たことがないけれど、うんと深い、遠くの方の海にしかいないものだとは、きいている。このうみうまくん、うちに予備のかなぐつをもっているといいがなあ。）
こんなことを、ムーミントロールは思いました。
ボートは帆をまきあげ、横だおしにおいてありました——まるでもう二度とふたたび航海に出る気がないみたいに。そして浜べのずっと上まで引きあげられていたので、もう海とは関係がないみたいに見えました。
ムーミントロールはじっと立って、冒険号を見ました。
（かわいそうに。だけど、ボートはねむっているかもしれない。それに、近いうちに、夜、網を



た。まもなく食事になるのでしょう。ムーミンママは、きっと石と石とのあいだで火を燃して、灯台の階段の上に食事をならべることでしょう。そうしたら、たぶん、なにもかもぐあいよくなるでしょうよ。

浜べには、まっ白い砂がいっぱいでした。入り江は一方のみさきからほかのみさきへかけて半月形にのびて、風が島をめぐって風下にむかってはいてくるものを、なんでもかんでもためていました。流木が、はんのきのしげみの下の、満潮のときの線のところにつみあげてありましたが、下の方の砂浜は、からっぽで、みがかれた床のようになめらかで、そこを歩くのはとてもいい気持ちでした。水ぎわづたいに歩くと、足あとは小さなあなになって、そのあなは泉のように、すぐに砂でうずまりました。ムーミントロールは、ママのために貝がらをさがしましたが、みつかったのはみなこわれていました。きっと波に打ちくだかれたのでしょう。

ムーミントロールは、砂の中に貝でないなにか光るものをみつけました。小さな銀のかなぐつでした。すぐそばの砂の上に、うまのひづめのあとがあって、まっすぐに海の中につづいていました。

やっぱりだんまり。空には雲がもっと出てきました。

「灯台もりはいたんでしょう、そうでしょう？」

と、ムーミントロールはききました。

やっと漁師は顔をこちらにむけて、その水のような青い目でムーミントロールを見ると、いいました。

「いいや、かぎのことはおいらなにも知らないよ。」

「灯台もりは、明かりをけしていっちゃったの？」

と、ムーミントロールはつづけました。いまだかつて、ものをきいても返事をしない人なんて、会ったことがありませんでした。ですからこまってしまって、いい気持ちはしませんでした。

「おぼえちゃいないな。灯台もりがどんな人間だったか、わすれちまったよ。」

と、漁師はいいました。

それからゆっくりと起きあがると、灰色でしわだらけの羽みたいに、ふわふわと歩いていってしまいました。この人はとても小さくて、また、だれとも話をする気のまるでない人だったのです。

ムーミントロールは、しばらく漁師を見つめて立っていましたが、それから向きをかえると、砂州を通ってもどりました。それから銅のかんからを取りに、ボートのある浜べの方へいきまし

それは漁師が自分のために建てたものだったのです。漁師はうでをまくらに、あおむけにひっくりかえって、ゆっくりと空を動いていく雲をながめていました。

「おはよう。おじさんはここに住んでるの。」

と、ムーミントロールがきくと、漁師は気がなさそうにこたえました。

「海が荒れてるときだけさ。」

　ムーミントロールは、まじめにうなずきました。海がすきな人なら、こんな住みかたこそ、もってこいでした。くだける波の中にすわり、よせてはかえす山のような高波をながめ、屋根にひびく海の音に耳をかたむけるのです。ムーミントロールはきいてみたくなりました。——たまにはぼく、波を見にきてもいいって。——しかし、この家はあきらかに、たったひとり用に建てられたものでした。

　ムーミントロールはいいました。

「ママがよろしくって。ママが、灯台のかぎのことをきいておいでっていったよ。」

　漁師は、返事をしませんでした。

「パパが、灯台にはいれないんだよ。」

と、ムーミントロールは説明しました。

「そこで、もしかしたら灯台もりがおじさんに……。」

かぐことが、できるようになりました。自分の足で島を感じ、耳を立てて島のいっていることばをきくことができたのです。うなっている海から遠ざかると、島はムーミン谷よりもっとしずかで、まるっきりひっそりしていて、とてもとても古ぼけていたのです。

（この島は、かんたんなことでは友だちになれないぞ。この島はどうやら、そっとしておいてもらいたいらしいな。）

と、こんなふうにムーミントロールは思いました。

ヒースのはえた原が、島の中央のこけのはえた湿地にむかってさがっていて、湿地のむこう側でまたあらわれ、その先は、えぞまつとしらかばの背の低い林の中にきえていました。高い木が一本もないのは、なんだかへんなものでした。なにもかもが、岩をつたってはってでもいるように、地面にくっついてはえていました。ムーミントロールは、ふと思いました——。

（ぼくも、できるだけ小さくならなくてはいけないんじゃないかな。）

それからかれは、みさきにむかって走りだしました。島の西のはずれに、石とセメントでできた、小さな家が建っていました。家はいく本ものかすがいで、岩にしっかりと取りつけられていました。家のうしろは、あざらしの背のようにまるい、小さなじょうぶなまどガラスごしに、いきなり海にむいていました。

その家はとても小さくて、ふつうの大きさの人間なら、ひとりがやっとすわれるだけでした。

『わすれられた骨のふくしゅう』を思いだしたけど、あれはたのしい本だったわ。」
しばらくはみんなだまって立っていました。

「これからどうするの。」

と、ムーミントロールはききました。

「わたしはね、ゆうべ会った、あの漁師のことを考えていたの。あの人はこの島のどこかに住んでいるにちがいないわ。あの人がなにか知っているかもしれないよ。」

と、ムーミンママはいいました。

それからムーミンママは、ふとんのはいったふくろをあけて、赤い毛布をとりだしました。

「パパにこれをかけておあげ。あんなにして、岩の上にねむるのはよくないわ。それから、おまえは、島をめぐって漁師をさがしたらいいわ。帰りには海の水をすこしくんできてちょうだい、いい子だから。ボートの中に銅のかんからがありますよ。それからおじゃがもね。」

からだを動かして、なにかするのはいいことです。ムーミントロールはとびらのあかない灯台をあとにして、島をななめにつっきって歩きまわりました。赤いヒースがスロープをおおい、下の方の岩はあたたかくて、すべすべしていました。土はかたく、熱くて、いいにおいがしましたが、うちの庭とはにていませんでした。

ムーミントロールは、いまは、ひとりきりになったので、ちゃんと島を見たり、島のにおいを

なかの中まで気がめいっていって、考えをまとめることができませんでした。かぎの場所としては、くぎか階段の下かのほかには考えられませんでした。とびらのわくもないし、出まどもないし、階段の前にはたいらな石もありません。どこもかしこもつるつるして、むきだしでした。
ムーミンパパの頭は、だんだんつかれてきました。自分のうしろに家族のものたちが立って、ムーミンパパがなにかいうのをだまって待っていることは、知っていました。とうとうムーミンパパは、かたごしによびかけました。
「わしはしばらくねむるよ。ちょいちょい、ねむっているあいだに、問題がしぜんにとけることがあるものな。頭はほったらかしておくと、よくはたらくものなんだ。」
それからムーミンパパは、岩のさけめにからだをまるめこんで、帽子を目の上に引きさげると、ふかいふかい安心感にひたって、ねむりにおちていったのです。
ムーミントロールは、階段の下へいって、さがしてみました。
「なんだ、鳥の死がいのほかには、なにもないや。」
それは小さな、まっ白い、かぼそい骨でした。ムーミントロールが、その骨を階段の上にのせると、すぐに風が岩の方にふきとばしてしまいました。
「あたい、下の方のヒースの中で、そんなのならいくらも見たわ。」
と、ちびのミイは、すぐにいいました。

ムーミンパパはふりかえって、ぽかんとしてちびのミイを見つめました。
「かぎがかかっているの。おまけにかぎはないのよ。」
と、ちびのミイはくりかえしました。
ムーミンパパはとびらをひっぱりました。つぎにはひねったり、まわしたり、ノックしたり、けったりまでしました。とうとうムーミンパパは、一歩さがってとびらを見ていましたが、そのうちにいいました。
「ここにくぎがある。あきらかにかぎをぶらさげるくぎだ。だれだってわかるさ。とびらにかぎをかけて、そのかぎをきちんとくぎにぶらさげておかない人なんて、わしはきいたことがないな。まして灯台もりともあろうものが……。」
「もしかすると、階段の下にあるかもしれないよ。」
と、ムーミントロールがいいました。
「さあ、みんな、しずかにおし、じっとしずかに。ちょっと考えてみにゃならん。」
階段の下にもかぎはありませんでした。
ムーミンパパは、ちょっとはなれた岩のところへいって、海の方へ鼻をむけてすわりました。
いまではあたたかな日になって、南西の風がそよそよと島の上をふいていました。灯台を占領するには、もってこいの日でした。ところが、ムーミンパパは、あんまりがっかりしたため、お

です――コンクリートの重い足にささえられて。

「ようこそわが家へ。」

と、ムーミンパパはいいました。

三人はしずしずと灯台へ目をむけました。高く、ますます高く――ばかでかい白い灯台は、永久にそこにあるように思われました。ただただ信じがたいほどでした。灯台のま上には、おどろいたつばめが雲のようになって、前へうしろへ、目がくらむほどのはやさで飛んでいました。

「わたし、すこし船によったらしいわ。」

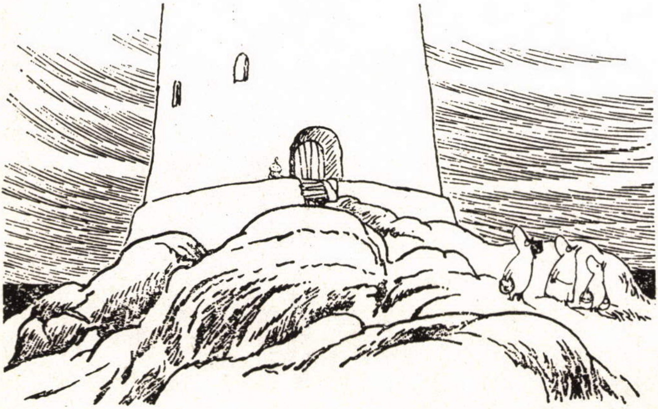
と、ムーミンママはよわよわしくいいました。

ムーミントロールは、ムーミンパパを見あげました。

ムーミンパパは威厳をつけて灯台の階段をのぼっていって、とびらをあけようと前足をあげました。

「かぎがかかっているわよ。」

と、ムーミンパパのうしろでちびのミイがいいました。



昼間の島は夜とはちがって、ムーミン一家に知らん顔をして、背をむけているように思われました。あたたかい夜のあいだは、みんなの方をむいていましたけれど、昼は海のむこうの方をむいているのでした。

「さあ、どうぞ。とても小さい花だけど、お日さまにあてたらちゃんと開くだろうよ。」

と、ムーミンパパはいいました。

「さあ、先へすすもう。そのうちに、浜べから家へあがるちゃんとした道ができるだろう。ボート用の桟橋もできようさ。やることがいくらでもあるぞ。考えてごらん。生活を建設し、島をすばらしい奇跡の島にかえることを想像してごらんよ。」

ムーミンパパはバスケットをとりあげると、先頭に立ってヒースの中をぬけ、灯台の方へいそぎました。

三人の前には、古い岩がごろごろしたきゅうな斜面がありました。みんなは、灰色のさけめや切れめをのりこえのりこえ、いくどもころんだりしながら、がけ道をよじのぼりました。

(ここではなんでもが大きいのね。それともあたしが小さすぎるのかしら。)

と、ムーミンママは思いました。

たった一本ある小道は、ムーミンママみたいに小さく、たよりない道でした。三人はいっしょに、はうように石の道をすすんで、やっと岩山にたどりつきました。そこに灯台は立っていたの

と、ムーミンママがききました。
「だめ、だめ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「おまえは、一品だって持っちゃいけない。おまえがすることは、おまえのあたらしいうちへ、まっすぐ歩いていけばいいのだ。——だが待てよ、おまえはなにか花を持たなくちゃいけないね。——ちょっとお待ち……。」
そういって、ムーミンパパはポプラの木のあいだにすがたをけすと、花をつみだしました。
ムーミンママはあたりを見まわしました。土はなんとやせているんでしょう。島は石だらけで、どこもここも石の山でした。ここに庭をつくるのは、たしかにやさしいことではなさそうです。
「なんてさびしい音だろう。ママ、なんだろうね。」
と、ムーミントロールがいいました。
ムーミンママは、きき耳をたてました。
「そうね。かなしそうな音ね。けれどあれはただのポプラよ。ポプラはいつもあんな音をだすんだわ。」
ふきっさらしの小石のあいだにはえていたポプラの木の葉が、海へむかってふくそよ風に鳴っていたのです。葉っぱは、はげしくふるえ、木は何度も何度も、風に全身をふるわせました。

ちびのミイのずっと下の方に、小さなありみたいに家族のみんながかたまっていました。ムーミンパパとムーミントロールが、持てるだけの荷物を持ってよたよたと、はんのきのしげみから出てきて、灯台のかげの中へはいりました。かげの中では三人はいっそう小さく見えました。三人は立ちどまりました。小さな白い三つの点が、鼻を上の方へむけて、見あげました。

「まあ、なんて大きいんでしょう。」

ムーミンママはこういって、その場所を動きませんでした。

「大きいって?」

と、ムーミンパパはさけびました。

「こういうのは巨大というんだ。これはいままで建った中でいちばん大きな灯台だろうな。これがさいごのさいごの島だということが、おまえたちには信じられるかね。このむこうには、だれも住んでいないんだ。海のほかにはなにもないのさ。われわれは、いわば海に面とむかっているんだ。人間が住んでいるのは、われわれよりはるかうしろの方の、本土にずっと近い島の上さ。すばらしいじゃないか。そう思わないかい。」

「うん、すばらしいね。パパ。」

と、ムーミントロールもさけびました。

「ちょっとのあいだ、わたしがバスケットを持ってはいけないかしら。」

そしてあれを、わしの家族にプレゼントするんだ——こんなふうにいってさ。「これが、おまえたちのこれからのすまいだよ。この中にぶじにはいったら、もう、どんな危険もやってこないよ。」ってね。）

ちびのミイは、灯台の階段にこしかけて、夜が明けるのを見ていました。目の下には、うす明かりの中に島が横たわっていました。ちょうど大きな灰色のねこがねそべって、つめをむきだしているようなかっこうです。両足は海の中につけて、しっぽはみさきとして、島のむこうはしまで細長くのばしていました。そのねこのせなかは、毛がさかだっていましたが、目はどこにも見えませんでした。

ちびのミイはいいました。

「ははん……これはふつうの島ではないな。ほかの島とはまるでちがって、海の底までつづいているんだ。ここでは指きりをしてもいいけど、きっとなにか事件がおきるわよ。」

ちびのミイは身をちぢめて待ちました。太陽が海の上にのぼると、かげと色とがあらわれてきました。島は形をとりはじめ、そのつめをひっこめました。すべてのものが光りかがやき、みさきの上では、チョーク色のかもめが輪をかきました。ねこはきえましたが、幅の広い黒いリボンのような灯台のかげが、島をまっすぐに横ぎって、ボートのある浜べまでのびていました。

灯台はついにあったのです。灰色の空を背景にした、大きな黒い灯台でした。灯台は、ムーミンパパが想像していたよりも、はるかに大きかったのです。ひとりぼっちで夜どおし起きていると、朝の最初の光を見て気がよわくなり、なんでもかんでもがこわく見えるものですが、いまもちょうどそんなふうでしたっけ。

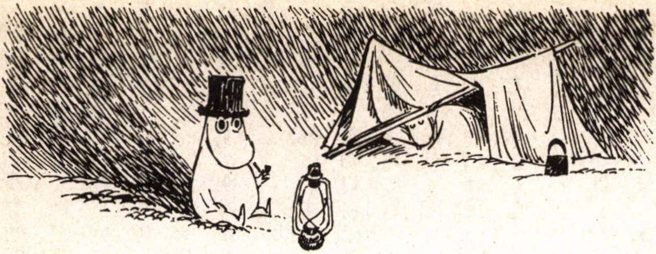
ムーミンパパはカンテラをけして、海岸を見えなくしました。灯台に見られるのが、まだいやだったのです。明けがたの寒い風が海からふいてきて、島の反対側のどこかでかもめの鳴くのがきこえました。

こうして浜べにすわっていると、灯台はムーミンパパの上にいよいよ高くせりあがるように見えました。その灯台は、ムーミンパパがつくりかけのままにしてしまった模型とそっくりでした。でも、そのうちにムーミンパパは、屋根が思ったほどとがっていないこと、手すりのないことに気がつきました。

ムーミンパパは長いこと、人けのない暗い灯台を、じっとながめていました。すると、灯台はだんだんに小さくなって、ムーミンパパが長いあいだ心の中にえがいていた想像図に、近づいてきました。

ムーミンパパは、パイプに火をつけて考えました——。

（なんてったって、あれはわしのものだぞ。どうしたってあの灯台は、わしのものにしてやるぞ。



ということでした。ムーミンママは、だいじなハンドバッグさえ、砂の上におきっぱなしにしていました。それにはすこしあきれましたが、同時に元気づけられもしました。こうなれば、ほんとうに生まれかわったのであって、ただの冒険ではありませんからね。

ムーミントロールは、鼻をもちあげて、帆布の下から外をのぞいてみました。見ると、ムーミンパパがカンテラを前において、すわって番をしていました。ムーミンパパのかげはとても大きく長くて、ムーミンパパのからだそのものも、ふだんよりもずっと大きく思えました。ムーミントロールは、また、ボールのようにまるまると、足をあたたかいおなかの下にいれて、夢の中にはいりました。夢は、ちょうど、その晩の海のように、青々とゆれていました。

だんだんと朝になりました。ムーミンパパは、自分の島とふたりきりでした。一時間すぎるごとに、島はたしかに自分のものだという感じがつよくなりました。空がうす明るくなって、岩が大きなでこぼこのかたまりとなって、目の前に立ちはだかると、その岩の上に、灯台が見えました。

「そりゃ、貝はあるでしょうよ。しかも大きなめずらしい貝で、海のむこうにしかないようなものでしょうよ。」

ムーミンパパはいいました。

「さあ、おいで。おまえたちみんなが、まずしなければならないのはねむることだぜ。わしは一晩じゅう、外で番をするから、おまえたちはなんにもこわがることはないさ。あすの晩は、おまえたちはわしの灯台でねむれるだろう。なぜ明かりがついてないのか、わかりさえすればなあ……。テントの中はきれいでいごこちがいいかい。」

「すばらしいわ。」

帆布の下にもぐりこみながら、ムーミンママはいいました。

ちびのミイは、例によって、かってにどっかへいってしまいました。かまわなくてもいいのです。この子は、家族の中でもいちばんちゃっかりやですから、すべてうまくやっていることでしょう。

ムーミントロールは、ムーミンママがしめったマットの上で一、二度ねがえりをして、からだに合った場所をみつけると、それから小さなため息をついてねいるまで、じっと見まもっていました。ふしぎなことのうちでもいちばんふしぎだったのは、ムーミンママが、このあたらしい場所で、荷物もとかず、みんなのベッドもつくらず、みんなに寝しなのお菓子もやらずにねむれた

するのに大いそがしでした。カンテラの光の輪は、白い砂と黒い水をてらしています。その輪の外は暗やみだけで、なにもありません。ムーミンパパとムーミントロールは、マットを海岸にひきずりおろしましたが、かどがぬれたのはしようがありませんでした。ボートは横にかたむき、青いトランクがばらの木をボートの横におしつけました。

ムーミンママは、前足で鼻をおさえてすわっていました。すべてはちゃんとはこんでいるのでしょう。そのうちには、ママはせわをやかれるのになれるでしょう。ひょっとすると、かえってそのほうがすきになるかもしれません。いまでさえ、かのじょは一分か二分のあいだ、とろとろっとしました。

ムーミンパパは、カンテラをもって水の中に立って、ムーミンママにむかっていいました。

「もう、おりてきてもいいよ。用意はぜんぶできたから。」

ムーミンパパはうれしくてたまらず、ちっともねむくないというようすで、帽子をあみだにかぶっていました。

海岸の高い方に、ムーミンパパは帆布とオールでテントをはりました。まるで、大きなけものがうずくまっているような形でした。ムーミンママは、このあたらしい海岸に、貝があるかどうか見たいと思いましたが、まだ暗すぎてだめでした。みんなは、ムーミンママにいってきかせました。

ボートが砂浜につっこんでとまったとき、みんなは島の熱い息を感じることができました。みんなは見られているのを感じ、一かたまりになって動こうとしませんでした。

「あれをきいた？　ママ。」

と、ムーミントロールが小声でいいました。

波打ちぎわで足早にひづめの音がして、すこしばかり水をはねとばしましたが、またすべてがしずかになりました。

「あれはちびのミイが、浜にあがっただけのことですよ。」

こう、ムーミンママはいってから、しずけさをふりおとすように、身ぶるいをすると、バスケットの中をかきまわして、ばらを植えた土の箱を、さっそくボートの横におろそうとしはじめました。

ムーミンパパが、いらいらしていいました。

「まあ、おちつきなさい。こんなことはわしがしてやるよ。なんでもものごとは、はじめからきちんと整理してかかるべきだ。まずボートだ。ボートは、いつだっていちばんたいせつなものなのだ……。おまえはじっとすわってなにもするな、安心していなさい。」

ムーミンママは、すなおにすわりこんで、帆布がおりてきて、横木が前後にゆれるときに、帆布にまきこまれないように気をつけました。そのあいだ、ムーミンパパはボートの中をせいとん

「わからないね、ほんとうに……おもどり……遠くまできすぎたよ……。」
男はみんなのきた方角に見えなくなりました。みんなはオールの音にきき耳をたてましたが、まもなくなにもきこえないしずかな夜となりました。
「あの男はすこしへんだな。そうじゃないか。」
と、ムーミンパパは自信なさそうにいいました。
「とてもへんよ、そういわれれば。くるくるぱあよ。」
と、ちびのミイがいいました。
ムーミンママはため息をついて、足をのばしながらいいました。
「だけど、わたしたちの知っている人たちって、たいていあんなものよ。多かれ少なかれ。」
風がおちました。ムーミンパパは鼻をおっ立ててかじのところにかっこよくすわっていましたが、こういいました。
「さあ、ついたような気がするぞ。島の風下にきたようだ。だけど、どうして灯台がついていないのか、それがてんがいかないな。」
大気はあたたかく、ヒースのにおいがいっぱいで、なにもかもしずかでした。そうした夜の中から、大きなかげがぼうっとあらわれました。島がみんなの目の前にそびえ立っていて、こちらを注意ぶかく見ていたのでした。

な灰色のボートでした。こいでいた男はオールを休めると、すました顔でみんなをながめました。男はひどくむさくるしかったけれど、おだやかな人がらに見えました。明かりは、男の水のようにすんだ大きな青い目をてらしました。男のボートのへさきには、つりざおがついていました。
「魚は夜でもくいつきますか。」
と、ムーミンパパがたずねました。
漁師はこっちをむいてみんなを見て、それからまっすぐにむいてしまいました——ものをいおうともしないで。
「ここの近くに、どこかに大きな灯台のある島がないでしょうか。」
と、ムーミンパパはつづけました。
「なぜ、明かりがついていないのでしょうか。とっくに見えていいはずなんですが。」
漁師のボートは、だまってそばを通りすぎていきましたが、さいごになにかいったのが、かろうじてみんなにきこえました。



るさ。ぜったいにたしかなもの——そういうものだってあるはずだよ。たとえば、海の潮流とか、季節のめぐりとか、日の出とかさ。あの灯台だって、かならずついているよ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「まもなく見えてくるでしょうよ。」
と、ムーミンママはいいました。ムーミンママの頭の中には、ごっちゃな小さな考えがいっぱいつまっていて、まとめることはできませんでした。
（灯台がついていることをいのるわ……パパはあんなにうれしそうなんだもの、どこかそのへんに、ほんとうに灯台があることをいのるわ。もし、はえのふんしかなかったら、どうしましょう。わたしたちは、もうもとへはもどれないのよ。とりわけあんなどうどうとした出発をしたあとですもの……。きっと大きなピンクの貝がらが、あそこにはあるかもしれない。でも黒い土には白い貝のほうがうつりがいいわね。あそこではばらが育つかどうか……。）
と、ムーミンママは思いました。
「しいっ。なんだかきこえるわよ。みんなしずかに！　なにか事件がおきそうよ。」
と、ちびのミイが船のへさきからどなりました。
　みんなは鼻をもたげて、やみの中を見つめました。オールの音がみんなの耳にもきこえてきました。見知らぬボートがやみの中からすべりでてきて、ぐんぐん近づいてきます。それは、小さ

雪の雲をまいあがらせながら。
水平線を背景にしたモランは、よろめく巨大なこうもりのように見えました。すすみかたがのろくて、いかにも重たそうでしたけれど、どうやらすすむことはすすむのでした。かのじょには、ほかになにも持っているものはなかったけれど、時間はいくらでもありましたからね。
家族はまる一晩とつぎの一日、旅をつづけて、また夜になりました。ムーミンパパは、まだかじのところにじっとすわって、自分の灯台が見えてくるのを待っていました。けれども、夜はただ深い青い色をしているだけで、水平線に光を投げる灯台は、いつまでたってもあらわれませんでした。
ムーミンパパはいいました。
「コースは正しいはずだ。方向感覚がくるっていないことは、わしが知っている。この風だと、夜中までにはあそこへつくはずなのだ。暗くなりだしたころから、灯台が見えなけりゃならなかったんだがなあ。」
「だれかいたずらして、けしちまったのかもしれないわよ。」
と、ちびのミイがほのめかしました。
「だれかが灯台をけすなんてことが、ありうると思うかね。灯台はちゃんとついてるにきまって



はねむっていました。ムーミンパパは、やっと家族と水いらずになったのでした。ムーミンパパは、目がさえていました。これまでに一度もなかったほど、はっきりと目がさえていました。

明けがたちかくなって、ずっと遠くの方では、モランが自分も出発することにしました。モランのすわっている島は黒くすきとおって、するどい氷の先が南をさしていました。浜の砂はかのじょをさけるようにして、流れ去っていきました。モランは、その黒いスカートをたぐりよせて、かれたばらのはっぱみたいにまわりにたらしました。すると、スカートは、サラサラと音をたてて開いて、つばさのようにもちあがりました。こうして、モランの海をこえる旅が、ゆっくりとはじまったのでした。

モランはそのスカートを、水泳のスローストロークみたいに、上へむけ、外へむけ、下にむけて、こおった空中で動かしました。水は、おどろきおののいて、波となってひいていきましたので、モランは明けがたの海をしずかにただよいながらすすんでいきました。うしろに

「いまはいらないよ。あいつはちょうど魚のような、黄色いガラスの目をしていたよ。あいつと話ができるかしら。」

と、ムーミントロールはいいました。ムーミンママは、ため息をついていいました。

「モランと話をしてはいけないし、あの人のことを話してもいけないのよ。でないと、あの人はもっともっと大きくなって、追いかけてくるんです。それに、あの人をきのどくがることはないんだよ。おまえは、あの人がなんでも明るいものをこいしがっていると思っているようだけれど、あの人がほんとうにやりたいのは、明かりの上にすわって火をけし、二度とふたたび燃えないようにすることなのよ。さあ、しばらくねむれるといいわね。」

空には、おぼろな秋の星があらわれてきました。ムーミントロールはあおむけになってカンテラを見ながら、モランのことを考えつづけました。モランに、話しかけてやってもいけないし、また、モランのことを話してもいけないというようなものだとしたら、だんだんにきえてなくなるはずです。モラン自身、生きていようと考えることさえできなくなるわけです。

ムーミントロールは、この問題をとくのには、鏡が役にたつかもしれないと思いました。たくさんたくさんの鏡をもってくれば、ひとりの人が何人にもなることができます。そうすれば、その人たちがおたがいに話をすることもできるかもしれません。もしかしたらね……。

あたりは、なにもかもしずかで、かじがおだやかにきしむ音をたてているだけでした。みんな

と、ムーミンママは船底に小さくからだをまるめたままでいいました。
「とてもいい経験ですわ。」
毛布がすこしぬれてしまったので、ムーミンママはそっとからだを風下の方にずらせました。
それに船べりがどうしてもムーミンママの目の前に立ちふさがるからでした。
ちびのミイは、ボートのへさきにすわって、つまらなそうに小声でハミングしていました。
「ママ、あいつはどうしてあんないじわるになったの。」
と、ムーミントロールがききました。
「だれのこと。」
「モランさ。だれかがなにかしたために、それであんなにわるくなったのかしら。」
「そんなことがわかるものですか。」
と、ムーミンママはいいながら、しっぽを水から引きあげました。
「むしろ、だれもなにもしなかったからでしょうね。だれもあの人のことは気にかけないという意味よ。あの人自身もそんなことはおぼえているとも思われないし、自分でもあれこれ考えはしまいと思うわ。あの人は、雨か暗やみのようなものか、でなければ、通りすがりによけて通らなければならない石のようなものよ。コーヒー飲みたい？　白いバスケットの中の魔法びんにいくらかあってよ。」

ムーミンパパは、ボートのかじをとりました。ムーミンパパは自分とボートが、おたがいに理解しあっているのを感じながら、片方の手にしっかりとかじをにぎっていました。ムーミンパパは、すっかりそんな自分に満足していました。

家族は水晶玉の中にあらわれたときのようにちっぽけで、たよりなく見えました。ムーミンパパはこのしずかな青い夜、広い大洋をぬけて、みんなを安全に案内しているのです。カンテラが道をてらしているところは、まるでムーミンパパが、地図の上にはっきりとした線をひいて、こんなことをいっているように見えました。（ここからあそこへ……あそこがわれわれの住もうとしているところなんだ。そこでは、わしの灯台が世の中の中心となるだろう。灯台は、大洋の危険を足の下にふんまえて、ほこらかにそびえるのだ。）

「おまえたち、寒くはないかね。」

と、ムーミンパパはうれしそうにどなると、つぎにはムーミンママにいいました。

「おまえ、毛布にくるまっているかね。ごらん、いま、さいごの島を通りすぎたんだよ。まもなく夜のうちでもいちばん暗くなるときがくる。夜の航海はとてもむずかしいんだ。いっしゅんも見張りをおこたってはいけないからね。」

「ええ、あなた。」

ごの島をすべるように通りすぎて、大洋へむかって遠くへ遠くへとたえず動いていきました。
モランは長いあいだ、それをながめていました。いそぐということを知らないからです。モランにとっては、時間はいつまでもおわりがなく、とてものろのろとすぎていくものでしたから、秋が近づくとランプがともされるだけのことで、時間はモランにとっては、なんの意味も持たないのです。

モランは、谷から海岸の方へゆっくりといざっていきました。そのあとには大きな形のない足あとがのこりましたが、それはちょうどあざらしが水ぎわにつけるあとのようなものでした。かのじょが近づくと、波はひいてしまい、どうしていいかわからないようにとまどっていました。水は、モランのスカートの黒いすそのまわりで、しずかになって、こおりはじめました。

長いあいだ、モランはそこに立っていましたが、そのあいだにこおった霧の雲がまわりにたちこめました。ときたまかのじょがしずかに片足をあげると、氷が音をたててだんだん厚くなりました。モランは、カンテラのところまでいきつこうとして、氷の島をつくっていたのです。

カンテラは、いまは島のかげになって見えませんでしたが、どこかそのへんにあることはわかっていました。もしもカンテラが、自分がそこまでいきつくまでにきえてしまったら、それはしかたがありません。そしたら、待つだけのことです。いつかまた、晩になればみんなはべつのランプをともすでしょう。みんなはいつも、おそかれ早かれそうするのですから。

「きれいだこと。しかし、きれいだけれど、ちょっとばかりおかしいわ。いまわたしに考えるよゆうがでてきてみると、これはたしかにふしぎなことだわ。ところで、パパはわたしがボートの中ですこしばかりねむったら、気にかけるかしら。」

と、ムーミンママはひとりごとをいいました。

太陽がしずんでからモランは、庭からこっそりはいってきましたが、今夜はベランダにランプはついていませんでした。カーテンがひかれ、水をいれるたるはさかさにしてありました。かぎは戸口の上のくぎにさがっていました。

モランは人のいない家にはなれていましたから、いくら待ってもだれもランプをともしにきはしないと、すぐさとりました。そこでそろそろとあともどりをして、海べのスロープまできました。いっしゅん、水晶玉はモランのすがたをとらえましたが、そのあとはまたいつものとおり、うそみたいな深い青色だけになりました。モランが近づくと、森はこわがって息をつめ、こけの下からはふしぎな小さい音がきかれ、えだはおどろいて鳴り、小さな目の光がほうぼうからきえました。でもモランは、こういうことにはなれていましたから、立ちどまることもなく、南の海岸が見わたせるがけのてっぺんまでのぼりつめて、暗くなっていく海を見つめました。

かのじょは冒険号のマストの先のカンテラを、はっきりとみとめました。その一つ星は、さい

うことのなかった感覚でした。われわれの祖先は、正しいコースをみつけるについては、なにもしんぱいすることはなく、ひとりでにわかったのでした。ざんねんなことに、その本能は、使わないでいると、よわってしまうものなんです。

しばらくしてムーミンパパは、たしかに正しいコースをみつけたと感じました。こうしてどっちへいくかがわかったので、いよいよ船を出すことができました。ムーミンパパは帽子をまっすぐにかぶっていいました。

「出発！　しかしおまえはなんにも持たなくていいよ。われわれで重労働はみんなするから。おまえはただ船にのりさえすればいいんだ。」

ムーミンママはうなずいて、なんかくたびれたように足をひきずって歩きました。海はむらさき色にかわり、海岸ぞいの森の線は、やわらかい黒い色に見えました。ムーミンママはひどくねむくて、きゅうになにもかもが現実でないような気になりました。なんだか、重たい重たい砂の中を、あてもなく歩いているふしぎな夢をみている感じでした。

ほかのものたちは、桟橋の上で荷物を船につみこんでいました。カンテラは右に左にゆれ、夕がたの空にうきでた、桟橋と水あび小屋のシルエットは、とげだらけの大きな竜のように思えました。ムーミンママの耳には、ちびのミイのわらい声もきこえましたし、うしろの森の中でまだ起きていた鳥のさけび声もきこえました。

さんの品物が必要なのです。

しかし、いまはもちろん事情がちがいます。いまかんじんなのは、みんながまるきりあたらしい生活をはじめることなんですから、ムーミンパパがみんなの必要なものはなにもかもととのえてやり、みんなを食べさせたり、みんなをまもったりすべきだというのでした。いままでは、みんなのくらしが、あんまりらくすぎたのにちがいありません。

ムーミンママは思いました。

(おかしいわ。くらしがうまくいきすぎるからといって、かなしんだり、ましてはらをたてるなんて、おかしいわ。だけど、そうなんだからしかたないわ。かんじんなことはただひとつ、生活をあたらしくはじめることね。)

それから、ムーミンママはいいました。

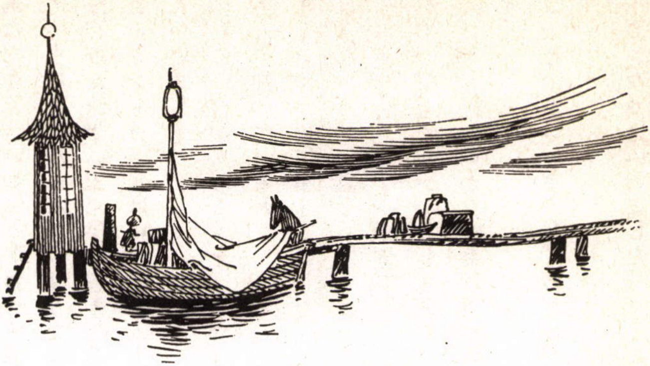
「もうこれだけ暗ければいいんじゃありませんか? あなたのカンテラが、ほんとうにきれいに空にうきでていること。あたしたち、もう出発してもよくはないかしら。」

「ちょっとお待ち。方向をたしかめなくてはね。」

こういってムーミンパパは、地図を砂の上にひろげると、海の上にぽっちりとうかんだ、ただひとつの島を見つめました——ひどくしんけんな顔で。それからムーミンパパは、しばらくくんくんと風のにおいをかいで、方向をさぐっていました。それは、ムーミンパパが長いあいだ、使

いるところでした。
「もちろん、今夜は無風になるおそれがあるかもしれないぞ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「昼飯後すぐに出発することもできたんだけれども、このようなばあいには、日の入りを待たなければいけないのだ。順序正しくはじめるということが、本は第一行からはじまるとおなじように、たいせつなことだからね。万事がそれでできまるんだよ。」
それから、ムーミンパパは、ムーミンママとならんで砂の上にすわっていいました。
「ボートをごらん。ぼくらの冒険号をさ。夜見るボートはすてきだろ。これが新生活をスタートさせるやりかただ。マストの先にかがやくカンテラ、世界じゅうがねているあいだに、海岸線が遠ざかって見えなくなる。夜、旅をするのは世界のなによりもすてきなことだよ。」
「ええそうですとも。ハイキングなら、昼間してもいいけど、ほんとの旅に出るのは夜ですわ。」
と、ムーミンママはこたえました。
ムーミンママは荷造りのあげくだいぶつかれていて、なにかだいじなことをわすれてはいないかと、すこし気になっていました。荷物はみんな桟橋につんであり、見たところはひどくたくさんあるようでしたけれども、荷物をほどいたらどんなにちょっぴりだか、ムーミンママはよく知っていました。家族の全体が、たった一日でもちゃんとした生活をするためには、すごくたく

第 2 章



灯台

みんながいよいよ出発するというもっとも重大なその晩に、風向きは東にかわりました。風は十二時をすぎるとまもなくふきだしたのですが、日がしずんでからでなくては、出発しないことにきめていました。

海はあたたかく、深い青色は水晶玉の中の青のようでした。桟橋には荷物がうずたかくつまれ、船がつながれていた水あび小屋のところまでいっぱいでした。船は上下にゆれ、帆はまきあげてあり、カンテラがマストの先にともっていました。浜べは、だんだん暗くなってきました。ムーミントロールはちょうど、いけすとトロッコを満潮線の上にひきあげて

ようにあたたかく、いつもとかわらず美しく――ムーミンママは、なにもしないで階段にこしをおろしていました。なんだかみょうなようすでした。

「けさは、みんなずいぶん早く起きたんだね。」

　こうムーミントロールはいって、ムーミンママのそばへきてこしかけると、太陽の方へ目をむけながらいいました。

「パパの島に灯台があることを、ママは知ってる？」

「もちろん、知っているわ。」

と、ムーミンママは返事をしました。

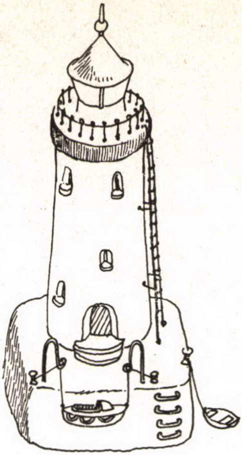
「パパは夏じゅうその話をしていましたもの。おまけにわたしたちはそこに住むようになるのよ。」

　話すべきことがいっぱいありすぎて、なにひとつ話せませんでした。階段にこしかけていると、あたたかで、なんでもかんでもうまくいっているように思えました。

　ムーミンパパは「いかりをあげて」のくちぶえをふきだしました。なにかいいことがあったのでしょう。

「すぐコーヒーをいれますわ。わたし、ここにちょっとすわって、お日さまの光をたのしんでいたの。」

と、ムーミンママはいいました。



せるようにするんでしょ。」
と、ムーミントロールはいいました。
「もちろん、光らせることはできるさ。」
と、ムーミンパパは灯台の正面入り口に、小さな階段をきざみながらいいました。
「でも、いまはひまがないんでな。ほんとういえば、これはただのおもちゃさ。ただためしにこしらえてみただけだよ。」
　こう、ムーミンパパはすこしはずかしそうにわらって、自分の道具箱をかきまわしはじめました。
「すてきだなあ！　じゃまたね。」
と、ムーミントロールがいいました。
「さよなら。」
と、ムーミンパパもいいました。
　かげはいまではずっとみじかくなっていました。あたらしい日がはじまっていたのです。いつもの

むちゅうになっていたのでした。
「この鉄のかすがいをごらん。これを岩にうちこんでおいて、灯台へのぼるのだよ。天気が悪いと、うんと気をつけなければならない。わかるかい。ボートは波がしらにのって、岩の方へ持っていかれるからね。そのときぱっと岩にとびうつって、しっかりとこれにつかまってよじのぼるんだ。そのあいだに、ボートは波にのってはなれる……つぎの波がきてももうだいじょうぶだ。それから風とたたかってのぼっていって、この手すりをつかまえる。そして、とびらをあけるのだが、このとびらは重いぞ。それからとびらがうしろでパタンとしまる。おまえは灯台の中にはいったのだ。厚いかべをとおして、海のうなりが遠くにきこえる。ぐるりの外界で波がうなり、ボートはすでに遠くへいってしまっている。」
と、ムーミンパパはいいました。ムーミントロールはききました。
「ぼくたちもこの灯台の中にいるの？」
「もちろんさ。おまえたちはここの塔の中にいるんだ。ごらん、どのまどもほんもののガラスだよ。明かりはてっぺんにあって、色は赤と緑と白なのだ。それが一晩じゅう、規則的に間をおいて光るんで、通る船は自分がどこにいるかわかるんだよ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「その中にほんとの明かりを入れるつもり？　きっと乾電池を下に入れて、ぴかっぴかっと光ら

プのすぐ近くまでやってきたのでした。おかげで、明かりはきえてしまいました。いつもそうですが、モランがさわったものは、すぐに死んでしまうのです。

ムーミントロールは、自分がモランだったらと空想して、かれ葉のつもった中を、せなかをまるめてのそりのそりと歩きました。かれは、自分のまわりに霧がひろがるのを待って、じっと立っていました。それからため息をついて、まどの方をうらやましそうに見つめました。かれはいまや世界じゅうでひとりぼっちでした。

しかし、いまはランプがないため、モランにはなりきれませんでした。そのかわり楽しい考えがいくつも頭にうかびました。それは海の中の島のことや、生活に大きな変化がおこることについて、いろいろ考えたからでした。

そんなわけで、ムーミントロールはモランのことはわすれてしまい、朝の太陽が投げかけている長いかげの中を歩きながら、一つの遊びをはじめました。まず、太陽のてっているところだけを、歩かなければいけないのです。かげは海の底しれない深みです。もちろん、泳げないと考えてのことですけどね。

だれかがまき小屋の中で、くちぶえをふいていました。ムーミントロールがのぞいてみると、きれいな明るい金色の日の光が、まどのそばのかんなくずの山にさしていて、あまに油とやにのにおいがしていました。ムーミンパパが、小さなかしのとびらを灯台のかべに取りつけようと、

「ちびのミイちゃん、これはおもしろくなるぞ。」
「まさか。」
と、ちびのミイはいいました。
「なんだっておもしろいじゃないの――多かれ少なかれさ。でも、いちばんおもしろいことといったら、あたいたちが大さわぎをして荷物をしょって島へついてみたら、そこがほんとうにはえのふんだってことを発見したときね。」

朝の五時半をやっとすぎたころ、ムーミントロールは、庭じゅうモランの通ったあとをまわってみました。地面のこおったのはとけていましたが、モランのすわった場所は、よくわかりました――そこの草がすっかり茶色にかわっていたからです。
ムーミントロールは、モランが一時間以上すわった場所には、もう永久になんにもはえないことを知っていました。地面がおそろしさのあまり、死んでしまうのです。庭の中には、そういうところがいくつかありましたが、いちばんひどいことになっていたのは、まったくはらがたつことに、チューリップ花だんのまん中でした。
葉っぱのかれた広い道が、ずっとベランダのモランが立っていたところまでつづいていました。そこで、モランは、光の輪の外に立ってランプを見つめていたのですが、たまらなくなってラン

「もしいうとすれば、まず第一には、あの人たちはけっしてばかじゃないということだわ。だけどあのふたりは、なにかたくらんでいるんだわ。なにをたくらんでいるんだか、それがわかったら、あたしゃ、グアノ（海鳥の糞の石化したもの。肥料にする）だってもりもり食べてみせるんだけどな。」

「おまえなんかにわかるもんか。」

と、ムーミントロールはきつくいいました。

「ふたりは、なぜすこしへんなことをやるか、ちゃんと知りながらやっているんだぞ。へん、自分が養女になったからって、頭がいいと思いあがるない。」

「そのとおり、あたいはほんとうに頭がいいのよ。」

と、ちびのミイはいいました。

ムーミントロールは、地図の上の、はるか海のむこうにある一点を見つめて、思いました。

「パパはあそこに住みたいのだ。それがパパのいきたい場所なんだ。パパとママはしんけんに考えてるんだ、これはしんけんな賭けなんだ。」

するとにわかにムーミントロールには、島のまわりの海が上がったり下がったりして、波が音をたてはじめたような気がしました。島そのものは緑色をしていて、赤いがけが見えました。それはムーミントロールが絵本で見た秘密にみちたはなれ島、難破船や冒険にみちた南洋の小島でした。ムーミントロールは、のどにかたまりがつまったように感じて、小声でささやきました。

んどうなこともいっぱいあるだろうけど……。」
「なにをいってるの。」
と、ムーミントロールがききました。
「これがわたしたちの住みつこうとしている場所なのよ。」
と、ムーミンママはくりかえしました。
「これがパパの島なの。パパはここでわたしたちをやしなおうとしているのよ。わたしたちはここへひっこして、一生そこでくらして、なにもかもあたらしく、ほんとうにふりだしからはじめるのよ。」
「あたい、いつでもその点は、はえのふんだと思っていたわ。」
と、ちびのミイがいいました。
　ムーミンママは床へおりてくると、
「それには長くかかるでしょうよ。万事がちゃんとするまでには、ずいぶんと長くかかるでしょうよ。」
といってから、庭に出ていきました。
「あたいは母親や父親のことを、とやかくいおうとは思わないわ。」
と、ちびのミイは、わざと長くひっぱったいいかたをしました。

とソーセージをひっつかむと、暗やみの中へひとりで出ていきました。
「ふうん、あのひと、ぽっぽと湯げをたてたわね。もうすこし蒸気をふき出させとくがいいわ。きっとあのこけのところへいって、朝まで番をするつもりよ。」
と、ちびのミイは感動していいました。
ムーミンママはなにもいわずにいったりきたりして、夜のしたくをしました。いつものようにムーミンママは、ハンドバッグの中をのぞいてから、ランプを暗くしました。へやの中はしんとしていましたが、どうにもそのしずけさは不自然なものでした。
ムーミンママは、すみっこの洗面台のそばのたなにのっている、ムーミンパパの模型の灯台のところへきて、うわのそらでほこりをはらいだしました。
「ママ。」
と、ムーミントロールがよびました。
けれどもムーミンママは耳にもとめないで、かべにかかっている大きな地図のところへいきました。それは、ムーミン谷の地図で、まわりの海や島もかいてありました。ムーミンママがいすによじのぼると、ちょうど海の高さになりました。ムーミンママは海のまん中あたりの小さな点に鼻をくっつけると、つぶやきました。
「ここだわ。わたしたちが住みついて、すばらしい生活をしようとしている場所は。いろいろめ

いけれども、あの人は危険じゃないんですよ。そんなことあなたたちも知っているじゃないの。こわいことはこわいかもしれないけどさ。」

と、ムーミンママはいいました。

「もちろんあいつは危険だよ。おまえまでが、こわがったじゃないか。たしかにおまえはひどくこわがってたぞ——だけど、わしがこの家にいるかぎり、こわがることはないんだよ。」

と、ムーミンパパはどなりました。

「だけどパパ。」

と、ムーミンママはいいました。

「わたしたちが、モランをきらうのは、あの人があんまり冷たいからなのよ。それにあの人は、だれのこともすきじゃないんです。だけど、どんな害もしたことはありませんわ。さあ、そろそろねるとしましょうよ。」

「よろしい。」

と、ムーミンパパは火かき棒をへやのすみにもどしながらいいました。

「よろしいとも。もしあれがちっとも危険じゃないというんなら、おまえたちは、わしをたよりにすることはないわけだ。こいつはありがたいね。」

こんなすてぜりふをのこして、ムーミンパパはベランダへいきましたが、通りすがりにチーズ

かかり、すごく大きなひとりぼっちのかげができました。まどは、かみなりが遠くで鳴っているときのようにすこしふるえましたし、庭は息をつめているように思われました。モランは、ベランダのそばまでやってきて、暗い地面をてらしている光の輪のすぐ外側に、じっと立ちました。

それからモランが、さっとまどの下まですすみましたので、ランプの光がまともにかのじょの顔にあたりました。

しずかだったへやの中には、にわかにさけび声があがり、上を下への大さわぎになりました。いすはたおれ、だれかがランプを持ち去りました。数秒のうちに、ベランダはまっ暗になりました。みんなは家の奥の方の安全な場所に、とびこんでかくれ、ランプもかくしました。

モランはしばらくのあいだ、人のいないへやのまどガラスに霧氷をふきつけながら、じっと立っていました。やがて、ずるずるとはって、暗やみの中にきえましたが、通りがかりに足の下で草をガラスのようにくだいたり、ポキンとおったりしながら、ゆっくりゆっくりと遠くへたち去ったのです。庭じゅうはぶるぶるっと身をふるわして、葉っぱを落としてから、ようやくまた息をふきかえしました。モランはもう通りすぎてしまったのでした。もういってしまったのです。

「うちのまわりにバリケードをつくってとじこもったり、一晩じゅう起きていたりすることは、ぜんぜん必要ないと思いますわ。あの人は、きっとまた、庭の中のなにかをいためたかもしれな

「なぜ食べないの。」
と、ムーミンママはききました。
「わかんない。」
と、ムーミントロールはこたえました。
「ブラインドがあったかしら。」
「物置にあってよ。冬になってわたしたちが冬眠するまではいらないものでしょ。」
と、ムーミンママはいってから、ムーミンパパの方をむきました。
「ランプがついていますから、しばらくあなたの模型の灯台を、おつくりになりません？」
「ふん、子どもだましさ、ほんものじゃない。」
と、ムーミンパパはいいました。
　モランは、またすこしずりよってきて、ランプを見つめ、そっとその大きな重たい頭をふりました。モランが明かりの方へずりはじめると、その足のまわりにはこおった霧が



と、ムーミンパパはおちゃわんにむかって、ぶつぶつつぶやきました。
ムーミントロールは、いつものように、サンドイッチを自分の前に一列にならべました。はじめに、チーズをのっけたサンドイッチ、つぎにソーセージのを二つと、冷たいじゃがいもとサージンのを一つ、それから最後にマーマレードののったのを一つです。ムーミントロールはとてもうれしくなりました。ちびのミイが、サージンしか食べなかったのは、なんだかいつもとはちがった晩のような気がしたからでした。ちびのミイは考えこんで、庭の暗やみを見つめていましたが、考えれば考えるほど、食べれば食べるほど、その目はだんだん暗くなっていきました。
ランプの光は、草とライラックのしげみをてらしていました。けれども、かげになったところにさしこんだ光は、ずっとよわくなっていました。そこにはモランが、たったひとりですわりこんでいたのです。
モランが長くおなじ場所にすわっていたところは、地面はこおりついていました。かのじょが立ちあがってすこしばかり明かりに近い方へずっていきますと、草はガラスが割れるような音をたてました。葉っぱと葉っぱのあいだには、恐怖のささやきがかわされ、かえでの木からは二、三まいの葉っぱがくるくるっとまきあがって、ふるえながらモランのかたに落ちました。
アスターの花は、モランをさけてできるだけ遠くの方にからだを曲げ、ばったは声をひそめました。

と、ちびのミイはいいました。
「パパ、なにも気がつかないの。ランプだよ。」
と、ムーミントロールがさけびました。
「ええそうよ、日がみじかくなってきたから、ランプを使いはじめる時期だと、わたしは思ったの。すくなくとも今夜はそう感じるわ。」
と、ムーミンママはいいました。
「それでは、おまえは夏をおわらせるんだね。夏がほんとうにすぎるまで、ランプはともしてはいけないのだぞ。」
と、ムーミンパパはいいました。
「ええ、もう秋がくるんですもの。」
と、ムーミンママはしずかにいいました。
ランプはジージーと燃えました。ランプは、すべてのものを身近に、安全に感じさせ、小さな家族のみんなを、おたがいによく知りあい、信じあうようにさせます。光の輪の外は、知らないこわいものだらけで、暗やみは高く高く、遠く遠く世界のおわりまでもとどいているように思われました。
「うちによっては、ランプをつける時期をきめるのは、そこのうちの父親なんだが――。」

たのです。それを見ると、家族のみんなが、ムーミンパパだけの知っている深い海の底にいて、自分はみんなをまもってやる必要があるのだと、ムーミンパパは感じるのでした。

もうほとんど暗くなりました。このとききゅうに水晶玉の中に、ある変化がおこりました。光があらわれたのでした。ムーミンママがベランダにランプをともしたのです。こんなことは夏のあいだじゅう、ムーミンママはしなかったのですがね。それは石油ランプでした。いきなり、ほっとした感じが、たった一点、ほかでもないベランダの上に集まったのです。そしてそのベランダの上には、ムーミンママがこしかけて、みんながうちへ帰ってきたら、夕がたのお茶をのませようと、待っているのでした。

水晶玉はだんだん暗くなり、青はぜんぶ黒にかわって、見えるものはランプだけになりました。

ムーミンパパはしばらくのあいだ、考えがまとまらないままで立っていましたが、それから向きをかえて、家の方へ歩きだしました。

「さて、これで安心してねむれるだろう。危険は去ったはずだ。しかし、ねんのため、明けがたにもう一度いってみよう。」

と、ムーミンパパはいいました。

「ふふん。」

用事がありましたから、それはあたりまえでした。いつでも、みんなはなにやかやとやっていました。おそかれ早かれ、ムーミンママはかならず家の台所口から出てきて、ソーセージとかバターを取りに物置へいそぎました。それからまた、じゃがいも畑へいったり、たきぎを取りにいったりしましたが、そのたびにムーミンママは、まるではじめての楽しい道を歩くみたいに、いそいそとしていました。しかしなんともいえませんね。ムーミンママは、あるいは自分だけの楽しい秘密の用事があるのかもしれないし、またはひとりゲームをやっているのかもしれません。それともママは、ただ歩きまわるために歩きまわっているだけなのでしょうか。

さあ、ママがあらわれました。まるでいそがしい白いボールみたいに急ぎ足で、いちばん奥の青いかげのうちでも、いちばん青いところにあらわれたのです。それからべつに、ムーミントロールがいかにもムーミントロールらしく、考えにしずんだようすであらわれました。それからちびのミイが、スロープをかけのぼるのが見えましたが、その動きが見えただけで、姿はほとんど見えませんでしたっけ。ちびのミイは、きっぱりした性質の、独立心のつよい子で、だれにもたよりませんから、姿を見せる必要もなかったのです。けれども、水晶玉にうつると、みんなの姿はとほうもなく小さく見えましたし、みんなの動作も、とてもあわれっぽく、たよりなく見えましたっけ。

ムーミンパパはそれがすきだったのです。これを見るのが、ムーミンパパの夕がたの遊びだっ



し、全世界の色をかえて、冷たく遠くふしぎにしました。このガラスの世界の中心に、ムーミンパパは自分と、大きな鼻を見、そのまわりに姿をかえた夢のようなけしきがうつっているのを見ました。青い地面は、玉の深い深い内側にうつっていました。そしてムーミンパパは、自分のいくことのできないそんな奥に、家族のものがいやしないかとさがしはじめるのでしたが、いつでもすこし待っていると、家族のものは出てくるのでした。いつでもみんなは、この水晶玉の中にうつってくるのです。

夕がたにはみんなはいろいろと

こけの中に鼻をつっこんだムーミンパパは、けむりのすっぱいにおいをみとめました。でも、地面にはもはやぬくもりもありませんでした。ムーミンパパは、あなの中にすいかけのたばこをいれて、息をふきかけて火花を出させました。火花はいっしゅん出ましたが、すぐにきえてしまいました。ムーミンパパは、そのいまいましいこげあとをふみつけると、それから水晶玉を見に、ゆっくりと庭の方へおりていきました。

いつものように夕やみは地面からはいあがって、木々の下に集まってきました。水晶玉のまわりは、よそよりもいくらか明るさがありました。水晶玉は海泡石の台座の上にのって、庭全体をうつしていて、たいそう美しく見えました。それは、まさしくムーミンパパの水晶玉です。青くかがやくこのガラスの魔法の玉こそ、庭の中心で、ムーミン谷の中心であり、全世界の中心なんです。

しかし、ムーミンパパは、まっすぐには水晶玉をのぞきませんでした。最初にムーミンパパは、自分のきたない前足を見つめて、ばらばらになってぼやけている気持ちを、一つにまとめようとしました。できるだけかなしい気持ちになったところで、はじめて水晶玉をのぞきこんで、なぐさめてもらうのです。あの長い、あたたかい、美しい、そしてものがなしい夏の夕がたを、毎日ムーミンパパはおなじことをくりかえしてきたのです。

水晶玉はいつでもひえびえとしていました。その青は海の青よりももっと深くすんでいました

「パパは一晩じゅう、外にいると思う？」
と、ムーミントロールがききました。
「いるかもしれないわ。」
と、ムーミンママはいいました。
「おこるんならおこるがいいさ。」
と、ちびのミイは、歯でじゃがいもの皮をむきむき、意見をのべました。
「だれだって、ときにはおこるほうがいいのよ。どんな小さなはい虫だって、おこる権利はあるのよ。だけど、パパのおこりかたはいけないわ。パパはいかりを外へ出さないで、中にとじこめるんだもの。」
「まあ、パパは、自分のやっていることは、ちゃんと知っていらっしゃってよ。」
と、ムーミンママはいいました。
「そうは思わないわ。パパはちっとも知っちゃいないわ。そうでしょ。」
と、ちびのミイはあっさりといいました。
「ほんとうはね。」
と、ムーミンママもそれをみとめなくてはなりませんでした。

「これぐらいのこげあとなら、危険じゃないなんて思ったら、大まちがいだぞ。とんでもないことだ。こけの下でくすぶりつづけることだって、ありうるんだ。そうだろ。地面の中で、何時間も、いや、何日もかかるかもしれないが、とつぜんに、どこかまるきりべつのところから、ぼうぼう燃えだすんだ。わしのいう意味がわかるかい。」

「そうよ、あなた。」

と、ムーミンママがこたえました。

「だから、わしはここにいるよ。」

と、ムーミンパパはいって、おこったような顔でこけの中をほってみました。

「わしはここで番をするよ。必要とあれば、一晩じゅうだってここにいるさ。」

「あなた、ほんとうにそんな必要があるかしら。」

と、ムーミンママがいいはじめましたが、思いなおして、こういっただけでした。

「いいわ。ほんとにごしんせつさま。こけときたら、どんなことがおきるかわかりませんものね。」

ムーミンパパは午後いっぱい、その小さな黒いこげあとの番をしていました。いちばんはじめには、その焼けこげのまわりのこけを、すっかりぬいてしまいました。ムーミンパパは、夕食にも、うちへはいりませんでした。おこっているのだと、ほかのものたちに思わせたかったのです。

　ムーミンパパは、さっと立ちどまりました。いかりがこみあげてきました。

「わしをなかまにいれないで、おまえたちだけでけしたのだって？　なぜ、だれもわしにいってこなかったのだ。おまえたちは、なにもいわずにわしをねかしておいたのか。」

「だけど、あなた。」

と、ムーミンママが、台所のまどからのりだしていいました。

「あなたを起こす必要があるとは、ほんとうに思わなかったのですよ。ほんのぼやで、ちょっぽりけむりが立っただけなんですもの。わたしがちょうど、水のはいったバケツを持って通りかかったので、ゆきずりに二、三ての水をはねとばしただけで……。」

「ゆきずりに水をはねとばしたって。」

と、ムーミンパパはどなりました。

「水をはねとばしたって、ほんとうかい。なんということだ。それじゃあ、火はこけの下で、どんどん燃えていくだけだぞ。それはどこだ、それはどこだ。」

　ムーミンママはやりかけの仕事をやめて、たばこ畑へ、ムーミンパパを案内していきました。ムーミントロールはベランダにのこって、ふたりを見ていました。こけの中の黒いこげあとは、ほんのちょっぴりした小さな点でした。

　さいごに、ムーミンパパは、のろのろといいました。

ミンパパは、帽子を目の上までひきおろして、ねむりの中ににげこんだのです。

「パパ、起きて！　ぼくたち、いま、山火事をけしたんだよ。」

と、ムーミントロールがいいました。

　ムーミンパパの二本のあと足は、床にぺったりとくっついていました。ムーミンパパはやっとこさ足をはなしましたが、とてもいやなむちゃなことをされているような気がしました。

「なんだって。」

と、ムーミンパパはききました。

「ほんものの小さな山火事だよ。たばこ畑のすぐうしろさ、こけが燃えたんだ。ママはえんとつから出た火花のせいかもしれないって……。」

と、ムーミントロールはムーミンパパに話しました。

　ムーミンパパは、ゆりいすからとびあがると、まばたきをするよりも早く、責任感にあふれた父親にもどりました。帽子は階段をころげ落ちました。

「だけど、もうきえちゃったよ。」

と、ムーミントロールがさけびました。

「ぼくたちで、すぐにけしたんです。パパがしんぱいすることはなにもありはしないよ。」

「さあ、おいで。ごらんよ、おまえたちのあたらしいベランダだよ。」
こういってわしは、みんなをいれてやるんだ。
……いや、こいつはまったく暑すぎる。ヨットにのりたいなあ。海に出ていって、ありったけ遠くまでいったら……。）

ムーミンパパは足の先にねむけを感じました。そこでぶるっと身ぶるいをしてから、パイプに火をつけました。マッチが灰ざらの中でなお燃えつづけるのを、ムーミンパパはうっとりと見つめました。火がきえかかったとき、ムーミンパパは新聞紙をすこしさいて、ほのおの上にのせました。それはきれいな小さいほのおで、日の光の中ではっきりとは見えませんでしたけれど、よく燃えていたのです。ムーミンパパは注意ぶかくそれを観察しました。

「またきえるわよ。もっと燃しなさいよ。」

と、ちびのミイがいいました。おちびさんは、日かげになったベランダの手すりにこしかけていたのです。

「ああ、おまえか。」

と、ムーミンパパはいうと、灰ざらをふりまわして火をけしました。

「わしはただ、火の燃えぐあいを見ていたところさ。だいじなことだものね。」

ちびのミイはけらけらわらって、なおもムーミンパパをじっと見つづけました。そこで、ムー

いていて、一にぎりほどの地面さえものこされていないのです。
みんなはおたがいにささやきあいました。
「パパときたら、いつでも八月になると、山火事の話をするんだね。」
ムーミンパパは、ベランダへ出る階段をあがりました。足には、ニスがべたついて、階段をあがってゆりいすのところへいくまでのあいだ、ずっと小さなピタピタいう音がしました。しっぽもまた床にくっついて、だれかに引っぱられているみたいな感じでした。
ムーミンパパはいすにこしかけると、目をつぶって考えました。
（床のニスは、ぬりかえなければいけないなあ。こんなにべたつくのは、暑さのせいだけれど、上等のニスだったら、暑いからといって、とけたりはしないはずだ。たぶん、わしがニスの種類をまちがえたのかもしれんぞ。このベランダを建てたのは、ずっとむかしのことだから、ニスをぬりなおすにはちょうどいい時期だ。
けれど、まずさいしょに、紙やすりでこすらなければならないぞ。そのいやな仕事をわしがしたって、だれも感謝してはくれんだろうな。だが、太いはけで、てらてら光るニスをぬったあたらしい白い床ときたら、そりゃまたかくべつだからなあ。
仕事ちゅうは、家族のものたちはじゃまにならないように、裏口を使わせることにしよう。仕事がすんだら、

してきました。何度も何度もくりかえして、八月ちゅうは火の注意がどんなにたいせつか、いってきかせたものです。ムーミンパパは、ムーミン谷が燃えるようすや、ほのおのうなりや、白熱した木の幹や、こけの下をはってすすむ火のことなどを、手にとるように話してきかせました。また、夜の空たかくまきあがる火柱のかがやきとか、火の波が谷をつっ走って海にむかうようすとか……。

「火の波は、シューシューいいながら、海にとびこむんだぜ。」

ムーミンパパは、顔をくもらせながら、こう話しおえて、満足するのです。

「なにもかも燃えて灰になってしまうのだ。マッチを手にする小さい生きものには、とても大きな責任がかかっているんだよ。」

家族のものたちは、やりかけの仕事をやめて、

「そうですとも。もちろんそうですとも。」

というと、それからまた仕事をつづけるのでした。

みんなはいつでもなにかやっていました。しずかにやすみなく、むちゅうになって、自分たちの世界を形づくっている一つ一つの小さなことがらに、取りくんでいたのです。その世界は、まったく自分たちだけでつくりあげているもので、外からはなにものもはいりこむ余地はありません。ちょうど、すみからすみまでわかっている地図のようなものなんです。どこにも人が住みつ

第1章

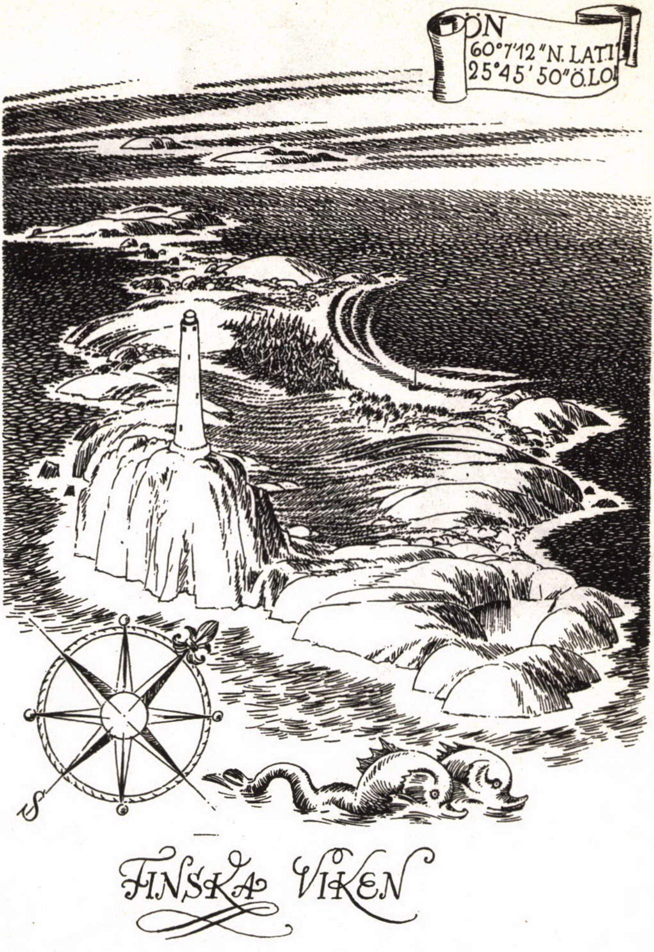


水晶玉の中の家族

八月末のある日の午後、ムーミンパパがしょんぼりと、庭を歩きまわっていました。なにをしたらいいか、わからなかったのです。なにしろ、しなければいけないことは、自分かほかのものかが、もうすっかりやってしまったように思えましたもの。

ムーミンパパは、かなしそうにしっぽをかわいた地面にひきずりながら、あてもなく庭をぶらつきました。ムーミン谷は、焼けつくような暑さで、なにもかもひっそりとして、しかもかなりほこりっぽかったのです。この八月は山火事がおきるおそれがあり、おおいに気をつけなければならないのです。

これまでにもムーミンパパは、家族のものに警告



フィンランド湾(わん)



✖うみうま

美しいたてがみを持ち、
銀のかなぐつをはいた
二頭のうみうまは、
月のきれいな夜に
海べであそびます。

✖漁師

ひとりさびしく、みさきに住んでいますが、
たんじょう日に、ムーミン一家にまねかれ
ます。





✖モラン

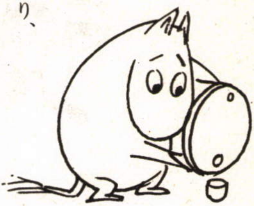
ムーミン一家の明かりを追って、
島にまできたおそろしい氷の魔物。
島の植物はおそれおののきます。

おもな登場人物

ムーミントロール

モランとなかよしになったり、
うみうまと友だちになろうとしたり、
島ですることは、いっぱいあります。





ちびのミイ

ムーミン一家の養女に
なったかのじょは、
島にやってきても、あ
いかわらずひにくや。



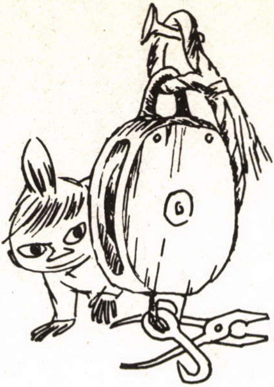
ムーミンママ

島の生活にうるおいをもたせようと、
花だんをつくったり、かべに絵をかいたり、
いつもいっしょうけんめい……。

ムーミンパパ

あたらしい天地をもとめて島にきたパパは、
みんなのしあわせをねがって、大ふんとうします。
そんなパパに、海はつめたくあたります。

もくじ



PAPPAN OCH HAVET

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

Copyright © 1965 by Tove Jansson

Japanese language paperback rights arranged
with Holger Schildts Forlagsaktiebolag, Finland,
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

ムーミンパパ海へいく

トーベ＝ヤンソン／作・絵　小野寺百合子／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

ムーミンパパ海へ行く

トーベ＝ヤンソン／作・絵
小野寺百合子／訳